
日陰貴族

黒轍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日陰貴族

【Zコード】

N7452W

【作者名】

黒轍

【あらすじ】

私オルカは、ツヨーヴラーグ城で行儀見習いとして働く貴族の娘。お茶目な失敗（当社比）を繰り返しつつ、それなりの侍女ライフを送っていた。今回の失敗など、今までのものと比べても実に些細なことはず。にも関わらず、何だか周りの空気が不穏になり始めたぞ。阿保な彼女と盲目な彼が、じわじわ距離を詰めてくおはなし。

0・終章（前書き）

以前ゲーム用に考えていたものを小説にしてみました。
よろしくお願ひいたします。

「ルカ……！……オルカつたら……！」

強く肩を揺さぶられて、私は意識を無理矢理引き戻された。驚いて見上げたそこには、自分と顔・背格好が瓜二つの娘が私の顔を覗き込んでいる。

すぐに双子の妹であるカノンだと判断し、同時に少し苛立つてゐるなあと、他人事のように思った。

「もう…さつきから呼んでるのにずっとほーっとして……！」

隙なく化粧が施された彼女の顔は、続く言葉を発する前にしかめられた。

「また傷口のことを感じてること？」

カノンの目線の先、また先程までの私の目線の先は、私自身の掌である。

そこには塞がっているのか塞がっていないのか、ぎりぎりのラインで、切り傷が刻まれていた。

大きさは5cm程で、その傷口は、例えば包丁を滑らせたような綺麗なものではない。まるで裂け目や亀裂のような形である。

私は今日何度目かはわからないが、改めてその傷口をしげしげと見つめた。

「思い出せないの。どうしてこんな傷がついたのかしら」

「……あなたお城から帰つて来てから、口にするのはそなへかりね

カノンの聲音から苛立ちは消えなかつたが、同情が新たに混じつた。

「何か大切なことだつた氣がする」

「怪我の思い出だなんて、きっと碌なものじゃないわ。……ねえ、やつぱりあなた、お城で虚めに遭つていたんじゃなくつて？」

「…………。わからない。でも、この傷を見ていると、とても大切でかけがえのないものを忘れたような気になるの。苦しくて悲しいんだけど、愛しくて切ない、冷たくて熱い……そんな気分だわ」

するとカノンは黙り込んでしまつた。

掌から目を離して、彼女の顔を窺うと、何やら複雑な表情を浮かべている。言いたいことを言つべきか言わぬべきか、逡巡しているようだ。

私はカノンの考察に興味がなかつたので、更に言つと予想がついたので、再び傷口に目を移す。

そして敢えて自分の感情を言葉にする作業を続けた。

「何で忘れてしまつたんだろう。私の馬鹿」

「忘れてしまつたものは仕方がないわよ」

カノンは複雑な表情の説明をすることはやめたようだ。

私は内心安堵する。

彼女が今私の部屋で何の用事で來たか、私はわかっている。

私の心の傷口には触れさせず、しかしその痛みを知つてもいいつことが私の言動の動機である。

そして、お互い素知らぬ振りで、全ての時間をやり過ごせねば良いと私は思った。

何も具体的なことは思い出せないにも関わらず、私にそんな行動を取らせる、この傷口はそれ程までに私に訴える力を持っていた。

「忘れるくらいなんだから、きっと大したことじや ないわ

カノンのその言葉はとても正しいことだと素直に思つた。私以外のことに関しては。

だから同意する気も訂正する気も起きず、沈黙を保つた。

「ねえといひで、悪化してない？その傷

「さあ……

即答してからしまつた、と思つ。この質問を最初から見越していたかのようではないか。

しかしカノンはそんなことは気付かなかつた。

「怪我もそうだし、記憶喪失もそうだし、なかなか治らないものなのね

単純明快な彼女の性格に、今程感謝したことはなかつたかもしない。

二人の間に居たたまれない空気が流れる前に、カノンは姿勢を正した。

「さあ、そろそろ時間よ。お父様が下で待つてゐるから、準備ができたら行くのよ。初めての縁談だから緊張するかもしねりだけど、粗相のないよう」「

そう言い残すと、カノンはドレスを翻して部屋を出て行った。

1・ミルキア

『お姫様』。

一般女子であれば、この単語に憧れを抱いたことのある者は、少なくないのではなかろうか。いやむしろ9割以上憧れたことがあるのではなかろうか。

かくいう私も例外ではない。昔も今も、憧れを抱いている。何故かといふと、いち・お金に困らない、に・ちやほやされる、さん・何かきらきらしている、というものである。

本物のお姫様が聞いたら怒るだろうか。「まあ世間の認識はそんなものでしょう」と気にもしないだろうか。或いは「ええその通りですのよ、おほほほほほ」と嗤つのだらうか。

この国にお姫様は今現在存在しておらず、私は他国のお姫様と言葉を交わす機会もなかつたので、本物のお姫様の心境は全くわからぬ。

しかし王城で侍女として働いてる昨今、実情がどうあれ、「ああここにいる理由が侍女でなくお姫様だから、だつたらいいのに」と益々羨望を募らせるばかりだ。

何故かといふと、それは最近付加された四番目の理由による。

よん・鬼上司に何度も呼び出されない。

「オルカ！オルカは何処ですか！」

「何でしちゃうか？ミルキアさん」

太陽の位置が随分と低くなつた頃、私は本日一度目の呼び出しを食らつた。

私はショーヴラーグ城に行儀見習いとして勤めており、ミルキアさんは私の上司である。

彼女は黙つていれば相当端正な顔立ちを、そこまでしなくてもと いう程に歪めていた。

「あなた確か、先程まで会議室の清掃を行つておりましたわね？」

ミルキアさんの全身からは、凄まじい怒氣、というか、殺氣が放出されているが、近付いて来る物腰は大変優雅である。それがとても怖い。

「ええ。しておりました」

内心はがたぶるであるが、捻くれ者な私はそれを素直に表に出すこと ができない。」ういうつ修羅場に限つて飄々と答えてしまう癖がついていた。

「それは終わりましたの？」

「はい、終わりました。ので、今はこちらの廊下を手伝つておりま す」

「そう、それは大変良い心がけだわ」

不覚ながら一瞬、『あら、珍しく勘違いかしら。あなたが大事な会議の時間が迫つて いるから、早く終わらせるようにつて催促したんじやないですかー。無駄に怖がらせないでくださいよぶつぶー』

などと思つてしまつた私は、勿論馬鹿である。

「ところあなた、雑巾を一枚手に持つてゐるよつですけれども、他の掃除用具は如何なさいました？」

密かに囁つた内心の私が石化するのがわかつた。
やういえばどうしたかしら、と考えれば、段々血の氣も退いてくる。

「大変申し訳ございません。会議室に置き忘れました」
「そのようですね。早く取つて来なさい」
「よろしいのですか？会議はもつ始まつてゐるかと……」
「わかつてゐるようで何より。用具はわたくしが片付けておきました」

金糸で縁取られた碧眼を僅かに細めて、ミルキアさんは淡々平然と微笑み。

本氣で私を行かせて恥をかかせようとしたのか、それとも私が失敗を正確に理解してゐるか試すつもりだったのか。ミルキアさんは厳しいが、意地悪なわけではないので、後者だとは思う。というか、思いたい。今現在もミルキアさんは、私の「できるなら関わりたくない人」ランキングの三位くらいにはいるわけだが、彼女の邪悪な性質まで認識してしまつたなら、私は間違いなく行儀見習いを中退させていただく。

ミルキアさんは私からどう思われてゐるかなど承知の上だらうが、表向には、やはり消極的な感情を出すわけにはいかない。
私は出来る限り安堵が伝わるように微笑んだ。

「ありがとうございます。本当に良かつたです

しかしこの美人上司は、そんな私の努力を汲む気はさうもないらしく、「何が良かったというのです」とこちらを睨んだ。

「言つておきますけれど、わたくしがあなたの失態に気付いたのは会議が既に始まつた後です」

あ、やつぱりそつだつたんだ、と私は不真面目に思つた。でないと、流石のミルキアさんもここまで殺氣を露わにしないだろ。

「そして勿論あなたも存じているでしょうが、本日行われたのは三国首脳会談です。あなたは他国にまで恥を晒したのですよ」「申し訳ございません……」

駄目押しがずんずん重なると、何故だか妙な余裕が出てくる。私は各国のお偉方の白い目線を浴びつつ、掃除用具を片付けるミルキアさんの図を、つい思い浮かべた。

これが私であれば、脳内には「な・ん・で・わ・た・し・が」という言葉が延々と流れ続け、怒りという単純な感情のみが支配したのだろう。

しかし眞面目なミルキアさんの心情を察するに、きっと「部下の失態はわたくしの責任……」と考え、より一層複雑な気分になつていそうだ。

頭の良い人間になるものじゃあないわね、と現実逃避に結論付けをした。

ミルキアさんは恼ましげにこめかみを揉む。

「一体今までに何度あなたを呼び出したことか……」

今日はまだ二度目ですよ、などとは、口が裂けても言つてはいけない。

「良いですか。あなたがお仕えしているのは、イーティル陛下その人なのですよ。そのことを常に自覚し、緊張感を持つて仕事に当たつてください」

「はい……」

私は神妙に頷いた。

「確かにあなたは貴族の令嬢です。しかしここで働く以上は、求められることは平民出の侍女達と同じです。甘い気持ちでできるとは思わぬように」

「はい」

会話が途切れると、ミルキアさんは姿勢を正し、聰明そうな眼差しを改めて私に向けた。

彼女はけじめや切り替えがきちんとしており、気持の良い人間だと、他の侍女達から好かれている。

私のような他称問題児ちゃんにとつてはとても「好き」とは言い難い人種なのであるが、私もその点は尊敬している。

「では次の仕事です。東庭園に行つて、庭師に花材を貰つて来て頂戴。それをアリシアのところに届けてほしいの。庭師にはアリシアの名前を出せばわかるはずだから」

「はい。行つて参ります」

わたしがへこつとお辞儀をすると、ミルキアさんは小さく頷き背を向けた。

そしてまた音なく遠ざかっていく。
私は持っていた雑巾を同僚に預けると、そそくさと東庭園に向か
つた。

私は一階まで階段を降り切ると、渡り廊下を伝つよつとして東庭園に向かつた。

傾いた陽光が宮殿内を柔らかく染め上げている。

私はまたしても、自分がお姫様だつたらなあ、と心の中で独りごちた。

お姫様だつたら、この景色をのんびり眺めていられるのに。

東館を裏口から外に出ると、小さな広場の向こうに庭園の柵と門が見えた。

門の傍には一人の騎士が突っ立つていて。

人待ちか休憩かな、と思いつつ、私は小さく会釈して通り過ぎようとした。

すると唐突に肩を掴まれた。

同時に野太い、少し掠れた声が響く。

「おーいおいおい。お嬢ちゃん、どこに行くつもりだ？」

まさか声をかけられるとは全く想定していなかつたので、私は返事をするよりも先に、まじまじと相手の顔を見てしまつた。

男は大抵の騎士の例に漏れず精悍な体つきをしているが、姿勢が悪く、どうにも頼りない雰囲気を醸し出している。緑を基調としたツェーヴラーグの騎士の制服は本来かなり格好良い。はずなのだが、この男が着ているものは、目立つた皺がないにも関わらず、何だかくたびれて見える。寝ぐせの立つた髪は焦げ茶と薄茶が混ざつてお

り、目は桃色。眠たげな瞼がやや下がり気味。

今見たかんじでも十分背が高いので、きちんと背筋を伸ばせばかなりの巨漢ではなかろうか。

低い声やら鍛え上げられた体やら大きいやら、よくよく見れば強そうなステータスを持つている。持つてはいるが、その印象を凌駕する程に、「だるそう、めんどくさそう」といつ空気を遺憾なく発揮している男であった。

ついたつぱり時間をかけて観察してしまい、恥ずかしくなつたが、男のほうは特に気にしている様子がない。ずっとこちらをぼんやり見つめている。この人目の焦点合つているのだろうか。

何だか素直に答えるにはとても今更なタイミングだが、私は男に向き直つた。

「…」の奥に行くつもりです
「何をしに？」

少し不審に思つた私は、咄嗟に黙りこむ。

今まで城内の騎士達に話しかけられることなど滅多になかつたこともあるからかもしれないが、それはさておきこの人自身がどうも胡散臭い。

もしかして新手の軟派なのだろうか。

「……あんた今物凄く失礼なこと考えてないか？」

私の疑わしげな視線がばれていたらしい。まあいいや。

「あのな、ここから先は関係者以外立ち入り禁止区域だぞ」

予想だにしていなかつたことを告げられ、私は目を瞬かせた。東庭園が立ち入り禁止などとは、聞いたことがない。

「俺は」」」の門番。……本氣で知らなかつたつて顔だな」

「知りませんでした。」」」に来るのは初めてだし、そんな話を聞いたこともなかつたし……」

「何かの間違いじゃないか？あんたこの先に何があるか知つているのか？」

「庭、ですよね」

私が答えると男は口を閉じた。

彼のだるそうな雰囲気がその心中を隠しているようで、何を思つて沈黙したのかがわからない。トランプに強そうな人間だ。

「本当に何をしに来た？」

眠たげな目が、心成しか鋭くなつたようだ。

何やら危うい状況になつた気がして、私は正直に答えることにした。

「庭師から花材を受け取りに來たのです。それを、生けるのが得意なアリシアという侍女に届けると、そう言わされました」

「庭師？ハイネに用があるのか？」

「ハイネさんというのですか？名前などはお聞きしておりませんでしたが」

「一体誰に頼まれたんだ？」

「ミルキア、といつ名の侍女です」

ミルキアさんの名前を出すと、彼は今までの問答が嘘のように得心したようだつた。

「ミルキアか。一応聞いておくが、家名は？」

「……ミルドボーズ、だつたでしょうか」

「……ミルドローズな」

「ああ、そんな気もします」

ミルキアさんのことを探し出すと、何だか落ち着かなくなつてき
た。

アリシアさんが今どんな状況で花材を欲しているのかは知らない
が、もしかしたらかなり急ぎのことだったかも知れない。
そうだとしたら、本田二度田の大田玉となる。

「あの、もうよろしいでしようか？こんなところに油売つてると、
ミルキアさんに怒られる可能性があるのですけれど。そうなつた場
合あなた様に責任転嫁してもよろしいでしようか」
「う。それは勘弁してくれ。通つていいで。あんた嘘が吐けなさそ
うだしな」

最後の言葉は褒め言葉として受け取つておひつ。

私はだるやうな騎士に再度会釈すると、門をへぐつた。

門をくぐると、人が一人通れるくらいの狭い道が奥へと続いていた。

道の左右には色とりどりの草花がほぼ対称に植わっている。ハブも混じっているらしく、私は早足で道を行きつつ、庭園を視覚と嗅覚で楽しんだ。

しかし歩を進めるにつれ、段々その余裕がなくなってきた。歩く速度は徐々に遅くなり、ついには立ち止まる。

これって本当に、「庭園」？

私の歩くその場所は、王宮内の庭としては実に広いわりに、実に平易なデザインだった。

私が歩く真っ直ぐな小道、そこから時々分岐する同じ狭さの道、左右対称の草花、道から少し離れた場所には左右対称ではなくも、やはり同じような背丈の同じような草花が植えられ、庭園の両脇から薄暗い森が続く。

「東庭園」などという名前で呼ぶよりは、普通に「道」、或いは「畑」と呼ぶほうがしっくりくる気がする。

加えて、庭師どころか入っ子一人見当たらない。

関係者以外立ち入り禁止区域だそうなので当然なのかもしけないが、いい加減誰か現れてくれないと不安になつてくる。

ミルキアさんは何故、敢えてこの庭園を指定したのだろう。ツェーヴラーグ城には他にも幾つか主要な庭園が存在する。

全てを見たことがあるわけではないが、例えばこの間目にした南庭園などは、広さはここより大分劣るもの、花の種類などは倍以上の種類があつたように感じる。

それとも、この立ち入り禁止区域だからこそ手に入る貴重な植物などがあるのだろうか。

もしくは、この先に本当の東庭園がある、とか？
脇の森を別にすれば、背の高い植物などは植わっていないので、他の小道に誰かがいても見つけられるはず。
そうすると、いるとしたらやはり奥だらう。

進むべきか戻るべきか決めあぐねていると、前方から砂利を踏む音が聞こえてきた。

私は心底ほつとした。

やつて来る人物を見るに、少なくとも庭師ではなさそうだ。
痩身の男で、仕立ての良さそうなスーツを着ている。
遠くからぱつと見たかんじでは、学者や研究者関係かな、と田星をつけた。

どんな人種であれ、これで情報収集できそうだ。

私は進むか退こうか迷い立ち止まつているところだったので、彼がこちらに来るのをそのまま待つことにした。
男は急いではないようで、むしろ歩みの速度はかなり遅い。
まあ忙しくしていないといつのは、いはうことっては好都合である。

ずっと見つめているのも失礼だと思った私は、そっぽを向きつつ、聴覚を男のほうに集中させた。

静かに砂利を踏む音は、ゆっくりではあるものの、確實にこちら

に近付いてくる。

そろそろ止まるだらうか、いや、まだだ。
まだ？

あれ、足音の他にも、何かを小刻みに叩くような音が聞こえる。
え、まだ寄つてくるの？

この道幅では明らかに、私が体勢を変えない限り、一人がすれ違
うことなどできない。

流石にこれ以上迫られるとぶつかる、といふところで、私は我慢
できず振り向いた。

同時に私の靴に、二つ、と軽い衝撃が加わる。男の歩みも漸く止
まった。

眼前の男は、私と比べれば頭ひとつ分高かったが、男性の中では
少し小柄なほうだ。そして遠目でもわかつたが、近くで改めて見て
も、細い。「がりがり」の一歩手前くらいではなかろうか。

肌は白い。こちらは「青白い」の一歩手前といったところか。

きめ細かな銀の髪や、量や長さをとっても申し分ない銀の睫毛は、
女性として大変羨ましいと思つた。顔の造りも中性的とまではいか
ないまでも、「格好良い」というよりは「綺麗」という言葉が似合
う。

軽く押せば倒れそうな、そよ風が吹けば飛んで行つてしまいそう
な、霧がかかれば塵と化して消えそうな、そんな儂い印象を持たせ
る男である。

そしてそれらを差し置いても田立つのは、その田と、私の靴に触
れた杖だった。

彼の瞳は水色だが少し濁っていて、そして虚ろである。先程の騎士とは比べ物にならないくらいにはっきりと、その目は焦点が合っていないことがわかる。これは精神的なものではなさそうだ。

手に持つ杖は、例えば老人の持つそれより一分の一程細いようだ。持ち手は金銀宝石類で装飾されており、それを包む指は、少し退いてしまう程細長かった。

生氣のない目で、支えることだけを目的としているのではなくそれが杖。

この一点が示すところは明らかだ。

彼は、光のない生活を送っているのだ。

「知らぬ者のようにだが、誰だ？」

ふいに男の薄い唇から静かな声が発されたので、私は肩を上げた。彼が言葉を発する生き物だと認識できていなかつたようだ。

「オルカ・コーディスと申しまして、侍女として働いている者です

「私が見えていないにも関わらず、初対面だということに彼は気付いている。

ある感覚を失った人間は、他の感覚がすば抜けて発達することがある、と聞いたことがあるが、この男もそうなのかもしれない。

それでも流石に、エプロンやメイドキャップは嗅覚や気配ではわからないだろうと思い、私は自分の職業も告げた。

男は小さく頷いた。

「何の用だ？」

来るだらうなと思っていた質問はやはり来たが、彼の声音に不審がつているような響きはない。

別に後ろめたいことは全くしていないのだが、普段責められることが多いだけに、私は少し拍子抜けした。

「ミルキア・ミルドボーズ、という侍女に頼まれまして、庭師から花材を受け取りに参りました」

「……ミルドローズではなく？」

「あ、そうでした」

またやつてしまつたと、心中で舌を出す。

普段から「ハゲろ」とか念じていると、いつこうときには表れてくれるのかも知れない。

男は表情を変えることなく続けた。

「庭師なら自室に帰つたと思つ。この時間帯、外に出ていることはまずない」

「え。 そうなのですか」

「ミルキアならそれくらい把握していそうなものだが。珍しいな」

「……そうですね」

しかし困つたものだ。できれば、ここで引き下がつて万が一でもまた怒られるのは、「こ」免こ」うむつたい。

「もしよしあければ、庭師の方の部屋を教えていただけませんか？」

「…………」

すると男は口を閉ざした。
駄目なのだろうか。

「では、恐れ入りますが、庭師の方を呼び出していただく……とか、
できませんでしょうか」

どうにかこうにか、恐らく本田最後であろう仕事くらいは、後腐
れなくこなしたいものだ。

「それは、ミルキアの権限では無理だろ。……だが、私の権限で
は可能ではある」

ミルキアよりも自分のほうが立場が上である、と言いたいのだろうか。

できるかできないか、シンプルな答えを予想していた私は、何故
今更そんな情報を持ち出してきたのか察することができない。

何にせよできるのであれば呼び出してもらい、仕事を成功させたい。

私は単純に自分の希望を言つことにした。

「失礼なことを申し上げては存じておりますが、どうか、あなた様の権限で呼んでいただけないでしょうか。お願いたします」「訴えるような表情は苦手なのだが、誠実そうな声なら得意である。相手がこの人で良かつた、と思つてしまつてから、私は自分の不謹慎さに内心かなり反省した。

男は頷いたので、私はよつしゃ、と手を握る。

「しかしその前に、私もあなたに頼みたいことがある」

握った手から力が抜けた。

まさか条件を持ちかけられるとは思っていなかつた。

「ええと、自分からお願ひ申し上げて恐縮なのですが、私今あまり時間がなくて……一先ず今頼まれた仕事を終えてから、とかなら……」

「ミルキアのことなら、心配せずとも良い。何か言われたら私の責任にしてくれて構わない」

「そ、そりですか？」

先程の権限云々の話は、そういう含みだったのか、と理解した。

「来い」

一方的に言い置くと、彼は踵を返した。

華奢な杖を細かく操つて立ち位置を確認しつつ、来たときよりも早い足取りで進んで行く。

私は彼について行くのを、少しの間躊躇つていた。
ミルキアさんから言い付けられた仕事を遅らせるこについての躊躇い、だけではない。

門番付きの庭。
立ち入り禁止区域。
盲目の男。

そういうたものに、私は得体の知れない恐怖を感じていたのだ。

「この男の前ではとても言えないが、気味が悪いと、そう思つてしまつた。

しかし男は、私が付いて来ていることを察知していた。

「何をしている。早く来い」

彼の背からそんな有無を言わさぬ言葉が發されれば、私の竦んだ足も前進せざるを得なかつた。

4・変わり者

しばらく歩くと、前方に再び、黒い柵と小さな門が現れた。

門の横には、やはりその番人であるつ軽装の女が待機している。

そしてその奥には、今度こそ白信を持っており呼べるであり、「庭園」が広がっていた。

「ここってやっぱり、ただの通過点みたいなものだったのですね」「会話がないことにあまり耐久力のない私は、当たり障りのないことをぼやいた。

「『通過点』？」

「私はてっきり、今歩いているここが東庭園だと思ってたのです。でも、それにしてはあまりにもシンプルすぎると感じまして。やはりここが東庭園というわけではなかつたのですね。奥が……ぐふつ」

すぐ前を行く彼がいきなり歩みを止めたため、私はその背中に遠慮なく衝突してしまつた。

ふいのことだつたので、悲鳴を乙女モードに変換する余裕もなかつた。

意外だつたのは、加減なくぶつかつたにも関わらず、男がびくともしなかつたこと。

とても丈夫そうな外見ではなかつたので、恨みと共に焦りも感じていたのだが、その点は心配いらないようだ。

彼は鷹揚にこちらを振り返つた。

しかしさの表情は驚いたような、訝しんでいるような、形容しがたいものである。

「……あなたは『東庭園』に来たのか
「？そうです」

庭師を探しに来たくらいなのだから、当たり前ではないか、と私は思った。

男は複雑な表情を崩すことなく、しばしの間固まっていたが、やがて興味を失ったかのように再び歩き出した。

私は首を捻つてから、彼の後を追いかける。

学者や研究者は変人が多いと言つから、やはり彼もそうなのだろうなど、一人で納得した。

やがて門の近くまで来ると、番人であるう女が不思議そうに声を上げた。

「あやや？ 可愛い子連れてますねえ、シゼル様。誰ですか？ 彼女ですか？」

しかし男は、女のほうなど見向きもせずに通り過ぎる。

私は少し居心地悪く感じつつも、女に軽く会釈をして通り過ぎた。目が合つと、女はにっこり微笑んだ。

「行つてらつしゃーい。『テート、楽しんで来てねー』

私も徹底的に無視するんだつた、と後悔した。

「薔薇の咲いてるところに、案内してほしい」

彼にそう言われて、私は心の底からほっとした。

先程から、一体何を言い付けられるのだろうと、ずっと落ち着かなかつたのだ。

何せ立ち入り禁止区域にいる不可解な人間が相手なので、法に抵触することとか、身を危険にする」ととか、取つて喰われることとかを想像していた。

やけにロマンチックな依頼で、目前の男の変人度は増したが、先に考えていたことよりは大分ましである。

「……今何か失礼なことを考えていいのか？」

「何故だらうよく言われる」

「考えていたのか」

「イエイエメッシュウモゴザイマセン」

私の表情がわからないにも関わらずそんなことを読み取るだなんて、「すごーい」を通り越して、何だか化け物じみたところがある気がする。

「この庭園内で、薔薇があるといふことお連れすればよろしいわけですね？」

「そうだ。流石に花園となると、においの種類が多過ぎて、特定の花を探しだすのが困難だからな」

「了解いたしました。が、ざっと見たかんじ、薔薇だけでも色や種類がかなり豊富なようです。どのようなものをこ所望でしょーうか」

「そうだな……。一先ず、一番手近なところ
かしこまりま……」

そういうえば、田の見えない人を案内するのだった。
そうすると、手を取つて導いたほうが良いのだろうか。
しかし初対面の男とお手々繋いで歩く、といつには些か抵抗がある。

「どうした」

「ええと、どのようなご案内したら良いものかと思いまして
「普通に前を歩いてくれればそれで良い。後から付いて行く
「あ、ありがとうございます」

私の心配は杞憂だつたようである。
においてか、気配とか、足音とか、そういうものでわかるのかも
しない。

「では、行きます」

洒落た言葉が何も思いつかなかつたので、率直にそれだけ言つと、
私は歩き出した。

歩き出すとすぐ、北のほうに建物が見えてきた。
外壁や屋根の様子が宮殿と同じなので、これもその一部なのだろう。

今までに随分歩いてきたから、敷地内でも端のほうに位置すると思われる。

こんなひつそりとした場所にこんな立派な館が建つのだから、やはり王族と貴族は随分違うなあと思った。

私の実家は丁度今見えた館くらいの大きさである。
王宮内の一棟くらい私にくれてもいいんじゃないかなうか。

門からおよそ二十歩程だろうか。

早速今が見頃の綺麗な薔薇があつたので、私は立ち止った。

後ろを見やると、一步後れの位置で男も立ち止まる。

本当にしつかり、問題なく付いて来ていたので、私は少なからず驚いていた。

動きも、杖のことを抜きにすれば、あまり健常者と変わりがない。

「ここです」

他に言い方が見つかないので、ついぶっきらぼうになってしまふが仕方がない。

とりあえずは案内しようとしか言われていないし。

「どんな薔薇だ？」

考えている矢先から説明を求められた。

「ピンク？の薔薇です」

「……もつと他に言こよつはないのか。疑問符の意味するとこもわからん」

男は呆れたように目を閉じた。

「えー、だつてプレゼンテーションの仕方とかは研修でも教えられませんでしたし。それにこの薔薇の色名がよくわからないです」

「あなたのボキヤブライナー内で説明してくれればそれで良い。あなたの目に映つた薔薇の画像を、私にわかるように翻訳してほしいんだ」

成る程、と納得した私は、腰を屈めて、まじまじと薔薇を観察した。

「花弁は……今更ですし失礼ですが、色の感覚は理解できますか？」

「ああ、わかる。私の全盲は後天的なものだ」

「了解です。……花弁は紅色とピンクの中間で、少し濁つた色と申しましようか、渋めで落ち着いた色彩です。それが幾重にも重なつてます。外側の数枚を残して、内側の沢山の花弁は中心に丸まつてぎつしり詰まつていて、という様子です。額と莖と葉は灰色がかった濃い緑です。葉っぱは輪郭の部分がぎざぎざしていて、外側が中央に比べて青みがかつています。花弁や葉っぱに露玉が乗つっていたりするので、少し離れて見るときりきりしてます。……私の観察力では「じんなとこりでしょ」か」

姿勢を正して男のほうを窺うと、男は小さく頷いた。

是とも非とも言つてこないので、私の翻訳が上手くいったのかどうかはわからない。

「その薔薇が咲いているのは、私から見て左、だな?」

「はい、そうです」

すると男は、私との間に合つた一步分の距離を詰めて來た。

私はその分後ろに下がり、男はそれが当然と思っているようだ。侍女なのだから確かに城での立場は底辺だが、それにしても見かけに反して紳士じやない。

少し憮然としつつ男を見守つていると、彼は先程の私の立ち位置で正確に止まる。

そして薔薇のほうに向き直り、少し屈むと、おもむろに右手を差し伸べた。

「あ

ひとつ説明し忘れたことがあった、とやつと思ひ出しが、勿論もう遅い。

茂みをがさがさとまさぐつていた彼は、眉を潜めながらも、抜き取つた手にしつかり立派な薔薇を一輪持つていたのは流石と言えよう。

「申し訳ございません!」

男が口を開こうとしたのがわかつたので、先手を取つて謝罪した。お辞儀もあわよくば風が起きるようにと力いっぱい腰を折る。見えぬなら感じてみせよ私の謝意。

「……わかつていて言わなかつたのか?」

「いえ、滅相もございません。本当に。たつた今氣付いたといひで

す。本当の本当に

何だか言葉を重ねれば重ねる程嘘臭くなつてこゝのは氣のせいであらうか。

私が説明し忘れた」と。

すなわち、棘の存在。

無造作に薔薇の茂みに手を突っ込み、それでやめておけばいいものを、その中から本当にものを恐らく触角だけで選び取り、そして手を引っ込めたのである。

彼の骸骨のような右手には、無数の引っかき傷に加え、小さな棘も幾つか刺さつてゐるよつた。

「まあ、私もすっかり失念していたが。そうだな、薔薇とはそういうものだつた」

血が滲む無数の傷口は、見てゐるこちらの鳥肌も立ちそつなものなのに、彼自身は異様なくらいに落ち着いていた。

その口元には感慨深げな笑みさえある。

そういうれば会つてから今に至るまで、彼の笑顔を見たのはこれが初めてだ。

勿論こんな凄みのある笑顔は何度も見たい代物ではない。

「すみません……」

「いい。別にあなたは悪くない」

「あの、せめてものお詫びに、刺さつた棘、私がお取りします」

それは本当に『せめてものお詫び』だつた。

本気かどうかはわからないが、先程この男は私に他意があつたことを疑う素振りを見せていたので、出来得る限りの誠意は見せておかないと。

得体の知れない人間との関係は、クリーンに終わらせたい。

しかし彼は緩やかに首を横に振った。

「痛み、なんて感覚は久しぶりだし、嫌いではない。しばらくはこのままでもいい」

そう言って、右手を閉じたり開いたりする。

そんなことをしたら、余計棘が奥に刺さってしまうだろうが、この男の妙な言動からすると、それすらわかつてやつているのだと思つ。

『病んでいる』、のだろうか。

こういつたうすら寒いものを感じさせる男にお節介を焼く程、私は優しい人間ではない。

「 そりですか。では『自由に』これが原因で悪化したとしても、私は責任取れませんので』』了承ください』

すると男の体が固まつた。

元よりただ突っ立つて いるだけだつたが、ゆつくりと開閉して いた彼の右手が、急に緊張したよ うに動かなくなつたところを見ると、『固まつた』とい う言葉がふさわしいよ うに思える。

「責任を取るつもりでいたのか」

私はう、と言葉を詰まらせた。

先程のは責任を取りたくない故の発言であったが、確かに裏を返せば当初は責任を取るつもりだった、ということになる。

無論私としては、そんな大事を意識していたわけではないが、言つてしまつた以上仕方がない。

私は他称問題児ちゃんではあるものの、父が貴族らしからぬ方向で厳しい人だつたので、失敗や悪巧みの清算はさせられてきた。例えば、双子の妹の寝顔が可愛くて可愛くて、つい髪を描いてしまつたのが彼女の初デートの日だつたときには、三回土下座して謝罪させられた。

目の前の男の立場がどういったものなのかはつきりしないので気乗りはしないが、前言撤回は美しくないやり方だ。

「……私にできる範囲内ならば……」

私が言つと、彼の表情が悲しげに和らいだ気がした。

「なら、取つてもらおうか」

彼の傷だらけの右手が、私の前に差し出される。

「……はい」

私はその手をおずおずと受け取る。

異性の手であり、怪我をしている手であるから、緊張しないわけがない。

しかし彼の右手は温かくも冷たくもないで、生きた人間の生身に触れている実感がいまいち湧かなかつた。

そしてそれは慎重さや丹念さが求められる棘抜きの動作をするに当たつて、好都合ではあった。

「責任を取るつもりであるとのあなたのあなたの言葉、しかと覚えておく」といひする

作業の最中に、彼がそんなことをぼやいた。

「えー。私の言つたのは、その、つまり、私のできるせめてもの責任の取り方が、今棘をお取りする、ということだったのですが。正直そこまで私に非があるとも思つておつませんし

「わかつていゐ。これとは別のことだ」

他に何か失態を犯しただろうか。

眉を潜めて男を見ると、彼は心持、楽しげで、悲しげな顔をしていた。

「終わりました」

そう言いつつも、この手をどこに返せば良いかわからず、私は彼が動くのを待つしかなかった。

彼はそつと右手を宙に浮かすと、少し硬い動きでそれをズボンのポケットに入れる。

「ありがとう」

「いえ。後でちやんと医務室で診てもいいってくださいね」

「ああ」

彼が素直に頷いたのは意外だった。
機嫌が良さそうな今の内に、と付け加えておく。

「責任問題はお手柔らかにお願いします」

「……それは難しいかもな」

私は肩を落とす。

するとおもむろに、彼は門の方向を見やつた。

「……時間切れか」

「どうかなさいましたか？」

「ミルキアの声がする。あなたを探してくるよつだ

「え」

探してくる、といつゝとは、やはり花材を届けるのが遅いといつ

「…どうゆつ。

すなわちそれはお説教を意味する。

「この男のせいにして良いといつことだつたが、果たしてそれもどこのまで通用するものか。

私は彼に倣つて注意深く耳を澄ませたが、ミルキアさんの声など全く聞きとることができなかつた。

「責任を取りたくないといつのであれば……」

唐突に話が元に戻つた。

「…ちは氣が氣でないといつのに、暢氣なものだと思つたが、続く言葉はそうではないことを裏付ける。

「私に会つたことは何としてでも伏せろ。ミルキアは勿論、他の誰にも。絶対に語りせてはいけない」

彼の表情は少し寂しげで、でも断固とした何かが窺い知れた。

「……どうしてですか？」

「それは知るべきでないことだ。何も知らない振りをしろ。何も聞かず、何も言うな。どこまで白を切つても切り過ぎるといつことはない。そうすれば、或いは、責任を逃れられるかもしれない」

「それは、何に關しての、責任でしょうか……」

「この色々危ういな男の発言を全て本氣にするのもどうかと思つ。しかし、神妙に語る彼の姿からは、今まで常に付き纏ついていた僕さが感じられなかつた。」

彼は問ひに答えず、代わりに私の肩をそつと押した。

「行け。『あなたは東庭園に花材を受け取りに来たが、庭師はいかつた。盲田の男には会つていない』。それで通せ」

来たときと同じく有無を言わざぬ聲音で命じられれば、頷かないわけにはいかない。

私は何が何だかわからぬまま、男に会釈した。

「では、失礼します」

そうして、わざと音を立てるようにな顛てて翻け出した。

ひとつめの門を出たところで、ミルキアさんの呼び声がよつやく自分にも聞こえた。

「……ルカつ……なら出て来なさい……オルカ……」

その声には怒りといつよりも焦りが含まれてゐるようで、まるで母親が迷子を探しているときのようだ。

私は再び駆け出し、草花に囲まれた一本道をひた走る。

ミルキアさんの姿はすぐに見えてきた。

「……オルカ……」

その表情を見極められる位置まで近付いたとき、私は少なからず戸惑つた。

彼女の顔に表れていたのは、怒りでも焦りでも見つかることくの安堵でもなく、落胆、だつた。

「遅くなつてすみません。……」

言い訳を口にしようとしたとき、頭の中に彼の声が蘇る。

『私に会つたことは何としてでも伏せろ』

……言い訳、できないじゃん。

自分のせいにしていいと言つたのは彼のまゝなのに、その道を口から閉ざすとは何てえげつない奴。

ミルキアさんの存在などすっかり忘れて、私は憤つた。

「……何ですか、その百面相は」

「あ、いえ、何でも。……庭師が全然見つからないのです。ずっと探しているのですが……」

ミルキアさんが探るよつた目つきをしたのがわかつた。

「この道を、何処まで進んだのですか？」

「東庭園まで行きましたけれど……。あ、でも庭園をちょっと歩いたところでミルキアさんの声が聞こえたので、すぐ戻つて来ました」

私は考え考え、慎重に言葉を発する。

『言つて良いこと悪いことを正確に識別せねばならない。

「それにしてもミルキアさん、酷いです。私東庭園が立ち入り禁止区域だつたなんて全然聞いてませんでしたよ。お陰で門番の人によ

つても疑われました」

「東庭園は立ち入り禁止区域などではありますん！」

ミルキアさんはエメラルドグリーンの綺麗な目で私を射抜く。私がびくりと肩を上げると、彼女ははつと顔を強張らせた。己が取り乱していることに、今気付いたようである。

よくよく思い出してみれば、こんなに余裕を失くしたミルキアさんの姿は初めて見るかもしねない。

怒り姿なら見慣れた程にお世話になつている。

しかし、冷静に窘めるときは勿論、激怒を露わにするときだって、彼女は自分を制御しているふうであった。

この場合はどのように叱れば良いか、この場合はどうかとこうふうに、恐らしく計算していたのだらうと思つ。

それが、今回ばかりはどうやら違うみたいだ。

少し観察してみれば、普段健康的だった肌はすっかり青ざめ、顔には汗が浮かんでいることがすぐわかる。

ミルキアさんは「『めんなさい』と呟くと、自分を落ち着かせるようになり、からからと首を振つた。

顎辺りの長さで切り揃えた金髪が、それに合わせて揺れる。

「……え？」

聞き返した声が上擦つた。

それと共に、頭の奥で妙に納得している自分がいる。

今まで全く気付かなかつた自分がどうしようもなく阿保らし

い。

門番の騎士、盲田の男、ミルキア。

三者の発言が頭の中で一斉に再生され、そしてそれは、『「」は東庭園ではない』との新解釈と全く矛盾していないどころか、素晴らしく一致している。

つまり、彼女の言葉は事実なのだ。

「そうだったのですか……」

「確認ですけれど、あなたは本当に、『』が東庭園だと思ってやって来たのですね？」

「はい……」

呆然と答えた私に、ミルキアさんは頷いた。

そして、頭を下げる。

「『』めんなさい。あなたには……悪いことをしたわ」

私は眼前で起きていることが信じられず、しばらく物を言ひつゝもできなかつた。

説教は想定していれど、まさか謝罪されるだなんて予想できるはずがない。

何て不吉な！

「ななな何でミルキアさんが謝るんですか、悪いのは私のほうなのに！」

「いいえ。どうか謝らせたいのです。あなたの馬鹿さ加減をわたくしは見誤つていました。東庭園の位置も、きちんと確認してお

くべきでしたね……」

若干いつもの調子が戻ってきたようなので、私はほんの少し胸を撫で下ろす。

「ここで安心しているところが末期だなと思わなくもないが、しょらしいミルキアさんというのは大変心臓に悪い物質である。

「ところで、あなたはこの立ち入り禁止区域に足を踏み入れてから、どなたかにお会いしましたか？」

「えっとー、この奥にいる門番とこの奥にいる門番とこの奥にいる門番だけですかしらねー。あ、あとこの奥にいる門番」

俄かに美人上司の視線は冷氣を帯びる。
脳裏をよぎるは騎士の残した最後の台詞。

『あんた嘘が吐けなれやつだしな』

悲しいかな、この言葉の真実性は私が最も自覚しているのである。

「杖を持つただん……」

「あーないない、全然会つてないです！これっぽっちも！本当に…
そんな存在はミクロンも田にしてないです！」

「まあ、考えなしのあなたにしては聰いこと。教えてくださいますか？わたくしが何を言おうとしたのか」

「え、えっと。杖を持つただんせ……杖を持ったダンディでござりますよね」

あー死ぬ、間違いなく次の瞬間私死ぬ。

そう思つて私は俯いて目を閉じた。

しかし次に響いた声は、存外に優しげだった。

「オルカ」

名前を呼ばれたきり、後に続く言葉がなかつたので、私は不思議に思つて顔を上げた。

ミルキアさんは困つたように笑つていた。

「嘘は上手に吐かなくては駄目よ」

私は何か言おうとあれこれ考えたのだが、結局返す言葉はビードを探しても見つからなかつた。

7・ユーディス家

私の名前はオルカ・ユーディスという。

オルカが名前で、ユーディスが姓である。

実はこの名前、貴族か、あるいは社交界に通じている人であれば、かなり多くの者が知っているらしい。

曰く、『あの』ユーディス家の『あの』オルカ』である。

私のことを既に知っている人間に自己紹介した場合には、反応は大きく二つに分かれる。

「えつ！？」という好奇。

もしくは、「げつ！？」という後退。

私としては非常に不本意である。

有名になるなんて恥ずかしい！などといつこ女らしい考えではない。

重要なのは有名になつた理由である。

例えば。

『あの』エリート一族ユーディス家の、『あの』百年に一人の逸材と言われる賢者オルカ。

『あの』美男美女揃いのユーディス家の、その中でも格別に麗しい美貌を持つて生まれた『あの』オルカ。

『あの』勇猛果敢にして人徳が厚いと謳われるユーディス家の、領地を千匹の狼から守つた『あの』英雄オルカ。

こんな曰く付きであれば、文句の出よつはずもない。結構、大いに結構。

しかし勿論現実はそうではない。

私は父に『お前にマンツーマンの家庭教師を付けるのは金の無駄だ』と言われ、高位貴族にしては珍しい学校通りの人間だったので、賢者なわけがない。

美貌云々は自分で言つて赤面するくらいだからあり得ないし、狼が一匹でもいれば私は間違なく逃走を図る。

では何なのか。

要約すると、『あの』小賢しいコーディス一家の『あの』異端種オルカ、ということのようだ。

コーディス一族は現在侯爵家であるが、父の三代前、つまり私の曾祖父の父の時代までは、衣服を仕立てるただの商家だつたそうだ。しかし曾祖父は非常に有能な人間で、貴婦人用のドレスを扱い始めたところ、これが大成功したらしい。城下町の隅で小さな店を運営していたコーディス家は、たちまち流行のブランドとなつた。その評判は瞬く間に王家の年頃のお姫様の耳にも入り、直接お呼びがかかつたそうである。第二王女の夜会用のドレスを仕立てほしい、と。

さて、ここから「あの小賢しいコーディス家」の歴史が始まる。曾祖父は、この一大ビジネスチャンスの筆頭にと、自分の家の長男を立てた。私の祖父である。

彼は当時大学を出たばかりで、商人としては駆け出しの駆け出しであつた。しかし、年頃であつた。加えて、独身でもあつた。

王女様はコーディス家の仕事（と、恐らく祖父）が大変気に入り、頻繁にコーディス家にドレスの仕立てを頼むようになった。そして祖父は、当然の如く頻繁に王女に面会に行つた。

かくして二人は恋に落ちたのである。

しかし、王家と商家での恋は許されなかつた。

貴族であれば、平民との結婚も許されているが、王族だけは別だつた。ショーヴラーグでは、王族は王族同士、或いは国内の貴族としか結ばれることはできない。

可愛い娘のためとはい、王家自ら法律を破るわけにはいかない。国王陛下は涙ながらに娘を説得しようとしたが、我が家の祖父に心底惚れていた王女様は、最後まで折れることはなかつたそうだ。

そこで再登場するのが、やり手の曾祖父である。
彼は国王陛下にこう申し出たそつだ。

「恐れ入りますが陛下、我が息子レナードと第一王女ジウニア様のことで進言させていただきたく存じます。

陛下もご存じかと思いますが、レナードはおじがましくも、ジウニア様に恋しております。全く身分知らずにも程があるというもので。しかし、わたくし自身まだ本当かと疑つてもいるのですが、ジウニア様のほうもこの愚かな息子に好意を寄せているとのことを、複数の者から聞いたのです。

大変僭越なことを申し上げてすることは承知しておりますが、もしわたくしの聞いたことが本当ならば、陛下も心苦しく感じているのではないかと思つた次第であります。

何せジウニア様はショーヴラーグの第一王女であり、その血は全く穢れなきものでござります。対するレナードはしがない商家の息子に過ぎません。我が息子は王女殿下に到底釣り合わぬ器です。

しかし民にもご家族にも慈悲深く愛情深い陛下のこと。きっとこの自分の娘には幸せになつてほしいと願つていらつしゃるのではございませんか？そして、陛下の広い大海のような御心には全く見劣り

しますが、わたくしも一人の父親として、息子には幸せになつてほしいと願つてゐるのでござります。

さて、国王陛下、どうか今少しのしがない商人の戯言をお聞きくださいませ。

我がコーディス家は、ツェーヴラーグ王家への忠誠を改めて固く誓い、王家に益と繁栄をもたらすために力を尽くすことを約束いたします。

それでどうか、もし我が息子と第一王女殿下が眞に愛し合つており、陛下がこれを良いとされるのであれば、どうか次のお願ひを一度考慮していただきたいのです。

どうか、我がコーディス家を、血筋の貴い一族として迎え入れていただけませんか？

この非常に長い進言はこのままの状態でコーディス一族史に残つているのだが、要するにこういうことである。

俺達を貴族にしちゃえば全部丸く收まるぜ。

そして王様はそれを呑んだのだった。

そういうわけで私の祖母は元ツェーヴラーグ第一王女だ。

その後もコーディス家は巧みに『小賢しさ』を駆使し、貴族世界を這い上がつて来た。

「貴族といえばどろどろ愛憎劇」と学生時代の友人が私に何の遠慮もなく言つてきただったが、近年その「どろどろ」の渦の中心にいたのは、主にコーディス家だったかもしれない。

お陰で当初子爵家だった我が家は、今では侯爵家になり上がつてゐる。

そんな一族の異端種がこの私、あのオルカ、である。

「Jの異端種という語をさらにわかりやすくすると、
「あの小賢しいコーディス家にこんな馬鹿が生まれた！」
ということになる。

これを不本意と言わずして何と言おう。

勿論この呼称が使われるようになつたのにはきっかけがある。
というかそのきっかけとなる出来事さえなければ、私は何の問題
もなく、優雅に華麗に貴族社会を渡つていけただろう。
そう言つと決まって家族は首を横に振るが、そんなことはひとつで
もよひしー。

事の発端は二年前である。

ツヨーヴラーグの王家は一年に一度、盛大な夜会を催す。この宴は貴族か王族であれば誰でも出席できるもので、当然ユーディス家、そして私も出席した。

何せ美味しいものが食べ放題である。それだけでも行かぬわけがないが、加えてもうひとつ、私には出席する理由があつた。

当時私は、とある伯爵家の長男に惚れていたのである。

今思うとそれは恋というよりも憧れに近いものだったようだ。

彼は兄の友人であり、私よりも大分歳が離れていた。幼いときから兄と共に私の面倒を見てくれた、誠実そうで優しい人である。が、よくよく考えてみれば、彼の性格についてそれ以外には特に思いつかない。

基本的に私の周囲にはそういうたまたま男がいなかつたため（双子の妹曰く「まともな男はあなたには近付かない」、だそうであるが）、ある意味消去法で行き着いたとも言える。

何にせよ彼の顔は拝めるときに拝んでおかねばと思つていたこともあり、私は夜会に出席したわけである。

しかし私は恋愛に積極的なタイプではないので、特に彼に対して何をするでもなかつた。

ダンスに誘うことを考えなかつたわけではないが、そもそも話しかけることさえ躊躇われるため、それどころではない。

ただただ美味しいものを頬張りながら、彼の姿を目で追うだけである。私としては、まあそれでもいいかと諦めている節があつた。

一通り挨拶回りを終えたので、私は家族から離れて豪勢な食事に舌鼓を打つていた。

やがて音楽が始まり、大勢の紳士淑女がホールの中央に進み出て、優雅に踊り出す。

勿論私はその中に入つて行くことなどせず、食事を続ける。

ぼんやり眺めていると、私のよく知つた顔もダンスの輪の中に紛れていた。父は母と、妹は婚約者と、兄はどぞやの令嬢と。そして絶賛片想い中のあの人も、どぞやの令嬢と踊つていた。

ぎくりと全身が強張つたが、社交辞令で共に踊るなどよくあることだ。

そう言い聞かせつゝも、楽しげな二人を見つめることは止められなかつた。

ふいに、私の肩に何かが触れた。

吃驚して振り返ると、水色の瞳と視線がかち合つ。

小柄な私より頭ひとつ分程度背の高い男が、ぎこちない笑みを浮かべてこちらを見つめていた。

短く刈り込んだ銀髪に、小麦色に焼けた肌、程良く鍛え上げられた体系は、どこかで見たような気もする。

しかし少なくとも今日の挨拶回りの内には入つていなかつたし、知り合いではないと思つ。

では何故今この男は、私の肩に手を載せ、緊張氣味に微笑んでいるのか。

うーん全く身に覚えがない。

次の瞬間、

「食べ過ぎですよ」

とか言われるのだろうか。

「ユーデイス家のオルカ嬢、ですよね」

幼さの残る、或いは幼げに見える爽やかな顔は、なかなか好印象だ。

こんな爽やか野郎は私の周りにいた記憶がないのに、どうして彼は私の名を知っているのであろう、と思つた。

無論このときは私の不本意な評判が知れ渡る前である。

「ええ」

男が何者かわからない以上、余計なことは口走らないほうが良いだろうと、私は必要最低限の答えを口にした。

彼は私の無愛想な反応に少し戸惑いを見せたが、その顔を引き締め、こう言つた。

「私と踊つてくださいませんか?」

手から力が抜けて、持つていた皿が落ちた。

丁度私は自分の取り皿に新たな食糧を調達していたところだったので、皿は床ではなくテーブルの上に落ちた。

しかし載つっていた食べ物は勿論散乱。テーブルの上の大皿のほうにも異物を混ぜてしまったので、明らかにこれらの食べ物は廃棄となるであろう。

「わ、わ、申し訳ござりませ……」

素早く侍女達が片付けに入る。

失態を犯してしまったものの、今は誰に謝れば良いのかわからぬ。とりあえず彼女らに頭を下げようとしたところでの、腕を掴まれ

た。

銀髪の彼は、やや困ったように笑う。

「ここは大丈夫です。侍女達にお任せください。突然驚かせてしま
い、失礼をいたしました」

私は右の困った状態と、左の困った君を見比べた。
しかし真摯な眼でストレートに見詰められれば、困った君から視
線を逸らすわけにもいかない。

彼は覚悟を決めたようにすう、と息を吸うと、再度この言葉を口
にした。

「オルカ嬢。どうか、私と踊つていただけませんか？」

その時私の脳裏に浮かんだのはただ一言。
面倒臭い。

正直に言つと、私はこういった公の場で殿方にダンスを申し込まれたことはほとんどない。

あると言えば、兄か、父である。

それというのも、挨拶回りを程々に終えた後はそそくさと食事の並ぶテーブルに赴き、後はひたすら食事を貪る、ということを繰り返していたからである。

お腹空いた。ダンスなんて興味ないし。

この二つの感情はがっしりと協定を結び、連携して私を食事のテーブルに駆り立てた。

そうすれば、美味しいものが食べられて私は幸せであるし、好き
でもない人間とのらりくらりと踊らなくて済むのである。

そしてその感情を隠しもしない、あのコーディス家の令嬢に、敢えてダンスを申し込む野暮は今まで存在しなかつた。
そう。今までは。

私は水色の瞳をじいっと見つめ返した。

彼の目は期待と不安で揺れているようにも見える。

幾分良心は痛むが、私はこの申し出を受けるわけにはいかなかつた。

ここで受け入れてしまつたら、今までやつてきた「頼むからダンスになんか誘つてくれるなよ。私は食べるのに忙しいんだから」という意思表示が嘘になつてしまつ。

現に田の前に物好きが現れた今、これから先は現れないなんて確証はどこにもない。

そして私は、やはり田の前の男を知らない。

先程私の名前をわざわざ確認してきたといつ」とは、大した接点もないと考えて良いだろう。

それなのに自己紹介もせずに私をダンスに誘つてきたのだ。
これは些か非常識と言える。

よし。断つても問題はなさそうだ。

私は努めて眉尻を下げて微笑んだ。

「「めんなさいまし。今は踊る気分になれないのです」

大きな声を上げたつもりはなかつたが、私の言葉はホールに響いた。

こんな断り文句、大勢の人に聞かれて気持ちの良いものではないだろう。私はともかくとして、彼にとつては。

そう思つて慌てて周囲を見回した私は、啞然とした。

少なくともここから見える位置にいる皆の顔が全て、私と男のほうに向き、私と同じく啞然としていたのだ。

先程までダンスに興じていた者も、動きを止めてこちらに見入っている。

静寂の中、音楽だけはやや氣まぎそうに流れていた。

「お姉様！」

沈黙を破つたのは、私でも、銀髪の男でもなかつた。

声のしたほうを見やると、双子の妹カノンがダンスの輪を外れて、こちらに歩み寄つて來た。共に踊つていった婚約者は止めることもせず、呆けたように成り行きを見守つている。

カノンがつかつかと靴を鳴らして歩けば、自然と彼女の前から人垣は割れた。

彼女は私の目と鼻の先まで詰め寄り、腰を曲げて私の顔を覗き見た。

青紫の瞳に映るは、呆れと使命感のような何か。

「皇太子様の誘いを断るだなんて、あなた、本気？」

瞬時に私は固まつた。

……ああ。道理で見覚えがあると思った。

恐れと恥ずかしさの余り、皇太子様を見ることができない。

仕方なく硬直したままカノンの顔を眺めていると、彼女の表情に呆れの色が濃く表れた。

「あなたやつぱり気付いてなかつたのね」という声が聞こえてきそうである。

カノンは姿勢を正した。

そしてそれに乘じて、私の耳元で囁く。

「私に話を合わせなさい」

そう言つて、数歩私から距離を置いた。

「ねえお姉様。よつぽど理由があつてのじでじゅうへんうなん
でしょ」「？」

私はおずおずと頷く。

勿論ここで「面倒だつたから」とか「こ飯食べたかつたし」などの発言がアウトであることは私如きにもわかる。

しかしこれから先、カノンがどのように話を収めるのか、全く見当がつかない。

無難にしおりしくしておぐが吉と見た。

「どうしてなの？体調が悪いの？ねえ、ちゃんとした理由も告げずに誘いを断るだなんて、皇太子様に失禮でなくつて？」

私は俯いた。

カノンちゃん、私どうすればいいのか全然わかんないよ。演技でなく泣きそうだ。

すると予想外にも、助け舟の助け船が現れた。
例の皇太子様が、私とカノンの間に割つて入つたのだ。

「私なら気にしていないので大丈夫ですよ。突然のことだったのでオルカ嬢が驚くのも無理のないことと存じます。それよりも、私の気遣いが足りなかつたせいで楽しい宴を台無しにしてしまつたようで、誠に申し訳ございません」

そう言って、少し弱々しいながらも、周囲に微笑みを振り撒く。
今の時代、こんな好青年がまだ生き残つていたとは、と私は他人事のように感嘆していた。

しかもその好青年は王子様である。

何て優良物件。

その優良物件は、ちらりと私を振り返ると、またもや困ったような微笑みを浮かべた。まるで私を安心させるかのように。

何故こんな優良物件が空気も読めずに私をダンスに誘つたのか。考えれば考える程に謎があるので、考えることはやめた。面倒。

しかし、我が双子の妹にしてみれば、皇太子の登場など計画に入つておらず、全く邪魔な存在であつたようだ。

「皇太子様はお優し過ぎます！ここでお姉様を許すのは、ある意味でユーディス家にとつて恥を意味します。お姉様ったら、自分の取つた行動の説明もできませんの？」

カノンは割つて入つた皇太子様の横をさつと通り過ぎると、再び私に至近距離で詰め寄る。

彼女はどうしても自分のシナリオで事を進めたいらしい。
私としてはどういう成り行きであれ丸く収めればそれで良かつた
んだけど。

ついでに言つと、カノン自身も十分皇太子様に失礼なことをして
いる気がする。

私の心配など露知らず。カノンは手厳しい妹を演じて叫んだ。

「何とか言ってくださいまし！」

「いい加減次の手を打ちなさいよ、馬鹿。話が進まないじゃない
と言わんばかりに睨んでくるカノンに、不安げにこちらを見つめて
くる皇太子様、そしてそんな私達を見世物のように取り囲むその他
大勢。

こんな緊張する場面で上手い考えが思い浮かぶわけがない。私は
プレッシャーに弱いのである。

そんな私が打てる手といつたら、確実に限られていた。

私は「あの……」とおどおどしながら言つと、そつとカノンの耳
に自分の口を寄せた。その口を手で囲い、囁く。

「思いつかないので後は任せました」

睨まれるかと思つたら、カノンはむしろ一イッチと一瞬口角を上げ
てみせた。

これは大変悪い兆候だな、と思うが、あのコーディス家のカノン
に全投げしたのは他でもない自分である。
私は開き直つた。

私がカノンから顔を離すと、彼女は驚愕の表情を浮かべた。

「ええ！？お、お姉様、想い人がいらっしゃったの！？」

周囲の人間がざわめいた。

彼等には段々、この見世物を楽しむ余裕が出てきたようだ。

……勘弁してくれ。

皇太子様を見やると、あからさまにショックを受けた顔をしている。

今私の気持ちは、仔猫を道端に捨てたときの気持ちと似てるんじゃないつか、と想像した。

「誰ですの！？お姉様！はつきり仰いなさい！皇太子様に誠実さを見せる気があるのであれば、そのくらいすべきだわ！さあ！」

意気込むカノンの目は、若干楽しげで、そして、炎がちろちろと揺れている気がした。

そこで私はピンと来た。

生まれたときからずっと一緒に育ってきた双子の妹である。彼女の考えうことなど、大体わかる。

これは、復讐の炎である。

何の復讐かという疑問は、身に覚えがあり過ぎるので一先ず置いておく。

カノンが使い物にならなくなつた今、誰か他の助つ人を探し出さねば。

最初に私が目付けたのは、心優しき皇太子様である。

ずばつと振った上に好意も湧かない彼に頼るのは、利用するよう
で気が引けなくもないが、この時くらい空気を読んでみせよ！と視
線を送つてみた。

しかし彼は遠い目をしていて、私の視線になど全く気付きもしな
い。
優良物件の癖して肝心なところで使えないなあ、と私は独りごち
た。

次に、素早く周囲に目を走らせ、家族の姿を捜した。
先に発見したのは両親である。

彼等は姉に迫る妹と、妹に迫られ周囲に助けを求める姉の図を、
微笑ましそうに眺めていた。

何故こういうときに限つて暢気な顔をしていられるのか、後で問
い詰めてやる。

残るは兄だ。

と、思つたのだが、結局最後まで兄は見つからなかつた。
後で聞いたことだが、兄と某ご令嬢は、この見世物に早々に飽き、
寧ろ混乱に乗じて、と庭に出て逢引していらっしゃい。
我が兄ながら薄情なものである。

家族も頼りにならないことを再確認した私は、改めてカノンと目
を合わせた。

彼女の瞳から炎が消えることはなく、寧ろ時間が経つにつれ強さ
を増している気がする。

その炎を見つめていると、じじ数日間の可愛い妹の記憶が走馬灯
のようにならぶように脳裏を駆け巡つた。

姉に婚約者からのラブレターを勝手に読まれ、爆笑された可愛い

妹。

姉にズイーガル亭の高級菓子をいつの間にか全部食べられていた
可愛い妹。

光り物が好きな姉に婚約指輪を見せてほしいとねだられ、うっか
り破壊され激怒する可愛い妹。

そういうたゞ々の可愛い妹を思い出した私は、いつ結論を出した。
こりやあ観念して復讐を受け入れたほうが良い、と。
でなければ、そろそろカノンの瞳に殺意が宿りそつである。
命あつての物种。私は評判よりも命を選ぶ。

決意した私は、もう一度改めて、今度はゆっくりと周囲を見回す。
さあさあ言つぞー今言つぞー、という雰囲気を多分に含ませて。
そうしている内に、私の想い人である某伯爵家長男が目に入った。
彼の隣りには、先程まで共に踊つていたどぞやのご令嬢。

勝ち目はないだろうなあ、ということは何となくわかつていた。
しかしあまり深く考へてはいけない。でないと勢いが失われ、結
局言えなくなつてしまつ。

私は彼を見据えると、掠れた声で彼の名前を宣言した。そして叫

ぶ。

「ずっと好きでした！」

叫んだ後は、もう彼の顔を見るどころではなかつた。

再度言うが、私は恋愛に積極的なタイプではない。告白だつて、
今まで一度だつてしたことがない。

そんな私が公衆の面前で、およそ勝ち目のない告白を叫んだので
ある。

そこまでして妹の殺人罪を止める私つて、素晴らしい姉だわ。

観客は一瞬どよめいたが、すぐに大人しくなった。

次なる見世物は私に想いをぶつけられた彼である。

とてもこの状態で顔を見せることは躊躇われたので、私はずっと俯いていた。

しばらく沈黙が続いていたので、彼も呆然としていたのだろう。やがて少し締まりのない、しかし落ち着いた声がホールに響いた。

「う、ごめんなさい……。僕にも好きな人がいて……」

その後歓声が上がったのは、彼が見つめた先が隣のご令嬢で、ご令嬢はぽつと顔を赤らめ、二人の間にうつとりとした雰囲気が流れたかららしい。

ある程度予想はしていつつもショックに打ちのめされた私にとっては、全く関知していなかつた出来事である。

かくして私の評判は社交界全体に広まることとなる。

王子を振つて、伯爵家長男に振られたオルカ。

小賢しいユーディス家の、馬鹿な異端種オルカ。

あのユーディス家の、あのオルカ。

そんな評判があつたからか、もしくはなくとも同じだつたかもしれないが、私に近寄りうとする男はあの一件以後絶えた。

驚くことなかれ、こんな私にも昔は寄つて来た男がいたのである。しかし、こなごな話題のときに思い出されるのは双子の妹の言葉である。

「まともな男はあなたには近付かない」

ではどんな男が近付くのか。答えは明白である。
まともでない男が近付くのである。

資産目当てだつたり、侯爵家と繋がりを持ちたい人間だつたり、まあそんな碌でもない男が寄つて来る」ことは少なくなつた。

それが絶えたのだから、積極的に考えればあの夜会での告白も無駄ではなかつた。

しかし消極的に考えれば、あの一件は、まともな男をさらに寄せ付けなくする、いわば駄目押しのようなものであつた。

男の気配を全く感じさせなくなつた娘を最も心配していたのは、父であつた。

新たな恋を探す気力すら見受けられない私に、父は繰り返し皇太子様を薦めてきた。

しかし私は断固として拒否した。

あのようなやたらと爽やかできりきらとした殿方には、純粹無垢でうふふあははは淑女が似合うものである。

私のような脳内に枯れた花畠を持つ人間は、近付いてはいけない人種な気がする。

彼と一緒にいたとして、噛み合つた会話を想像できない。

皇太子様のほうも、あの一件以来私に干渉してくることはなくなつた。

夜会などで会つたとしても、彼は私に困つたような笑みを向けるだけである。

きつと人が良過ぎるのだろう。無視ができないようだ。

好意なのか、遊びなのか、挨拶なのか、策略なのか、気まぐれなのか。はたまた発狂か。

あの日彼が何故私をダンスに誘つたのかは、未だにわからない。

私的には、それは永遠にわからないこととして、もう水に流したかった。

それが皇太子様の誘いを断つたことへの、せめてもの謝意だと思つたのである。

だからもう皇太子云々の話は持ち出さないでほしい、と私は父に断言した。

すると父は群青色の目を細めて、そつか、と承諾してくれた。

そしてそんな会話がなされた二日後のことである。

「オルカ。おまえは王宮に行儀見習いに行くべきだよ」

まず私のしたことといえば、指の関節を丹念に鳴らすことであつた。

「はいはい怒らない。それやると手が男らしくなっちゃうやつで、皇太子様の話は持ち出さないでほしいと、この前あれ程言つたではないですか」

「俺は皇太子様の『』の字も出してないじゃないか

「同じことです」

「人聞きが悪いな。一体おまえは何を想像しているんだ？」

「お父様が想像していることです。つまり、あわよくば皇太子様と私が懇ろになつてほしい、と思つているのでは？」

「違つ違つ

父は大仰な身振りで否定してみせたが、私の疑いの眼差しは全く衰えない。

「では何故急にそんなことを言つのですか」

問い合わせると、父はここにこと表面的な笑みを貼り付けた。

「アリシアって、覚えてるか？」

「ベアティード男爵家の？」

「そうそう」

アリシア・ベアティード。

その名前を聞いて思い出すのは、桜色の長い髪を持つ、砂糖菓子のような少女だ。

ベアティード家とコーディス家は古くから交流があるらしく、私も父や母に連れられて何度か赴いたことがある。

アリシアはそこ第三子である。

年が私と同じだったので、私はベアティード家に行くたびに彼女と遊んだりお喋りしたりしていた。

花が大好きな正に女の子らしい女の子であり、色々な花の名前を教えてくれたつ。そういうつものに清々しく興味のない私は、右から左だつたけれども。

「アリシアが何か？」

「彼女はツェーヴラーグ城の侍女になつたそつだ」

「へえ！？」

「このときばかりは、私は素直に驚かずにはいられなかつた。

生粧のお嬢様であり生粧の淑女であり、ゆくゆくは生粧の貴婦人になるであろうと確信できるアリシアである。

その彼女と、「侍女」という職業はあまりにもかけ離れている。

「彼女は、行儀見習いでも何でもなく、侍女として正式に働いているそつだよ」

「ベアティード家つてそんなに困窮していたのですか？」

確かに男爵家は貴族の中で一番低い爵位だけれども、彼等の屋敷や生活を見るに、娘を働きに出すことなど想像し難い。

或いは、「ぐぐぐ最近、運営が難しくなってきたのだろうか。

しかし父はかぶりを振つた。

「そうじゃない。アリシア嬢は自發的に侍女になつたんだよ。勿論

家族は大反対だつたそうだけどな

「自發的に？何でまた？」

父は待つてました、と言わんばかりに嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「お城の文官さんと恋仲になつたんだとよ。ずっと傍にいたいがために、城勤めを希望したそつだ。泣かせるねえ」

父の言動に、俄かに暗雲が垂れ込めてきた。

「その話を昨日ベアティード男爵に聞いて、俺は閃いた」「お父様はもっと生産的なことを考へるべきだと思います」「まだ何も言つてないだろ。それにこれは大分生産的な話だ。いいか？某一件があつてから、おまえの社交界での評判は地に落ちた。これで貴族同士の結婚はほぼ絶望的になつたわけだ。このことについて異論はないな？ん？」

私は不承不承頷いた。

某一件から二年近く経とうとしているのに、男が誰も寄つて来ない、という事実がこれを裏付けているし、私にも積極的に動く気力はないのだ。

「しかし父親としてはおまえをきちんと幸せにしてくれる人間が現れてほしい。しかし貴族は受け入れてくれない。じゃあどうすれば良いのかというと、つまり選り好みしなければいいわけだ。幸いこの国では貴族と平民の結婚が許されている。おまえは平民との結婚は嫌か？」

「そんなことはありません。しかし誰でもいいといつわけでもありません」

「それはそつだろつ。おまえ程理想が高い娘も珍しいしな

私は自分の耳を疑つた。

「『理想が高い』？私が？」

父は鷹揚に頷く。

「おまえが今まで好きになつた奴なんて、精々ポルテツフェル伯爵家の長男坊くらいだる。拳旬の果てに『一』のつく優良物件を断つたんだぞ？これを理想が高いと言わずして何と言つ？

「だつてポルさんくらいしか私の周りにまともな男がいなかつたんですもの」

「そうしてやつと現れたまともな男が皇太子様だつたんじゃないか」

「あのときはポルさんが好きでしたし」

「じゃあ今はどうなんだ。流石にまだ長男坊に未練たらたらつてわけでもないだろ」

「それはそうですが。でも皇太子様と私つて明らか合わないと思うのです」

「ほら。それが理想が高いってことだろ」

父は満足そうに言い放ち、私はむうと唸つた。

そう言わると反論もできない。

「オルカの理想は、立場とか収入とか人望が関係してないんだと思うよ。であれば平民からお相手探しても全然オツケーなはず。そうしておまえが家庭持つて幸せになれば、俺も安心で幸せ。丸く収まる」

どうして結婚しただけで娘の幸せが確信できるのかがわからないが、それよりも話の前後関係がよくわからない。

「お父様は結局何が言いたいのです？」

私が疲れた目を父に向けると、父はうん、と頷いた。

「だから、手始めに王宮で出会い探しをすればいいんじゃないかなって思つて。あそこで働いてる平民なら、まだ貴族に近い人種だろ。公務員なわけだから収入も安定してるし」

「出会い探しのために行儀見習いに行けと」

「そうそう。目指せアリシアーー号」

「お父様は行儀見習いと王家を舐めてますよね」

「ははははは」

否定しなかつたところを見ると、事実舐めているようだ。

それはともかくとして、田舎者とく出会いを探しつつ王宮で働く、なんていう器用な技は私にはできそうもない。

加えて私には、無理に探し出した恋愛や早まつた恋愛というものは得てして上手くいかない、という先入観を抱いている。

そつちの方向で頑張っていた友人を観察するに、その考えはあながち間違つてもいないと思う。

出会いは探すものではなく、出会いのほうからやつて来るものであるーと、乙女思考な私は信じたい。

よつて却下であるそんなもの。即却下。

「お父様の意見は却下します」

「といつおまえの意見は却下します」

しばし睨み合ひ父と娘。

流石私の父親である。一筋縄ではいかない。

なんて思つていたら、父はにまつと口角を上げた。

カノンのときと同じく、これは大変悪い兆候である。

「まあまあ女心してくれ。面倒くさがり屋なおまえのために、全ての手続きは」の俺が本日やつておきましたから

「なあつー？」

「一応イーテイル陛下にも直接頼んでおいた。『娘をお願いします』つて

私は唇を噛み締めた。

本当に娘の幸せを願つのであれば、娘の意見に耳を貸してほしい。

「いいですっほかしたりしたりどうなるか、それくらいはおまえでもわかるよなあ？」

ぐうの音も出ない。

所詮父は生粋のコードィス家の人間であり、私は異端者だったといつところか。

いつもして私は王領にて巡回へとなつたのである。

私が立ち入り禁止区域侵入という失態を犯してから一日が過ぎた。

三日目の二十時半頃、本日の仕事を終え、食事をとりシャワーも浴びた私は、小さな自室で骨を休めていた。

じゃじゃ馬ではあるものの、私も貴族のお嬢様として育っている。侍女の仕事は予想以上に体に応えるものだ。

ひと月程前、私が行儀見習いに来た一日目などは、自室に着いた途端シャワーも浴びず、気絶するようて眠りに落ちたことを覚えてい。

侍女って大変だなあと思いつつ、存外にもこの生活は私になんかか合っているようであった。

退屈している余裕がないし、消極的なことを考える余裕がないのだ。

本質的に急け者な私は、考える暇もないくらいに何かに打ち込む、ということを今までしてこなかった。

一日を終えた達成感と共にくる疲労というものがとても爽やかなものであることを、この城に来て初めて知ったのである。

真面目に出会い探しをしているわけではないが、平民として暮らすというのは想像以上に良さそうだ。

私は一度寝返りを打つたら転げ落ちるであらう大きさ（身をもつて検証済み）のベッドに寝転がり、ぼんやりと天井の模様を眺めていた。

季節は秋の初めである。少し暑さが残っているので、寝間着用の

薄いワンピース一枚で丁度良い。

外で鳴く虫達の声が室内に響く分、心の中はしんと静かであった。

あの失態に關しては、結局何のお叱りも受けないままでいる。確かに今まで私が城内でやらかしてきたことと比べれば、大したことではなかつたとも思える。

しかしあのときのミルキアさんの狼狽ぶりは尋常ではなかつた。加えて、あのときのミルキアさんのしおらしい態度も尋常ではなかつた。

コーディス家の一族に囲まれて育つた私は、危機的状況を予測する能力値がかなり高いと自負している。だからといってそれを避けられるのかというと、それはまた別の話になつてくるが。

その危機的状況予測レーダーが、最近「これはやばいこれはやばいこれはやばい」と、やたらと警報を発令している気がする。

追い討ちとなるのは、あの一件があつた後、ミルキアさんの出没率が格段に減つたことである。

彼女は私の教育係のよつなものなので、今まで一日の内に顔を全く合わせないということは皆無だつた。むしろこちらは会いたくないのにやたらと会わざるを得ない状況であつた。

それがあの一件のあつた翌日、彼女の顔を一度も見なかつたのである。

その日、午後になつても姿を見せぬミルキアさんに不安を覚えた私は、閃いた。

そういえば今日は一度も田立つた失敗をしていなかつた、と。

教育係がミルキアさんな以上、説教係もミルキアさんである。

私が何かやらかしたときには、彼女は必ずといって良い程現れた。

そこで私は敢えて問題を起こすことにした。

最早そのときの私にとっては、ミルキアさんの出現よりもミルキアさんの消失のほうが恐ろしいことだったのだ。

手っ取り早く失敗を犯す方法は何かしらと考えた結果、昨日と同じ掃除用具を置き忘れることにした。

これなら偶然を装うための特殊な技術をあまり必要としないし、同じ失敗を翌日に繰り返すのである。あのミルキアさんなら、「何て学習能力のない！」と憤ること必至である。

早速実行に移すため、まずはそれとなく同僚に本日の会議の有無を聞いてみた。

すると今日は十五時から、王様と高位貴族で話し合いつための会議があるらしい。

時間帯も会議の重要度も申し分ないものである。これぞ渡りに舟。

そうして私は計画を実行に移した。

実は私が会議室を掃除しようとしたとき、同僚に「そこは午前中に終わった」と言われたのであるが、「大切な会議だし念には念を入れないと！」と何とかごり押し、無事任務を遂行させた。

しかしその日、ついに彼女が現れるることはなかつた。

せめてもの救いだつたのは、夕食のとき、別館の侍女長が、ミルキアさんからの伝言を預かってくれたことである。

彼女が言つにせば、ミルキアさんは本日他の仕事で忙しく、本館侍女長の仕事も彼女が兼任していたとのことだった。

渡されたメモには、走り書きながら美しい字で、
『首を洗つて待つていなさい』
と書いてあった。

私は心底安心した。

最悪、私の責任を取つてミルキアさん処刑もしくは投獄という事態になつていたのでは、とまで考えていたのである。我ながら考え過ぎであるが、無事が確認できて何よりだ。

一日には一度だけ城内を歩いているときにミルキアさんとすれ違つたし、今日は仕事終わりのほほミルキアさんが顔を出し、一昨日のことについてひつひつと絞られた。

しかし私の知らないことじりで変事が起きてこるのは確かなようだ。

一日続けて見たミルキアさんの顔色は、どちらも浮いたものではない。

説教中の顔なんてそりや浮いたものではなかひつと思つかかもしれないが、いつものミルキアさんであれば、説教中程生き生きしているものである。本当に。

私は彼女の生きがいに貢献しているのだなあと、常々思つていたわけだ。

しかし今日の説教は、言葉だけすらすらして、心はここにあらずという様子であった。

何事かに巻き込まれる前に、行儀見習いを中退すべきだろうか。

そんなことを悶々と考へている最中、ノックの音が響いた。
その後に続いたのは、鈴のように華やかで澄み切った声。

「オルカ、いる？私。アリシアよ」

扉の向こうで呼びかけるは、私をこの城に導いたとも言える女だつた。

疲れたしこれ以上面倒事は嫌だなあと思つたが、友達を無碍に扱うわけにもいかない。

反動を勢いにして起き上つた私は、のろのろと扉に向かう。鍵を開けただけで、アリシアは勝手に入つて来た。

こんなに気の強い娘ではなかつたと思うのだが。

彼女は未だ侍女の制服のままである。

後ろ手に扉を閉めると、切羽詰まつたような顔をして私に言つた。

「こんな時間にごめんなさい。あなたにどうしても頼みたいことがあるの」

「はあ。頼み事の内容にもよるけれど」

アリシアは本来おつとりのんびりとした性格である故に、この雰囲気的に、何か只ならぬことが起きているであらうことは窺える。

勿論可能ならば回避したい。

「あのね……オルカは友達だつて信じてるから、言えるお願ひなの……。今から話すことには、誰にも言つてはいけないことも含まれているのだけれど、お願ひ、できる？」

「えーと。だから引き受けるかどうかは頼み事の内容によるわ。でも言つてはいけないとややは内緒にするわ

アリシアは私はつきりしない受け答えに不安げになつたが、どうしても慎重になつてしまふのは仕方がない。

私の危機的状況予測レーダーがつむるさいのだから。

「東館の近くに、立ち入り禁止区域があるのは知つていらして?」「『めんなさいアリシア私明日早番なのだから今すぐにでも寝ないと』

「ちよ、押さないでよ、話を聞いてよ、つていつかあなた早番じやないでしょ!…わたくし、流石に早番の方に頼むのは酷だと思つて、当番表きちんと確かめてきたのだから!」

ぐ、あのアリシアが逃げ道を塞ぐだなどと「つ頭の良い戦法でくるとは。

「とつあえず、話だけでも聞いてくださいな」

私は渋々頷いた。

「それでね。王家の方々は、毎月一晩だけ、そこの奥にある離れの館で食事会をするの」

「へー」

「わたくしはそのときの付き人兼給仕人としてお供する役目を申し付けられているのだけれど、それが今日なのね」

「ほー」

「実はわたくしその」とすっかり忘れて……今夜絶対外せない予定を入れてしまったのよ

「はー」

「オルカ、お願ひ!今夜の仕事変わってくれない!?」

「ふーん

「ほんと!?ありがとつオルカ!あなたは眞実の友達だわ!」「え!?」

しまつた。兎に角感情移入とか同情とかしないよう、適当に聞き流していたら、引き受けたような誤解を与えてしまった。

「いやいやいや、えーと、そうじゃないの。今ちょっとぼーっとしてて。あの、ごめんなさいね。やっぱり私じゃなくて他の人に頼んだほうが良いと思うわ」

「だつて……他の友達は明日早番なのよ」

「早番じゃない人なんて腐る程いるでしょうに……」

私がそんなことをぼやくと、何故かアリシアは茶色の瞳に涙を一杯溜めた。

え？ 私何か地雷踏んだ？

「いないわ……そんな人」

「いやいやいるでしょ。何なら使用人の館を端から回つて……」

「こんなこと頼める人はあなたを入れて三人しかいないのよ……。その内一人は明日の早番。もう一人は私と同じく付き人と給仕の仕事を頼まれているし……。残るはあなただけ。……私、友達がいないの」

私は絶句する。

どうやら非常に纖細な領域に足を踏み入れてしまつたらしい。
早く抜け出したい。

いやしかし優しくて気だての良いアリシアに友達がいないなんて、考え難いことだが。

「わたくしの恋人のこと、お父様から聞いたんでしょう？」
「ええ、まあ。お城の文官だつてことしか知らないけれど」
「彼、とっても魅力的な方でね？ 女の人から、凄く、人気があるの。それが、男爵家のわたくしと付き合うことになつたから、わたくし

今、お城の女性の方々からとても疎まれているのよ。金と立場で彼を唆したって」

「そ、そなんだ……。でも、何も全員から嫉妬されてる、ってわけじゃないでしょ？」「

「それはそうだけれど……。でも、やっぱり駄目だと思つ。私のことを良く思つていらない人達の中には、あからさまに嫌がらせをしてくる方もいる。そういうことがあってから、以前親しかつた友達も随分離れていつたもの。多分、自分達も同じように扱われるのではないかと恐れているんじゃないかしら」

これは典型的な虐めである。

学生時代は頻繁に目にしていたものだし、私も経験したことはあつたが、王宮でも同レベルとは呆れたものだ。

「お願いオルカ。今夜の仕事、変わつてくださいな」

ここで折れない程の鬼の心が欲しい、と心の中で涙ぐみながら、私は結局引き受けてしまったのだった。

因みに彼女の外せない予定が何なのか受けた後で聞くと、彼との逢引だと言われた。
くたばれと思った。

集合時間が二十一時と言われ、私は大変慌ただしく立ち入り禁止区域のほうに向かった。

シャワーも浴びて化粧も落として制服も着替えた後だったのである。

しかもアリシアとの主な会話が終わつたのが二十一時ぴったりだった。

先にタイムリミットを言つてほしかつたと訴えたら、「あらあらごめんなさいまし」と、いつこうときだけおつとりをかまされた。素でそういう性格なのか、もしくはコーディス家のような才能を秘めているのか、つい疑つてしまつ。

再び髪を整え、気休めながらも適当に化粧をし、制服に着替えた後だったので、多分十五分くらい遅刻しているだらう。

そうして息せき切つて東館を裏口から出かけたぎりぎりのところで、私はコーラーンした。
集合場所である立ち入り禁止区域の門のところに、とても不吉な物体を発見した気がする。

今度は恐る恐る裏口から顔だけ覗かせ、暗がりの中に目を凝らしてみた。

門に灯りがぶら下がつてるので、それははつきりと見えた。いる。確かにいる。

乱れや癖の全くないショートカットの金髪に、同じく乱れのない姿勢。その場には彼女その他にあのだるそうな騎士しかいないようだ

あるが、それでも背筋を伸ばし、両手を前に組み、突っ立っているだけなのに気品が溢れ出でてくるような姿。私なんかより彼女のほうが貴族という言葉が似合いそうである。

身につけているのは白のメイドキヤツプに、黒地に白の膝丈エプロンドレス、そして黒のタイツに茶色の革靴。

つまりまあ、標準装備のミルキアさんである。何てこいつだ。

例の騎士と並んで佇んでいるものの、二人の間に会話はなさそうだ。

状況からいって、アリシアの言っていたもう一人の付き人兼給仕係が彼女なのだろうか。

そうであつてほしくないと思つが、そうでなかつたとしても叱られそうである。

これ以上ぐずぐずしていても時間超過を長くするばかりなので、私は観念して外に出た。

やはり秋の夜ということで、中にいるより幾分涼しい。

ミルキアさんと隣の騎士は、一人して不審そうな目で私を見ると、お互に視線を合わせた。

私は内心びくびくしながら、とりあえず一人に挨拶する。

「御機嫌よう騎士様、御機嫌ようミルキアさん

「どーも」

「こんばんは、オルカ。わたくしに何か御用があつて?」

「いえいえ。先程友人に頼まれまして、この奥に用があるのです

騎士は刀を鋭く細め、ミルキアさんは眉を顰めた。

「ついでにこの仕事は極秘らしいが、多分この一人は知っているだろう。

そう思い、私は正直にぶつちやけた。

「本日の立ち入り禁止区域の中の館にて、食事会がなされるのでしょうか？その付き人兼給仕を仰せつかつて居るアリシアが、急用で来れないといふことで、私が代理をさせていただくことになりますた」

ミルキアさんは無表情に私を見つめているが、恐らくこれは驚いているのだと思つ。

隣の騎士が、固まつたミルキアさんとビーにでもなれな態度の私を見比べて、「あーあ」と呻いた。

彼は額を手で押さえると悩ましげに仰つた。

「おまえ、空氣読め」

「なあつ……」

異端種とか馬鹿とか阿保とか色々言われ続けてきた私なので、悪口にはある程度耐性があつたが、この言葉はかなり心外だった。

私ほど空氣が食糧じやないかと思つて、空氣を読みまくつてる人間は少ない思つ。

空氣を読んだ上でやむなくそれをぶつ壊すとか、空氣を読んだ上で敢えてそれをぶつ壊すとかは間々あるが。

「私のどこが空氣を読んでないというのです。大切な親友の逢引のため、危機的状況予測レーダーを無視して駆けつけてきたというの

「」

「……アリシアはそんな理由のために代理を頼んだのですか」

私は、今回ばかりは「あ、しまったやつちまた」とは思わない。つまりばらしたのはわざとである。道連れにしてやる。

本来役目を果たすべきがアリシアであることを知っているとなると、やはり今回の仕事仲間はミルキアさんで間違いなさそうだ。まあ。

「つーか危機的状況予測レーダーって何だそれ……」

「言つたでしょ、シユルツ。オルカは少し螺子が足りない娘なのです」

どうやら私のいないとこりで不愉快な会話が展開されていた模様である。

とそのとき、東館の脇から角灯を持った騎士が現れた。それに続いて数人がこちらに歩いて来る。

「王家の方がいらしたようですね。給仕については後で教えます。説教も後にしましょう」

嫌な台詞まで残されたが、私はそれどころではなかつた。咄嗟にミルキアさんの陰に身を潜める。

「……何ですか急に。あなたは曲りなりにも侯爵家の娘なのだから、今更王族の方々に恐れを成した、なんてことではないでしょ?」「いや、まあ、お恥ずかしながらその通りです」

よくよく考えてみれば王家、である。

つまり、皇太子がいる。

今まで出没フラグが立つようなところには努めて行かなかつたことにより、何とか接触を回避してきたといふのに、これで全てが水の泡になつた。このときに限つてすつかり失念していたのである。しかし今から短時間でミルキアさんに私の黒歴史をぶちまけるわけにもいかない。

「今更何を言つてゐるのですか、みつともない。ほら、正々堂々としなさい。あなたは貴族の令嬢でしょ?」

「こんなときだけ身分を持ち出してきて、理不尽である。しかしされるのが時間の問題であることはわかつたので、仕方なく私は彼女の隣りに並んだ。

王家の方々が近付いて来たところで、私達は頭を垂れる。顔を上げたところで目が合つたのが、お約束にも皇太子様であつた。

彼は水色の目を丸くして言つた。

「お久しぶりですね、オルカ嬢。お元気そう何より

その場にいた全員の視線が一気に私に集中する。これがあるから、皇太子様に絡まるのはあまり気持ちの良いものではない。

「ええ、お陰様で」

「あなたが行儀見習いでこちらへ来ているとこつ話は伺つておりましたが、まさかこんなところでお会いするとは思つてもみませんでした」

「ええ、全くです」

ついでに言つと全くお会いしたことないかもしれませんでした。

私達の会話を聞いて、周りから「ほつ」、「あら」と呟きが漏れ
た。

王様と王妃様である。

王妃様はにっこりと微笑んだようだ。
しかし暗闇の中なので、その笑みがどういった意味のものなのか
量りかねる。

「あなたがオルカ嬢なのですね。お噂はかねがね聞いていましてよ
「それは大変恐縮です」

なるべく平然と受け答えしようと努力はしているが、本心では土
下座して平謝りである。

息子さんを振つてすいませんでした。歴史に泥を塗つてすいませ
んでした。

王様に至つては、
「これは楽しい宴になりそうだ」
などとのたまつてゐる。

何だか私の謝罪大会となりそつた予感がするぞ、と私は身震いし
た。

我々は列を作つて立ち入り禁止区域に足を踏み入れた。

先頭をるのは角灯を持つ騎士で、その後に王様、王妃様、皇太子様、私、ミルキアさんと続く。最後尾はやはり角灯を手に持つたもう一人の騎士である。

私の並び順は、ミルキアさんが気を利かせて自分より前にしてくれたのであるが、こちらとしては全く余計なお世話である。

お陰で道中、皇太子様の当たり障りのない会話に付き合わなくてはいけなくなつた。

その会話で手に入れた情報であるが、この次の門まで続く細い小道の領域は「ハイネの畑」と呼ばれているらしい。

ハイネというのは確か庭師の名前だったから、この畑もハイネさんとやらが管理しているのだろう。

畑には一切灯りがないので、前後の角灯持参騎士が頼りとなる。勿論列後部の私は前方の灯りの恩恵をいただけないので、皇太子様の背中を見つめて歩くこととなつた。

しかし皇太子様は全体的に藍色の衣服を身に付けていらっしゃるため、夜間見えにくい。白とか黄色とかの服にすれば良いと思つ。私のために。

一番目の黒いアーチのところに立つていたのは、今夜はあの妙な口調の女ではなく、普通の男騎士であった。

彼は門の脇に立ち、ただ無言で真つ直ぐ前を見つめている。

本来門番とはこういうものである。

そなたにスタンダードオブナイトの称号を与えよつた、などと考えながら、私は門をくぐつた。

油断していると危機感やら不安感やらが押し寄せてくるため、くだらないことでも考えていないと落ち着かないのだ。

流石に庭園内にはぼつぼつと外灯が置いてあり、それが花々を照らし出している。

本来は幻想的とも言える光景なのだろう。しかし時たま吹き抜けの涼しい秋風のせいか、はたまた状況が状況だからか私には不気味に見えた。

一向はそのまま現在の道を真っ直ぐ行くのではなく、北に折れた。どうやらアリシアの言っていた離れの館とは、三日前私がここに来たときにも目にした、あの建物であるらしい。館の外郭は暗くてここからではわかりづらいたが、半分程の窓に灯りが点いているのははつきりと見えた。

静かで涼しい夜の外で、館内の橙色の光を見るといつのは、何だかとてもほつとさせるものがある。

「あそこが今夜の我々のメインホールです」

木々の向こうの建物を指さして、皇太子様が言つた。

私は頷く。

「とても立派ですね。私の実家くらいありますもの」
「北東の館と呼ばれています。あちらで夕食をとる、といつのは聞いておられますね」

「ええ。王家の食事会で給仕ができるだなんて、光栄です」「よろしければあなたも食事を一緒にされませんか？」

私は慌てて首を横に振つた。

そんなことになつたら、私に会話の先の向く確率が高くなつてしまつ。

「お誘いは大変嬉しいのですが、わたくし先程夕食をとつたばかりですの」

「それは残念です。ですが、そうですね。私達の食事会は時間的にかなり遅いので、無理もありません」

「王族の方々は、いつもこのような時間にお召し上がりになるのですか？」

「いえ、そんなことはありません。この月一の食事会はなるべく日立たずに行いたいので、この時間帯にしてあります。気休めのようなものですが」

「そうですか、と相槌を打つて、私はそれ以上は何も聞かなかつた。知ると自分の立場が不利になる予感がしたので、このことに関しては無関心を貫くつもりでいた。

「ここから緩やかな階段になりますので、足元にお気をつけください」

「お気遣い感謝いたします」

石段を数段上り、黒い木々の間を抜けると薔薇の薔を這わせたアーチが見えてきて、そこにも一人騎士がいる。

アーチをくぐつて、ようやく北東の館に着いたようだつた。

玄関前には小さな広場があり、中心には今は動いていないが噴水もある。城と同じ、クリーム色の壁にオレンジ色の屋根を持つ横長の建築物であつた。

一階建てのその館は、奥行きまでは見えないので定かではないが、少なくとも15～20程は部屋数がありそうだ。

大きな建物で灯りもかなり点いているといつに、驚く程にひつそりしている。

並んだ格子窓から確認できた人影は、今のところ侍女と思わしき女性一人のみである。

私がぼーっと北東の館を見上げていると、後ろからミルキアさんに軽く小突かれた。

「前を見なさい」

言われた通りにすると、王家一行は既に館の中に入つて行っている。

私は歩調を早めてその後を追いかけた。

エントランスホールは四角く吹き抜けになつており、天井には大きなシャンデリアがつり下がつていた。左右には通路、正面には階段がある。その階段も途中で左右に別れ、二階のそれぞれの通路に繋がつていくようであった。磨きこまれた大理石の床の上に、臙脂色の絨毯が広がっている。

盲目の男の出で立ちや立ち入り禁止区域内の建物ということで、私は北東の館は研究施設か何かでは、と踏んでいたのだが、見たかんじではただの邸宅である。

私達は仕事で来ているので館内では王家の方々と別行動かと思つ

たら、そういうわけでもないらしい。

特に何も言われないので私は相変わらず皇太子様の背中を追いかけ、ミルキアさんも無言で私の後ろを付いて来ている。

ここまで来ても誰にも会わない。

ただ、どこから仄かに食べ物の良い香りが漂ってきた。ついで、何かを切つたり炒めたりする、料理をしているであろう音も小さく聞こえる。

「お待ちしておりました」

ふいに静かな男声がホール内に響いた。

左脇の廊下の入り口に、いつの間にか瘦身の男が佇んでいた。彼は左手で杖を握り、右手を王族の手前にも関わらずズボンのポケットに入れている。

それは私が三日前にした、盲田の男であった。

彼は恭しく頭を垂れたが、前にも後にも無表情である。

反して王様は顔を綻ばせた。

「久しぶりだな、シゼル。元気であつたか？」

「お陰様で何不自由なく生かされております。食事の準備が整つております故、どうぞ奥へ」

男の表情は読めないため何を思つているのかわからないが、その口調は皮肉げで無愛想だ。

王様相手にこんな態度を取るだなんて一体何者だろう。どんなに地位が高かったとしてもこれはない。よっぽど親しい間柄なのかもしないが、少なくとも男のほうからは好意を感じられない。

しかし当の国王陛下は特に気にした様子もなく、言われた通りに奥へ進んだ。

王妃様も男に挨拶してから、王様の後に続く。

皇太子様の番になると、彼は何を思ったのか私の手を引いて隣に立たせた。

「シゼル、彼女は侯爵家のオルカ・ユーディス嬢。最近行儀見習いで侍女として働いてくれている。オルカ嬢、彼はシゼル。この館の主人だ」

「は、初めまして」

「これはこれは。よくいらっしゃいました。この王宮の掃き溜めであなたのような『令嬢を働かせるのは心苦しい』ことですが、大変光栄な機会でもあります。どうぞ今宵はよろしくお願ひいたします」

すらすらと世辞を並べる口とは相反して、シゼル様とやらの表情は無関心で冷たい。

私のことを覚えていないのか覚えていないふりかはわからないが、酷く奇妙であった。

「ええ。じつうじよろしくお願ひいたします」

そう答えると皇太子様は満足したようで、先に進んだ。

私も「では」と挨拶し、追いかけよつとと思ったところで、後ろから服を引っ張られた。

「わたくし達は一先ず待機です」

「あ、はい……」

私はす「」す」と引き下がる。

同時に、時間がないため仕方がなかつたとはいえ、これから業務をそつなく果たしていけるのか心配になつた。

改めて考えてみれば、まだまだ見習いの私は、王族の方の身の回りのお世話なんぞしたことがないのである。

その初仕事がこんな飛び入り代理人で、上手くいくはずがない。もしここで失敗したら確実に父に情報がいくな、と思い、私は顔を青くした。

ふと気付くと、いつの間にかシゼル様が私の前に立つていた。もうとっくにいなくなつたものと想えていたので、少なからず驚く。

彼はポケットから右手を抜き取ると、私に差し出してきた。その掌と、細長い指には、絆創膏が幾つも貼られている。一瞬エスコートしようとしているのかと思ったら、彼はその手をすぐに取り上げた。

「約束は果たした」

静かに呴いた彼の顔が、薄く笑つた気がした。

それだけの動作を残して、彼も廊下に入つて食堂と思われる部屋に姿を消す。

どうやら私のことは完全にばれていたらしかつた。

シゼル様が消えてから少しも経たない内に、上階から小刻みに足音が聞こえてきた。

つられるように見上げれば、一人の侍女が階段を降りてくるところであった。

彼女は一度立ち止まつてこちらを見ると、「うひゃあつ」と奇天烈な声を上げた。

「シゼル様の彼女じゃーん！」

ミルキアさんの顔がぎつと私に向いたのがわかる。
私は冷や汗をかきつつ、首を傾げた。

身に覚えのないことをほざいたその侍女は、メイドキャップを付けておらず、薄茶の髪を頂点でお団子に結っている。
グラマーな程度にふくよかで、灰色の瞳を中心に据えた大きな三白眼が特徴的だった。

片耳に三連にして付けられた銀の輪型ピアスはともかくとして、格子柄のタイツは明らかにご法度だろう。

学生時代、不良ぶつた人種やそのお仲間が、規定の学生服と私服を混ぜて着ていたのを思い出した。

彼女は階段を小走りで駆け降りると、私の目と鼻の先で止まった。

「こんばんは！あたしが誰だかわかるかなつ？」

城内でこんなくだけた話し方をする人物は、三日前見た彼女が初めてである。

であるからには。

「……門番さんですか？」

「せいいかーい！覚えてくれて、嬉しいなあつ。シゼル様の彼女だから、たゞくさん気に入られとかないとね！」

ミルキアさんが聞き捨てならない言葉と判断したのだろう、隣でひとつ咳払いをした。

「失礼ですが、その『彼女』というのは恋人という意味にとつてもよろしいのでしょうか？」

「ちつ、違いますよ！きっと妙な誤解です！」

私は慌てて訂正を入れる。

「えー、恋人でしょー？シゼル様が知らない女の子連れて歩くなんて初めてだしー。あつ、あとあたし、一人が手を握り合つてるの見ちゃつたんだつ！きやつ！」

「握り合つただなんて人聞きの悪い！あれば手に刺さつた棘を取つて差し上げただけで……！」

「一先ず静かにして頂戴」

ややドスの混じつた声で言われ、私は口を噤んだが、目の前の侍女は全く気にしていないようだった。

「ねえねえ、そんなことより、あたしニイツテゆーの一君は？」

「あ、私は……」

「彼女はオルカ・コーディス。本日共に給仕を行うことになつています。ですが急に代理で入ることになつたので、わたくしはこれら彼女に仕事を教えなければなりません。王家の方達はもうとつく

に席に着いています。あなたは先に行つて給仕をなさい。わたくし達も後で手伝いに行きます」

「はーい、了解でーす」

諫めて黙らせるのは無理だと判断したのだろう。ミルキアさんは口を挟む余裕もなく言葉を並べ、さつと二イを追い払ってしまった。

二イという女は小さことにほんとに氣にしない性質たちで、ミルキアさんはそれをよく見抜いて上手くやり込めている模様である。

どんな問題児もミルキアさんの手の上で踊らされる運命なのね、と私は心中で涙を流した。

ミルキアさんは疲れたように溜め息を吐き、私に向き直った。

「それでつまり、あなたは三田前シゼル様にお会いしたのですね」「えっと……」

先程のシゼル様とのやり取りは勿論見られていただろうし、二イの誤解につられて、つい決定的な証言を自ら話してしまった。

今回こそは逃げられなさそうだ。今まで逃げているとは言い難い状況であったが、

「はい……お会いしてました……」

私は呟くように告白した。

ミルキアさんの眉間の皺が濃くなる。

「わたくしは今意地悪なことを聞きました」「え?」

怒っているのかと思つたら、そういうわけでもなさそうだった。
それよりも彼女のやや俯いた顔は、真剣に思いつめているふうである。

「ごめんなさい、オルカ」

「え、え？ それはどういう……」

どういう意味の謝罪ですか？

そう聞こうとしたが、ミルキアさんはきつと顔を上げ、真っ直ぐに私を見つめた。

「給仕の作法は覚えていまして？」

「え、と、多分……はい」

急に話が変わったので一瞬頭がこんがらがったが、恐らく待機の仕方や食事の出し方のことだろう。

教わったのはかなり前だったかもしれないが、私の実家もいわば給仕係の職場であったので、大体はわかる。

「では、簡単に仕事の流れと、この屋敷での注意点を今から教えますね」

そう前置いて、ミルキアさんは話し始めた。

私は相槌を打ちながら聞いていたが、先程の謝罪が気になつて、実質半分も頭に入つてこなかつた。

シードラッグの上流階級の食事は、他国と比べると品数が少ないらしい。

夕食で言つと、まず酒と同時に前菜が出される。その後スープが出され、次いでメインディッシュとパンが出る。最後にデザートだ。この伝統は、建国後何世紀もずっと経済状況の良くない時代が続いたかららしい。勿論種類が少ないだけで、その分ひとつのおメニューの量はしっかりといる。

私が参戦したのは皆が前菜を食べ終えようとしているところだったので、お次はスープである。

見た目通り、この館は人がいない。

給仕はニイと私とミルキアさんの三人である。

盛り付けから始まり、厨房から料理を運ぶのもその内の誰かがやらねばならなかつたらしい。私達が駆け付けたとき、ニイは文字通り汗水垂らして働いていた。勿論食事の前でそんな見苦しい姿を見せるわけにはいかないので、彼女は一生懸命汗をハンカチで拭つていた。

見た目や態度に反して、一応仕事は真面目にやっているらしい。

私達の姿を見ると、ニイは天からの助けとばかりに顔を煌めかせた。

本来初めから一緒に働いているべきところなので、私はやや居心地が悪い。

「良かったー！何かね、今日フェイが時間配分間違えたっぽくて、厨房のほうもかなり忙しいんだよね。あたし主に料理の手伝いしてくるから、後ろろしくねえ」

言い残すと、彼女は汗を撒き散らさんばかりに走り去つて行つた。

ミルキアさんは料理を運び、盛り付けを手伝い、私は給仕そのものに専念する、という役割分担になつた。

早速空になつた前菜の皿を回収すべく、私は食堂に足を踏み入れる。

先程の角灯持参騎士は、食堂扉の表側と内側にそれぞれ一人ずつ待機していた。

食堂は横に長い空間で、真ん中に木製のつやつやしたテーブルと、猫足の椅子が並んでいる。席は合わせて十六あるようだ。

入口から見て右奥の席に王様が腰を下ろし、その左に王妃様と皇子様、右側にシゼル様が座つている。

天井からは小さめのシャンデリアが一つ吊り下がる。燭台も四方の壁にひとつづつついているので明るい。

ざつと見渡したかんじで、絵や陶器の装飾品は一切なかつたが、代わりに王様の席の後ろに、小さなピアノがちょこんと置かれていた。

正面の壁には縦長の格子窓が一つついている。外が暗くて中が明るいので、窓には食卓の情景が鮮明に映されていた。

私は「失礼します」と言い置き、食器を片づけ始めた。その際飲み物と水差しの残量チェックも忘れない。今夜、グラスに入っているのは、皆一様に赤ワインのようだつた。

王様は早々にワインを飲み干し、グラスの中には代わりに水を入れている。もう酒はいらないという合図である。

シゼル様と皇子様はほとんど赤ワインには手をつけていないようだ。

意外にも王妃様のグラスが空のままだつた。これは注ぎ足さねば。水差しのほうは大丈夫そうね、と確認し、私は盆に皿を重ね終えた。

そして運び去ろうとしたところで、王妃様が急に私の名前を口に

した。

「ねえ、シゼル。彼女がオルカ・コーディス嬢よ
「ええ、先程皇太子様が紹介してくださいました」
「覚えてない？わたくし話したでしょ？夜会でティーダを振った
のは彼女なのよ」

私とシゼル様の動きが同時に止まった。
シゼル様の硬直は一瞬のことであつたが、私の硬直はしばらく続
いた。

動こじにも、今の会話を無視して動いて良いのかがわからない。

「それはそれは。奇異な方ですね」

シゼル様の口調に若干笑みが混ざった。

「ここは謝るべきところなのか？

しかし今更謝つたところで嫌味にしかならない氣もある。

私は聞こえないふりをして立ち去るつとしたのだが、王妃様が私
を呼び止めた。

「ねえオルカ嬢。どうしてティーダじゃ駄目だつたのかしら。わた
くしづつと気になつっていたんですよ」

「え、ええと」

何と言おうか逡巡していると、皇太子様が少し始めるような口調
で言った。

「母上、そのようなことを尋ねては彼女も困ってしまいます

「あら、『めん遊ばせ。困らせるつもりはなかつたのよ。そのことについてはわたくしもティーダ自身も怒つてなどおりませんから。ただ純粋に気になつただけ』

王妃様は切れ長の皿を更に細めて、狐のよつに笑つた。

「ねえオルカ嬢。折角なのですから、そこにお座りなさいな。ちょうどぐらい給仕が遅れても良いでしょ? あなた」

「ああ、構わない。ゆっくり食事がとれるのは、それはそれで良いことだ」

私は、

「タ、タイヘンコウエイテス」と引き攣つた声を絞り出すのが精一杯であった。

ミルキアさんに給仕の全てを任せ、私はシゼル様の隣に腰を下ろすこととなつた。

緊張で、相槌を打つだけでも体がぎしきし言つ氣がする。

「あの、その、聞き及んでいることは思いますが、当時私には気になる殿方がおりまして……」

事情を説明し出すと、早速王妃様が口を挟んだ。

「ええ、存じておりますよ。わたくしがお聞きしたいのは、あのときダンスを断つた理由ではなく、あなたがディーダを選ばなかつた理由です。あなたが想い人に振られた後だつて、ずっとディーダを避けていたでしょ?」

それを当の皇太子様本人を目の前にして母親が聞くのか。正面に座る皇太子様も、私と同じことを思ったようである。

「母上、あなたが私のいる前でそれを問うのは、彼女にとつては酷ではないでしょうか」

「そう? だつてあなただつて、オルカ嬢のことがまだ好きだというわけではないでしょ?」

「それは……」

王妃様はちつとも悪いとは思つていなこようで、小首を傾げてみせた。

私的に驚きだつたのは、『まだ好きだというわけではない』とい

う言葉。『まだ』ということは、当時は好きだつたのか。

勿論本人の論証があるわけではないから、確定ではないけれど。全く接点がなかつたし、よつほど私の容姿が好みだつたのかもしない。物好きなものだ。

次に穏やかに口を開いたのは、王様だつた。

「ヒルダ、聞き方を変えれば良いのでは？ 例えば、オルカ嬢の好きな異性のタイプはどのようなものだ？」

「ああつ。そうですわね。それがいいわ。どうなのです？ オルカ嬢」

三人の視線が私に集中する。一人はのんびり答えを待つように、一人は興味津津に、もう一人は苦笑を浮かべつつ控えめに。シゼル様だけはそんなことをしても意味がないのだろう、視線は相変わらず前を向いていた。しかしこの沈黙の中だ、どうせ意識せずとも聴覚は私の返答に集中しているに違いない。

何故王族の方々にお泊り会のガールズトーク並の暴露話をせねばならないのだろう。

何にせよ私はこんな性格だから、面白い返答は出したくても出せない。

「それは私にもよくわかりませんの。私にいわゆる想い人がいましたのは、今までの人生で一度だけなのですから」

「あらまあ。まだポルテツフェル伯爵家の『長男を想つてらつしやるの？』

「と、とんでもございません」

彼はあの一件の一年後に結婚しており、最近子どもも生まれている。

そこまで執着があつたわけでもないし、振られた瞬間に未練ともおさらばしていた。

「私は異性に特別な感情を抱いたことがあまりありませんの。伯爵家の『長男のこと』に關しても、今本当に好きだったのかと聞かれれば疑問を覚えます。年も離れていましたし、きっとただの憧れだったんだと思いますわ」

「Jのような公式の場で『私の周りにまともな男がおりませんでした』などとは言つてはいけない。

そんなことをしたら、私が誰をまともではないと思つているのか、すぐにはばれてしまつからだ。

「昨日会議でコーディス侯爵とお会いしてきたのだが、……彼の話は本当のようだな」

王様が感慨深げに言つた。
嫌な予感しかしない。

「失礼ですが、父が何か……？」

「そなたのことを、『理想の高い娘』だと言つておつたよ」

あのコーディス家の狸頭領の癖にぶつちやけ過ぎである。
それくらい私の風評などどうでもいいのか。確かに今更妙な噂が一つや二つ増えたといひで変わらないだろ？

私は何とか心を落ち着かせて、ゆつくりとがぶりを振つた。

「それは誤解ですわ」

「何にせよ、あなた今は恋人などいらっしゃいませんのね？」

「ええ。おりません」

「想い人も」

「おりません」

王妃様は少し考えるような素振りを見せてから、再び私を見つめた。

今度は少し真剣な表情である。

「ねえオルカ嬢。あなたもしかして、王族や貴族の家庭には嫁ぎたくないと思っていらっしゃる?」

「いいえ?そんなことはありませんが……。もしかしてそのことに關しても父が変なことを言われましたか?」

私を行儀見習いに送り出した本当の理由まで正直に言つてしまつたのだろうか。

「平民出の城勤め男性で、娘に良さそうな人間がいたら紹介してくれ、でしたつけ?あなた」

「ああ。そんなことも言つておつたな」

私は心中で頭を抱えた。

父よ、もう少し自重してくれ。

「その申し出についてはどうかお気になさらず。父の失礼な態度、代わつて謝罪いたします」

「気にするでない。そなたの父上はなかなか気持ちの良い人間で、私も仲良くなせてもらつている」

気持ちの良い人間だなんて、父には全く似つかわしくない称号である。王様、騙されているんじやなかろうか。

私はここの国に行く末が心配になつた。

「オルカ嬢のことについては、よくわかりましたわ。あなたも、これで良いかしら?」

「うむ。仕事で来ているのに話に付き合わせて悪かつたな。下がつて良いぞ」

結局王家の方々の真意がわからないまま、私は再び仕事に戻つた。ツェーヴラーグの王族は他人の色恋沙汰が好きなのだろうか。だとしたら私の話など何の面白みもなかつたと思う。

再び仕事に戻ると、ミルキアさんが何だか複雑そうな顔をしていた。彼女は私が会話をしている間時々給仕で姿を現していたので、所々聞いていたのかもしれない。

その後は話の矛先が私に向くことはなかつたので、私は一先ず安心した。

また、飛び入り参加の仕事であつたが、多くの時間を会話に費やしたので、目立つた失敗をせずに済んだことも良かったといえば良かった。

やがて帰る時間となつた。あと三十分程経てば、そろそろ日付も変わる時刻だ。

シゼル様はハイネの畑に入る門のところまで見送りに來た。

「それじゃあ、また。一ヶ月後に会える」とを楽しみにしてる
「ええ、お元気で」

王様は名残惜しさを隠しもしないようだったが、シゼル様は相変わらず無愛想で機械的な応対をしている。

王妃様と皇太子様も別れの挨拶を口にし、いざ帰らんといつ雰囲気のところ、シゼル様の声が響いた。

「最後にひとつだけ、お願ひ申し上げてもよろしいでしょうか」

そのとき、空気の質が変わるのがわかつた。

今まで別れを惜しみながらも和やかだったその場が、俄かに緊張を帯びてくる。

「聞いひ」

王様が硬い声で言つた。

「オルカ嬢を、少しの間お借りしてもよろしいでしょうか」

シゼル様以外の皆が、騎士達さえも、息を詰めたようであった。硬質な空気は一気に失せたが、代わりに戸惑いがその場を支配する。

私、彼に何か不快なことをしただろつか。

王妃様だけは何故か暢気そ�で、「あらまあ」と少し楽しげに呟いた。

「一体どんなご用件で彼女を借りる予定ですか？」

「少し、夜の庭園を案内していただこうと思いまして」

もしかして、また私に花の通訳を頼むつもりなのだろうか。だとしたら、あのときの拙い説明は彼なりには成功だったのかも知れない。

「オルカ嬢が良ければ、別によろしくってよね？あなた」

「あ、ああ」

王様は頷いたが、そのまま驚愕に見開かれている。彼の視線の先を辿れば勿論シゼル様なのであるが、一体何がそんなに……と、思つてシゼル様を見ると、彼はうつすらと笑みを浮かべていた。

月明かりを背にして、暗闇の中虚ろな田で笑みを浮かべるシゼル様。

これつて私の死亡フラグなんじゃなかろうか。

「よろしいですか？ オルカ嬢」

そう言う彼の声音は、言葉遣いは丁寧あれど、やはり有無を言わぬ何かを含んでいる。

「はい……」

結局私の選択肢なんてひとつしかないのだ。

ハイネの畠の小道は舗装されていなかつたが、庭園の道は石畳になつてゐる。

革靴を挟んで伝わつてくる“じじじ”とした感触を楽しみながら、私はシゼル様の後ろをのんびりと歩いた。

私に案内を頼む的なことを言つてはいたが、今のところ案内しているのはシゼル様である。

というか、彼が勝手気ままに散歩をしているというのが正しい。私が歩みを止めれば、さつとまたシゼル様は急かすのだろうけれど。

相変わらず外灯が咲き乱れる花々を煌々と照らしていたが、もうそれは不気味には見えなかつた。

王家の人々やミルキアさんがいないというのは、視界を変えてしまつ程に解放感を与えてくれるものなのかもしれない。

加えてもうひとつ理由があることを、私は自覚している。

目の前を行くシゼル様は得体の知れなさで言つたら誰よりもずば抜けている。しかし自分でも意外なことであるが、私はどうやらこの男に気を許し始めているらしい。

絆創膏の貼られた手を見せたのは、間違いなくちゃんと医務室に行つたことを示したかったのだろう。

彼が悪い人間ではないことを知つた今、彼という存在の不可思議さは、逆に私に安心感を与えていたようであった。

お城では常に侍女らしく、時には淑女らしく振る舞わねばならぬい。

しかしシゼル様は依然正体不明である。侍女として接すれば良いのか、淑女として接すれば良いのかわからぬ。

じゃあ今のところはどうでもいいではないか。彼が正体を明かさないのが悪いのだから。

どうやら私には、そんな開き直りがあるらしかった。

加えて、彼と出会ってしまった事実はもう到底塗り変えられそうにないので、これが開き直らずにいられるかつての。

虫の声と杖が石畳を叩く音、それから一人の密やかな足音だけが庭園にこだまする。

今のところ会話はない。

でも、今の私にとってはそれは居心地の悪いものではなかつた。むしろ行儀見習いで勤め出してから、初めて息抜きができる心持ちだ。

「あなたは人が苦手か？」

唐突に、しかし歩みを止めることはなく、シゼル様の声が響いた。

「苦手、に思えましたかね。今日の食事会で」

「ああ」

呟くよつて、彼は肯定する。

私はうーん、と少し考えた。

普段なら、はいでもいいえでもわからないでも、このよつてな問には適当に答えていた。

しかし、理由がどうあれ折角少々心を許せる人間に出会えたのだ

からと、私は少し真面目になつて考察してあげた。

「苦手といえば苦手ですけれども、もし私が色々な街を旅して回るサークル団の家庭に生まれたなら、苦手にはなつていなかつたでしょう。無職の父親がいる家庭、とかでもそつかしさ」

シゼル様はそこで立ち止まって空を見上げた。
私もつられて見上げる。

半分の月が冷たい夜空に静かに浮かんでいた。
青い雲とその切れ間から覗く星が世界を包んでいる。

少しの沈黙の後、再びシゼル様の声が響く。

「駄目だ。わからない。その言葉の意味は？」

どうやら真剣に私の台詞を吟味していたらしい。
謎かけのつもりで言つたわけではなかつたが、自分の発言をまともに受け取つてくれたことが妙に嬉しかつた。

「私は家族曰く『じやじや馬』です。でも、そんな私を育ってくれたコーディス家に泥を塗りたいだなんて思つたことは一度もありません。じゃじゃ馬はじゃじゃ馬なりに周りに気を遣つてしているのです。無駄な努力かもしれませんが」

「成る程。確かに旅人か、既に汚名を被つている家庭なら、さして評判を気にすることもないな」

シゼル様は一瞬こぢらに顔を向けた。

「あなたは窮屈だったのか」

そう言つて再び前を向く。

「貴族に、それもユーティス家に生まれたことが」

私はぽかんとシゼル様の背中を見つめていた。

先程の彼の言葉を、何度も何度も反芻する。

そつか。私、窮屈だつたんだ。

彼の言葉で初めてその事実を自覚したわけではない。この感情はずつと昔から持つていたはずだ。

しかしそれを表に出すことは元より、心に上つてしまつことすら親不幸に思えて、ずっと考えないようになつていていたのだ。

だから赤の他人であるシゼル様が私の気持ちを代弁してくれて、酷くすつきりした気分になつていた。

そう納得して初めて、己が恋愛沙汰に興味のない理由もわかつた気がした。

ふいに無口になつた私を不審がつてか、彼がこちらを振り返つた。光のない目で私を捉える。

「間違つていたか？」

「いえ。違うのです。余りに正しかつたので、吃驚しました」

私はそこで口を閉ざしたが、彼は尚も姿勢を変えようとしない。

珍しく私は、自分の話を積極的にしようといつも気持ちになつてい

た。

本人は気付いていないだろうが、彼は私の代わりに悪役になつてくれた。

今彼に返せるものを、私は言葉以外に思いつかない。

「でも私、同時に家族には随分甘えていたんだなあつて、気付きました」

「『あのコーディス家』に、か」

「ええ。シゼル様は知つているのですね。『あのコーディス家』のこと

「ああ。以前食事会で、皇太子とあなたの一件が会話に上つたときには聞いた」

「じゃあ私の妹カノンのことも知つてます?」

「それも聞いた。双子……なんだとな」

「そうです。彼女にも随分甘えてました。お菓子を独り占めしたり、顔に落書きしたり、婚約指輪を壊したり」

「それがあなたの甘えなのか」

シゼル様の表情に少なからず呆れが混じつた。

私は大きく頷く。

「そうです。結局本当の意味で私が甘えられる存在なんて、家族だけなのかもしだせん」

シゼル様はそうか、と相槌を打つて、再びゆっくりと歩き出した。

どうやら庭園内を一周する、というコースらしい。

遥か彼方ではあるが、ハイネの烟へ続く門が見えてきて、私は少し残念に思った。

久々の息抜きの時間も、そろそろ終わりそうである。

「面白い話をしてもいい？」

ふいにシゼル様がそう言った。

私の心中には少しの不安が過ぎる。
自分のことを喋るのは良いとしても、彼の情報を知るのは未だ躊躇がある。

「それ、私に不利なことになりませんか？」

ふつと息を吐く音がした。どうやら鼻で笑つたらしい。

「再度私の前に姿を現して言つことか。何もかも手遅れだ」「えー……」

「忠告を無視するのが悪い」

忠告を無視したわけではない。変に嘘を吐けない性質だとか、変にお人好しになってしまふ性質がここまで私を流してきたのだ。
そう思つて不平を言おつとしたが、シゼル様が口を開くのが早かつた。

「だが、不利か有利かといつたら、有利な情報を与えるつもりだ」「そうですか。なら聞きます」

私は即答した。

シゼル様は頷くと、言葉を噛み締めるよつて、丁寧に声を響かせた。

「皇太子はあなたのことが好きだつた。今もその気持ちが変わつてた。

いないかどうかはわからないが、少なくとも気にはかけている

私は暫く絶句していた。

まさかここで皇太子様の話が出るだなんて、思いもしなかった。

「……何でそんなことがわかるのですか」

「態度でわかる。あと、以前の食事会のとき、本人が『振られた』という表現を使っていたからな。あなたをダンスに誘ったのは、奴にしては告白のようなものだつたのだろう」

といふことは、やはり私の容姿がよっぽど彼の好みだつたのか。そう思つたが、シゼル様の次の台詞はそうではないことを示していた。

「『夜会などという華やかな場面でも、自分を売り込もうなどという浅ましさが全く感じられない。いつもホールの隅にて一人で食事を取つている慎ましげな女性』だそうだ。奴曰く。それがまさかあなただつたとは、夢にも思わなかつた」

最後の一言が余計だが、今はそれ以前の言葉が衝撃的過ぎた。つい本音をぽろりと転がしてしまつた。

「皇太子様は阿保ですか」

しかしそれを聞いたシゼル様も、「ああ」と言つて微かに笑つたので、私は安堵する。

「さしづめ人付き合いが面倒で、食に集中していたのだろう?」

大体図星である。

「まあ、そんなところです」

私は少しむくれた。

「それが、私にとつてどう有利なのですか」

「最後の切り札を『えてやつた、といつ』ことだ。いつかわかるときが来るかもしねい」

彼はそれ以上何も言つ氣はないらしいので、そのときはまだ先のようだ。

そんなやり取りをしていると、いつの間にか門の前まで来ていた。シゼル様が私のほうに体に向いた。

「付き合わせて悪かったな」

「いえ、そんな。シゼル様の言つところの『有利な情報』を『えるためだつたのでしょうか?』」

「ああ」

「では、お礼を言つのは私のまつです。ありがとうございました」

私はへこりと頭を下げた。

見えていなくとも、やはり敬意は体でも表したい。

「私はてつきり、また花の通訳をさせられるのかと思いましたよ

「そうか。それはまた今度頼もう」

「え、と私は声を詰まらせた。

今度があるとは思つていなかつた。

「どうした?」

「あ、いえ。何でもありません」

そうして、私達は酷くあっさりと別れた。

帰り道、私は考えた。

今度って、いつだろう。

普段人との接触を回避したがる自分にしてみれば、この期待感は
画期的な変化である。

涼しい秋の夜風が吹いて、私はお腹の底の温かさを身に沁みて味
わつた。

上級学校に通つていたとき、進路希望を記入する紙が配られることがあつた。

周りの友達のほとんどは、提出するのがとても早かつた。

親の事業を継ぐ、とか。
大学に進学する、とか。
どこかに嫁ぐ、とか。

大体そんなものである。

私も迷るであつた進路は見当がついていた。恐らく上記で言えば三番目だ。

しかしそれは私の進路予想であつて、希望ではなかつた。

結婚なんてしたくなかった。

憧れていたポルさんとでさえ、結婚したいだなんて微塵も思つたことはなかつた。

今考へると、それでも彼に告白した私は随分と軽薄な奴である。

どうして結婚したくなかったのかが、最近ようやくわかつた。

私はコーディス家を出たくなかったのである。

コーディス家の評判を気にすることなく、自由に行動できる場所だなんて、当のコーディス家以外どこにもないのだ。

どこの貴族の家に嫁いだが最後、私の安らげる場所なんてどこにもなくなつてしまつ。

父は平民の家に嫁いでも良いと言つてはいたが、それはそれでコ

一デイス家の評判に悪い影響が及ぶ可能性がある。

家族にしか甘えられないから、離れるのは嫌だった。

でも、そんな家族だからこそ恩がある。迷惑はかけたくない。

そういうた中途半端な思いが私を苦しめていたことが、今ならわかる。

「まだ悩んでるの？ オルカ」

結局提出日の放課後まで頭を悩ませていた私に、補講を終えた友人が見かねて声をかけた。

それは上級学校二年目の冬で、空は真っ白に曇っていた。

本来私の席は廊下側だったのだけれど、皆が帰った後だったので窓際の席を勝手に借りて、一人で唸っていた。その席は隣にストーブが置かれていたからで、ストーブも私と一緒に唸っていた。

声をかけて来たのは財閥のお嬢様で、彼女は卒業後すぐに結婚することが決まっていた。

彼女は長くウェーブのかかったチョコレート色の髪を揺らして、私の席に近付いてきた。そして私の座る前の席の椅子を引き、スカートを押さえて腰を下ろす。

「行けばいいじゃない、大学」

さもそれが当然のように彼女は言った。

でも私は机に置かれた進路希望の紙に類を押しつけた。

「駄目よ。それは逃げだわ」

「逃げればいいじゃない。嫌なんでしょう？さつさと結婚させられるのが」

「嫌だけど、親はそれを望んでるし」

真面目ねえ、と彼女は言つて、その言葉は変に私の胸をざわつかせた。

「メルは嫌ではないの？親の決めた結婚でしょ？」

「あなた程じゃないわ。つまんないなって思うこともあるけれど、私はよつぼどの人間じゃない限り順応できると思つてるし。後から愛情が付いて来る結婚だなんて腐る程あるわ」

ふうん、と私は彼女を羨望の眼差しで見つめた。そこまで割り切れる大人な彼女が、心の底から不思議だつた。

「でもあなたは一筋縄じゃない性格なわけだから、それでは納得できなさそうね」

「できてないから未だにこの用紙提出してないのよ」

「そういうところも変に真面目だわ。適当に書いて誤魔化せばいいじゃない。後から変えたって、誰も責めやしないわよ」

「でも、これを基に来年の学級分けがあるのでしき？」

「だから大学つて書けばいいのよ、とりあえず」

「そうしたら確実に三者面談が待つていいじゃない」

「あーもう、るりさいわねえ。何ぐじぐじ言つてんのよ、気持ち悪い。それはその時考えればいい。親が駄目つて言つたら、大学は諦

めて、良いつて言つたら行けばいい。それだけ。ほら単純

「そんなことしたら、絶対行かせてくれるに決まってる」

「なり良かつたじやない」

「そうしたらまた迷惑かけるわ」

彼女は片手で額を押さえた。

「何が迷惑で、何が迷惑じやないかの判断くらう、親に任せあげなさい」

諭すように言つ彼女の横顔が、窓に向ひうの薄明かりに照らされ綺麗だったことを覚えていた。

結局私は、自分に都合の良いつて葉に甘えて、用紙に「進学」と書いて提出してしまった。

彼女のせいにするわけではないけれど、私は今でもそれを後悔している。

17・独りぼっち

食事会の翌日、私はしつかり寝坊し、しつかりミルキアさんに怒られた。

昨夜の事情を知っているにも関わらず、何の手加減もない。とはいって、徐々にではあるがミルキアさんが通常営業になつてきただのは喜ぶべきことである。

説教を耐え抜いた後、私は使用人食堂へ向かう。

今朝は健気に朝食をとらずに出勤して來たので、その分昼食で栄養補給せねば。

ミルキアさんのせいで昼休みは既に十分程削られている。加えて今日はアリシアと話がしたかったので、自然と足取りは速くなつていつた。

使用人食堂は、「使用人の館」とも呼ばれる西館の一階にある。中は侍女、騎士、近衛兵、文官などの制服オンパレードであつた。400名程いる城勤めの人間の大半がここで一斉に食事を取るため、何の見当もつかないままアリシアを探すのは困難だつただろう。しかし幸いにもアリシアはいつもほぼ同じところで食事をとつている。

私の予想通り、アリシアは奥まつた窓際の長テーブルの端にぽつんと腰かけていた。

さらに幸いなことに、いつも一緒にいる友人の侍女も、今日は見当たらない。

私は早速彼女に声をかけた。

「アリシア」

そう呼びかけると、彼女は一瞬、びくりと肩を震わせたが、手を振る私を見ると安心したように眉尻を下げた。

そういえば、虚めの話、ミルキアさんに報告したほうが良いだろ？ か。本館侍女長なのだから知つていそうなものではあるが。

「そこ、座つていいかしら？」

私がアリシアの向かいの席を指さすと、彼女は微笑んで頷いた。

「ええ、よろしくってよ」

「じゃあ私ご飯取つてくれるから、その席空けといつてください？」

「わかったわ」

アリシアが向かいの席に自分のカップを置くのを見届けてから、私は背を向けた。

使用者食堂はバイキング形式なので、食べたいものを食べ放題である。食事の時間はこの城での数少ない私の娯楽だった。

さて今日は何があるのかしら、と考えていると、右奥から良からぬ視線を感じた。

見やると数人の侍女が固まつて食事をとっているのだが、皆がこちらを面白くなさそうに眺めている。

私と目が合つと顔を見合わせてくすくす笑い出す始末だ。

非常に面倒そうな雰囲気であるが、害をなされたわけではないので、一先ず放つておくことにする。

恐らくあれがアリシアを虚めている輩だろう、との予測はついた。

私の貴重な昼飯を不味くすることは何としても避けたいので、私は努めて彼等の存在を視界から追い出した。

* * * * *

本日私が自分用に取り分けたのは、ビーフシチューに枝豆のパン、海藻のサラダ、ヨルダと呼ばれる渦巻き状のケーキ、そして牛乳である。

朝食をとつていなことによる栄養不足を補充するため、いつもより分量は多めにする。ヨルダも一個食べちゃえ。

食欲減退は今後の仕事に支障が出る。可能な限り目的地のみを意識して席に戻った。

良からぬ視線を送つてくる彼女らは、このときに限り汚物と同じ扱いであるが同情はしない。

私が席に着くと、向かいのアリシアは早速頭を下げてきた。

「オルカ、昨夜は本当にありがとうございました。この礼はいつか必ずするわ」「はいはい、どういたしまして。お礼は食べられるものがいいわ

口をもぐもぐせながら適当に答えると、アリシアはうふふと笑つた。

「オルカつたら昔から食べるもにしか興味がなかつたものねえ」「心外な

「わたくしがどんなにワーディロッジの梅という花が素晴らしいか話しても、全然聞いていなかつたじゃない」

「花に興味がなかつただけよ」

「あら、じゃあ何か他に趣味でもあるの？食べ物関係以外で」

「まあ、ね」

何だか明らかに言葉を濁すよつた言い方になつてしまつたので、私はさつさと話題を変えることにした。

「そんなことよつアリシア、聞きたいことがあるのだけれど」「何かしら」

私は音量を少し下げるで言つた。

「立ち入り禁止区域つて、何で立ち入り禁止なの？」

アリシアはきょとんとした。

「え？何故今更それを尋ねるの？まさかあそこまで足を踏み入れておきながら何も聞いてないの？」

「特に説明されなかつたし……。私も敢えて聞かなかつたのよ。知つてはいけないような気がして。私に害が及ぶのは嫌だわ」

「でも今は知る気なのね」

「あー、ええ、まあ。何か手遅れらしいし」

ふうん？と呴いてアリシアは一度紅茶を口に含んだ。

「あそこは研究施設らしいわよ

「へ？」

私は拍子抜けした。

あまりに当初の予想通りではないか。

「それはつまり、國家機密の研究とかしきやつてる怪しいことじつてこと?」

「みたいね。わたくしも何を研究しているのかまでは知らないけれど」

「じゃあシゼル様も研究者のかしら」

「ええ。侍女長がそう言つていたわ」

私は腕を組んで考える。

予想通りなのは結構だが、本当に研究施設だとすると、かなり不穏な将来を想像してしまつ。

私は本気で謝るミルキアさんと、責任取れとか言つてたシゼル様の発言を想像に繋げて考察してみた。

例えば、見てしまつたからには生かしておけぬ、あなたに実験台になつてもらおう。とか。

やばい。あのシゼル様の不気味さから言えば、このシチュエーションかなりしつくりくる。

「オルカ? 大丈夫? あなた顔色悪いわよ」

アリシアが心配げにこちらを窺つてきた。

知らぬ間に脂汗まで浮いてきていたようで、私はハンカチを取り出して額を拭つた。

実はシゼル様は、「ちょっと危うい雰囲気な人」どころか「超絶危険人物」だつたのかもしれない。

「それで、他には何がわかつてゐるの? あの場所について」「わたくしが知つてゐるのはそれだけよ

「それだけ?」

私は我が耳を疑つた。

「ええ、それだけ」

「これでは私の持つている情報と大差ないではないか。つまり大して私と状況が変わらない。なのに何故私と彼女とではこんなに危機感が違うのだろう。」

「気にならないの？」

「だつて国家機密よ。これ以上知つても良いことないでしょ」「に」「それはそうだけれど。何かこう、不穏な雰囲気を感じない？あと、ミルキアさんとかから意味ありげなこと言われたりしてない？」

「侍女長から？……ああそういえば、今朝物凄く叱られたわ。『たかが個人的な逢引のために重要な仕事を他人に引き渡すとは何事ですか！』って。どうして彼との『デート』のことまで言つてしまつのよ。体調不良とか他に言い方はあるでしょ？」「ああそう」

「口を尖らせるアリシアに、私は気の抜けた返事を返した。
どうやらアリシアと私の立場は、何か決定的に違つりし！」

「あなたが侍女として働き出したのは、かなり最近よね？」

「ええ、そうよ。一ヶ月とちょっと前くらい」

「あの食事会の仕事を割り当てられたのはいつ？」

「仕事を始めてから一週間程経つた頃かしら。だからわたくしも食事会の仕事はまだ一度しかやってないのよね」

それって変じゃないかしら。

と、言おうとして、私は口を噤んだ。もし彼女がその異常性に気が付いていないのなら、或いは気付いていない振りをしているのなら、

「これは言わないほうが良いのでは？」との考えが過ぎたからだ。
しかし、これは明らかに妙である。

普通は間接的にはあれ、国家機密に関わる仕事に雇つたばかりの侍女を使うことなどしない。

私がむづと唸つていると、アリシアが「あら大変」と席を立つた。

「もうこんな時間だわ。仕事に戻らないと」

振り返つて壁の時計を見ると、確かにあと少しで昼休みの時間が残りようとしている。

気がつけばいつの間にか人の数もまばらになっていた。

「本当。」めんなさいね、つまらない話に時間を割かせてしまつて「つうん、いいの。わたくしも一度一人だつたし」

心なしか、そう言って微笑んだ彼女の顔が泣いているように見えた。

仕事に戻る廊下の途中で、私はふと思つた。

アリシアがいつも一緒にいる友人は、どこに行つたのだろうか。

アリシアと昼食をとった日から数えて四日目の午後。私は結構本格的に悩んでいた。

アリシアの虚めの件であるが、どうやらかなり悪質であるらしいことがわかったのだ。

私がアリシアと昼食をとったときからずっと気にかけていたのだが、やはり彼女の近辺にあのいつも仲の良かつた友人がいない。放つておくのも後味が悪いので、それからは私がいつもアリシアとじご飯を食べていた。

すると複数の同僚から忠告を『えられた』。「彼女と一緒にいると虚めの標的にされる」、と。聞くところによると、あの仲の良かつた友人もついには嫌がらせに耐えきれず、アリシアと距離を置くようになってしまったのだと。

忠告には感謝しつつも、やはりアリシアを放置して食べる『ご飯は不味いだろう。折角数少ない娯楽なのであるから、栄養補給くらい気持ち良く行いたいものである。

そんなわけで相も変わらずアリシアの向かいに席を取つていたら、同僚達はついには私にまで距離を置くようになった。

うーん学生時代を思い出す。それでもつてやつぱり少しは傷ついたりもある。

私があまり口を出す問題ではないが、アリシア自身はビックリしているのだろう。そう考えて、躊躇いを振り切つて昨日の夕食のとき聞いてみた。

「アリシア、前あなたに嫉妬している人から嫌がらせをされてるって言つてたじやない？具体的に何をされてるわけ？」

彼女の体はたちまち強張り、顔がどんどん白くなる。

「「」「ごめんなさい。もしかしてあなたも何かされたの？」

渴いた声でそう言わると、こんな私でも同情せざるにはいられなくなつた。

「いえ、そういうわけではないの。謝る必要もないわ。ただ、周りの様子を見ていると結構深刻なのがなつて思つて」

努めて何でもないように聞いてみた。

アリシアは「そう」と言つて俯く。

やがて声を潜めて話し出した。

「実はね、本当に結構深刻なの。最初は何かと理由をつけて仕事を押し付けられたのね。でもあんまりにも頻繁なものだから、おかしいと思つて断るようになつたの。そうしたら今度は、わたくしが掃除したばかりのところでわざとバケツをひっくり返すようになつたわ。あと、気が付くとわたくしが使つていた掃除用具が消えていたり。探しても見つからなくて怒られて。後からとんでもないところから出てきたりするのよね。最近一番酷かつたのは、わたくしの部屋が勝手に荒らされていたこと。お金を取られたとかではなかつたのだけれど、彼にもらつたネックレスが壊されていたわ。鍵は壊れてなかつたから、多分西館のハウスキーパーが協力しているのだと思つ

意外にもアリシアは、口を開けばすらすらと虚めの実態を吐き出した。

そしてその瞳は決して弱々しいものではなかつた。アリシアはまだ自尊心を捨ててはいない。

それがわかつただけでも一安心だ。

しかしこれはかなり大胆な嫌がらせだ。

ここまでしたら犯人なんて容易にわかりそうなものである。

何故未だに問題が解決していないのか、私は不思議に思った。

「ミルキアさんに言つた？」

「ええ……。でも、『そういうのは本人達の間で話し合つべき問題であつて、自分が関与することではない』って言われてしまつたの」「へえ？」

ミルキアさんにしてはらしくない発言だと思つた。

本人にも、また仕事にも実害が及んでいるのだ。合理的に考える彼女であれば、一刻も早く解決のために動きそうなものだが。

「あなたの恋人は知つてゐるの？このこと」

アリシアは首を横に振つた。

「少なくともわたくしは知られてないわ。噂になつていないのでおかしいから、もしかしたら知つてゐるかも知れないけれど。でも言つつもりはないの。彼、本当に忙しい生活を送つてゐるから、煩わせたくないのよ」

「好きな人のことだつたら、どんなに面倒なことだったとしても守つてあげたいと思つんじやないの？」

そもそも恋をするといつて行為自体面倒なことなのだから。

「いいの。わたくしは彼を支えてあげたいって思っているのよ。だから、自分のことくらい自分で何とかできるようにならなくちゃ。こんな嫌がらせしても何の意味もないってわかれば、彼女達も諦めると思うの。だから、わたくしはそれまで耐えるのみよ」

そう言った彼女の顔は決意に満ちていた。

彼女の意見に納得したわけではなかつたけれど、私もそれ以上は何も言わなかつた。

結局のところアリシアが決めるべきことなのだから、それはそれでいいとして。さて私はどうしようかことになつてくる。

物事が解決しない以上、アリシアと一緒にいても良いことはない。事実、現在私にとつての友達もアリシア一人になつてしまつたのだから。そして過去起きたことを考えれば当然、虐めの手はいはずれ私にも伸びてくるであろう。しかし美味しい食事と平安な良心のため、アリシアから離れるという選択肢は選べない。

まあ今のところ私自身に実害があるわけではないから、このまま様子を見るしかないか。

考へても仕方のないこととはこれ以上考へるべきではない。どんな深みにはまつてしまつ。代わりに楽しいことを考へよう。

私は、今朝アリシアに食事会のお礼としてもうつた菓子の味を想像しつつ、本館の裏口を箒で掃いた。

すぐ傍に植えられた銀杏の葉は、段々明るい色へと変わり始めている。

外は虫の音、中は箒が擦れる乾いた音がそれぞれの静寂を埋めて

いた。

いやもひひとつ。足音が近付いて来た。

振り返ると、回廊をミルキアさんがこひらに向かって歩いてくる。

「オルカ。シゼル様から伝言なのですけれど」「は?」

「ここ最近すっかり忘れていた名前が挙がつたので、一瞬シゼルとやらが誰なのかがわからなかつた。

「シゼル様から伝言です。『は』とは何ですか、『は』とは」「あ、いや、申し訳ございません。この頃普段の日常が続いていたもので、ちよつと誰のことだか思い出せませんでした」

ミルキアさんが呆れたよつてに臉を下げた。

「あなたつて結構薄情ですよね」「ええまあそれは自覚します」「……それで伝言なのですが。『十七時頃北東庭園に来い』とのことです」

何だか推理小説で取引現場に誘つときのよつない台詞だ。

「北東庭園つていうと、あの立ち入り禁止区域内の、ですか」「そうです」「一体何の用なのでしょう」「それは聞いておりません。兎に角伝言は伝えましたからね」「行つてよろしいのですか?『立ち入り禁止』なのでしょう?」

ミルキアさんは溜め息を吐いた。

「あなたは立派な関係者になつてしまつましたから。わたくしももう面倒見きれませんわ」

「どうやら私はついにミルキアさんにも見放されてしまつたらしい。その意味はわからないが、不思議と心細い。

「かしこまりました」と言って再び掃除を再開したが、ミルキアさんはその場を去りうとしなかつた。

「……どうかなさいました？」

「いえ。浮かない顔をしていろと思つて。道理で今日は失敗がなかつたわけですね」

おかしいだら、そのバロメーター。と、突っ込むのは心中だけにしておく。

しかし折角ミルキアさんがこつして「氣を遣つてくれたわけだし、私は心に引っかかっていたものを聞いてみる」とした。

「ミルキアさんはじつして、アリシアを助けてあげないのですか？」

そんな話が出るのを予想していなかつたのか、ミルキアさんの表情が固まつた。これは驚いていのときの彼女の反応である。

「あなたも他人のことを心配したりするのですね」

「……私、多分ミルキアさんが思つてる程考えなしではありませんよ」

「それは意外な発見でした」

ミルキアさんはそう言ってほんの少し肩を竦めた。

「アリシアのことでしたね。わたくしは、ああいつた虚め関連のことについては、本人達より前に部外者が手を出すべきではないと考えております」

「まあそれも正論といえば正論ですけれど。でも、あの様子だと彼女、意地でも自分から動く気なさそうですよ」

「それは彼女が選んだことですから、彼女が責任を取るべきことです」

私はんー、と天井からぶら下がる灯りを見つめつつ、どう言ったものか考えた。

「あの、失礼を承知で申し上げますけれども。その態度つて上司としてどうなのでしょうか。現にこの嫌がらせはアリシアだけではなく彼女の仕事にも実害を『えております。』のままで、ミルキアさんも侍女長として、監督不行き届きの責任を取らされるのではないでしょうか」

するとミルキアさんは一瞬閉口した。

そうして目を伏せるものだから、私が逆にたじろいでしまう。

「……それがわかっているのなら、もうわたくしからは何も言ひ言葉がありません」

私はすぐさま饒舌な反論が返ってくることを予測していたので、大層驚いてしまった。

こんなことを言つたのも、ミルキアさんを責めるためではなく、彼女の真意が知りたかっただけなのに。それが理解できたのなら、

「これから私の対応の仕方のヒントになるかと思つていたのだ。

「わたくし多分あなたが思つておられる程でできた人間ではありません。女の確執は醜いものですね。関わりたくない、というのが本音です」

そのときのミルキアさんの目を見つめて、私は初めて、ああこの人も女性だったんだな、と思つた。

にも関わらず、私は次のミルキアさんの話に度肝を抜かれた。

「わたくしも昔同じような経験をしたことがありますの」「同じような経験？」

「ある異性、まあ今の夫ですけれど、彼との関係を妬まれて嫌がらせを受けたことがあるのですわ」

え？

「え？」

頭の中で浮かんだ疑問符が、意識せずとも口からそのまま出ていた。

「ミルキアさん、結婚してたのですか？」
「あらオルカ。わたくしが既婚者だというのがそんなに妙ですか？」
「い、いえ、別に妙というわけではないのですが」
「いえいえ、妙だったんでしきうね。あらあらまあまあそんなに馬鹿みたいに呆けた顔をしていらして」
「いえいえいえ！」

私は関節が軋む程に首を激しく横に振つた。

しかし確かに、ミルキアさんは西館に自室を持つていないのでから、家庭を持っていたという事実はそれ程おかしいことではない。

一体どんな男と結婚したのか、ひつじょおに気になるが、今はそういうこう話の流れではないので自粛しておく。

「そ、それで、ミルキアさんもアリシアと同じような経験をしたとの話でしたが？」

「ええ、そうです。まあわたくしの夫はアリシアの恋人みたいなモテ男ではありませんでしたから、私に嫉妬してきた相手もたつたの一人でしたけれどもね。だから規模は狭かつたけれど、執念が凄まじいものでしたよ。五階から水をかけられたり四階から卵を落とされたり三階からバナナを投げつけられたり」

何階から何が落ちてきたのか正確に記憶しているあたり、ミルキアさんの執念も相当のものだと思つ。

「誰がやつたかなんてすぐに見当がつきました。それでわたくしは当時の上司に相談したのです。侍女長は事態を正すためにすぐに動いてくれましたわ。彼女を注意し矯正するために。でも、一見とも稚拙な嫌がらせだけれども、その実証拠を残さないことにに関しては、彼女は本当に徹底的だつたのです。どんなに結果が正しかつたとしても、証拠がなければわたくしの主張なんて机上の空論です」

「それで、どうしたのですか？」

「彼に訴えて話し合つてもらいました。結局何故わたくしが憎まれるのかと言いますと、彼女はわたくしが彼を奪つたと思っているからなのです。であれば、わたくしが彼を奪つたのではなく、彼がわたくしを選んだのであると相手に納得させれば良いわけです。そうすれば諦めがつくと思つたわけですわ。そのためには、彼女自身が当たつて碎ける必要があります。それで、彼女から想いを告白させるためのシチュエーション作り、相手を必要以上に傷つけず尚且つ

わたくし自身の株を上げるような断り方を含む、黒幕の存在を微塵も感じさせない徹底的なシナリオを彼の頭に叩き込み、実行させました

した

私は呆気に取られて何も言えなかつた。

ミルキアさん……何て恐ろしい人。

そしてミルキアさんの田那さん……頑張つたな。

「計画は上手くいきましたわ。あとあと考えてみれば彼女がそんな展開で、わたくしと彼との間柄を認められるまともな人間だという保証はどこにもなかつたわけですが、幸いにも彼女はますますまともな人間だったといふことです」

「成る程」

「別にアリシアにわたくしの方法を押し付けたいわけではありませんがね。一番良いのは相手の憎しみを根本からなくすことだと思います。そうなるとやはり、部外者は口を慎むべきだと思いますのね。勿論これはわたくしの主觀ですけれども」

私は素直に感心した。

「やっぱりミルキアさんって合理的ですね」

「いえ、そんなことはありませんわ。色々と言い訳がましく喋りましたけれども、わたくしが口を挟まない一番の理由は、やっぱり女の確執が怖いからですもの」

しかしそうなると、結局今の私ができる最善策は黙つて事態の成り行きを見ることのようだ。

あのアリシアの決意では、彼に打ち明けることを説得するのは無理そだし。

ふいに、回廊の奥からミルキアさんの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「行きますわね。十七時に北東庭園。くれぐれもお忘れにならないよ」

私の返事を待つて、ミルキアさんは身を翻した。

十七時十五分前、私はミルキアさんの了承のもと仕事を抜け、北東庭園に向かつた。

立ち入り禁止区域を守る騎士は、今日はあのだるそうな男ではなかつた。しかし私のことを聞いているのか、侵入を咎められるようなこともなかつた。

一番田の門を通過すると、色とりどりの秋桜の向こうにシゼル様が見えた。

彼のほうは既に私に気付いているらしく、顔をこちらに向けて佇んでいる。

私はそちらに向かいながら声をかけた。

「オルカ・コーディスです。参上いたしました」

「ああ」

シゼル様は小さく頷いた。

しばらくして私は彼の隣に立つたが、彼はそれ以上何も言おうとしない。

ただ、息を潜めるようにして私に注意を集中していふようだつた。

「どのよつな」用件ですか？」

沈黙に耐えきれず、私から先に切り出すこととなつた。

この雰囲気は、じつと見つめられるのと同じくらい何だか照れ臭いものがある。

「浮かない声をしている」

その言葉を聞いて、やはりこの人、化け物じみたところがあるな
あと思つた。

「まあ、ちょっと浮かない出来事が私の周りで起きてこるのは事実
ですね」

「どういったことだ？」

「呼び出しへおいで世間話ですか」

「ああ」

その話題を回避するために言つた言葉だったが、あっせつ肯定されてしまった。

「……暇人ですね、シゼル様」

「ああ」

「でなくて、本当に何の御用だったのですか？」

「翻訳を頼もうと思つてな。だが愉快そうな話を持つてきただのであ
ればそちらに興味がある」

「」の男、私の落ち込んだ出来事を『愉快』と片付けやがつた。

「全然愉快な話じゃないので」

「そうか？あなたが隠そつとする辺り、聞くだけの価値がありそつ
に思える」

「悪趣味です」

「それで？どんな話だ？」

どうにも「」にも逃がしてくれる気はないらしい。

私は仕方なく話しかけ始めた。

「アリシア・ベアティードット」存知でしょ？

「いや」

「ご存知のはずです。恐らく先月の王家との食事会で給仕をしていたはずですから」

「ああ」と言つてシゼル様は僅かに目を細めた。

「貴族の娘だとかい？」

「そうです。彼女には実は恋人がいまして」

「それなら知つていい。イヴアンだろ？？」

「え？……あ、すみません、名前までは知りませんでした。シゼル様はその方とお知り合いなのですか？」

「ああ。仕事上連絡はよく取つてている」

その言葉に、私は少なからず驚いた。

「シゼル様、真面目に仕事してらしたのですね

「していないと思つたか」

「真面目に仕事をしている人は、この時間悠々とまつつき歩いたりはしないと思つていたので」

「まあ、あなたの認識は間違つてはいない」

彼は自嘲氣味に笑つた。

そういえばこの人危ない研究者な可能性があるんだつけ。

そうは言つても、一度解いてしまつた警戒心をもう一度立て直すというのは、なかなか難しいものがある。

「その恋人がとんでもないモテ男なのだそうですよ」

「ふうん」

「あれ、知り合ってるんじゃなかつたんですか？」

もしかしてさつきの発言妄想ですか。

「連絡を取つてゐる、といつのは書類でのことだ。実物を見たこと
はない」

「成る程」と私は納得した。

「それで、そのモテ男がアリシアとくつついてしまつたわけなので、
嫉妬に狂つた女達がアリシアを虐め出したわけですね。ハブに
したり、自分達の仕事を押し付けたり、部屋を荒らしたり」

「ふむ」と言つて、シゼル様は手近なところにあつた秋桜の群生
に手を伸ばす。それを手探りで一本選び取り、手折つた。

「昔のミルキアのような話だ」

私は畠を見張つた。

「知つてゐるのですか」

「ああ。随分と痛快な話だつたからよく覚えている。五階から水、
四階から卵、三階からバナナ、一階から下着、だつたか」

「下着！？何それ、初めて聞きましたよ」

ミルキアさんめ、そこだけわざと伏せやがつたな。

「ねえねえ、それ誰の下着ですか？ミルキアさんの？落とした本人

の？」

「知らん。阿保か」

心底軽蔑した顔をされた。

「こいつのシゼル様の顔は結構怖い。」

「それで？ あなたはその友人を想つて沈んでいるのか」

「あーいや、私そこまで善人でもないので。ただ、ハブられてる彼女を放置して食べるご飯は不味いので、ここ最近よく一緒にいたんですね。そしたら見事私もハブられてしまいまして」

自分で言つていちよつと悲しくなつてしまつた。

人が苦手だろうと、どんなに強がりを言おつと、こいつのこつて普通に寂しくなる。

「ほお。愉快ではないが、興味深い話ではあるな」

「……どちらにせよ面白がつてることに変わりはありませんよね」

「まあそうとも言つ。私が興味深いと思つたのは、あなたが人並みの感情を持つていることがわかつたからだ」

「はあ？」

「あなたが沈んだ声を出す理由が、そんなありふれた原因だつた。これはとても興味深い」

「それってつまり、私人間と思われていなかつたつてことですか？」

「そこまでは言わないが、異常性は高いと踏んでいる

「果てしなくこつちの台詞なんんですけどー。」

皆まで言つてしまつてから、はつと口を噤んだ。

しまつた、勢いに任せてついぶつちやけてしまつた。

恐る恐るシゼル様を窺い見ると、彼ははつきりそれとわかる程に、
清々しい笑みを湛えていた。

そつとして手に持つた真白い秋桜の茎を撫でる。

「私は異常だと思うか？」

「あ、いや、えっと……。すみません、大変失礼なことを申し上げました」

「別に謝る必要も取り繕つ必要もない。私は異常だと思つか？」

「えー、まあ、はい。異常だと思います」

「私もそう思う。……」

彼の口の動きを見る限り、その後も何か言おうとしたらしいのだが、最終的にはそれで終わってしまった。

一先ずこの話題が終了したようなので、私はひつじょおに気になつていたことを聞いてみることにした。

ミルキアさんの虜め歴を知つているとこによれば、シゼル様とミルキアさんの間に交流がある可能性が高い。であればこの情報も聞き出すことができるかもしれない。

「シゼル様、ミルキアさんの旦那さん知つてます？」

「ああ」

「どんな人ですか？」

「どんな？」

「ミルキアさんってどんな人選んだのかなつて思つて。彼女が既婚者だつてこと、つこわつと知つたのですよ。イケメンですか？」

「イケメン……」

シゼル様は難しそうな顔をした。

「あ、ごめんなさい。外見だとわからないですよね、じゃあ性格で」

「いや。見たことはある。随分昔の記憶ではあるが、器量はそこそこ良いのではなかろうか」

「性格のほうは？」

「悪くはないが良くもない」

何だか微妙だな、それ。

「気になるなら紹介して差し上げよう」

「え？ もしかして城勤めですか？」

「そうだ。左遷に左遷を重ねて随分奥まつたといふにいるがな。だが今日はもう遅いので帰れ」

「わかりました。約束ですよ」

シゼル様は鷹揚に頷いた。

私は「では失礼します」と告げて、歩き出す。
門のところでもう一度振り返ると、彼の透明な視線が私のそれと
かち合つた気がした。

「絶対絶対約束ですからねー」

帰路につく私の足取りは、行きのときよりほんの少しだけ弾んで
いた。

やられた。

扉に鍵を差し込んで回したとき、私はそう確信した。

夕食をとった後だったので、一先ず自室で少し休んでからシャワーに行こう。

そう思つて部屋に戻つて来た。

しかし鍵を開けたと思ったのに、ドアが開かなかつたのだ。つまり、当初鍵はかかつていなかつたということである。

私はすぐさまアリシア虐め隊の犯行を予想した。アリシアのときと同じく、西館ハウスキー・バーの協力の元私の部屋を荒らし、鍵をかけ忘れて帰つたのではないかと。

再び鍵を回し、今度こそ扉をそろそろと開ける。頼む、勘弁してくれ、と念じつつ。

その願いが通じたのか、さつと見たかんじ私の部屋に異常はなかつた。

しかし安堵したのも束の間。

私の視界の中に、とても不吉なものを捉えた気がする。

恐る恐る照準をベッド脇の小さな丸机に合わせる。その上にあるのは、今朝アリシアからお礼としていただいたズイーガル亭の菓子折りである。

それはいいとして、ねえ、開いてない？あの箱開いてない？嘘でしょ？私一個も食べてないんですけど。

半ば体を引きずるようにして机に近付き、そつと箱の中身を確認してみる。

空でした。

その夜西館303号室から上がつた断末魔の如き叫びは、ツェーヴラーグ城全体を震撼させた。

私の叫びを聞きつけて数人が部屋を窺いに来たが、叫びの主が私であることを確認すると、すぐに引っ込んだようである。

背後では「くすくす」と嗤う声が遠ざかっていったので、彼等の中に犯人と思しき人物がいたものと思われる。

今すぐにでも襟元を掴み上げて問い合わせたい欲求を何とか押し込め、私は開け放したままの部屋にへたり込んでいた。

人の一番大切にしているものを的確に狙い、相手の感情を打ちのめす。何て悪質。酷い。鬼。悪魔。

しかしここで怒りを爆発させても無駄であろうし、私にかかる不利益のほうが圧倒的に多いだらうことは想像がつく。ミルキアさんのときと同じく敵は用意周到な可能性がある。仮に向こうに犯行を認めさせることができたとしても、そこで嫌がらせが止まる保証はどこにもない。

何より決着がどちらにつくかに関わらず、ここで不用意に動けばユーティス家の名にさら泥を塗りたくる結果になりかねない。

落ち着け私。落ち着くのだ。深く息を吸つてー。はい吐いてー。吸つてー。吐いてー。

何とか気を沈めた私は、どうすべきかを考えた。

アリシアに問題解決のために動く意思はない。私はアリシアを放棄する気はない。部外者は首を突つ込むべきではない。実害がなかつたので静観することにした。

というのが今までの考え方である。

しかし早速私にも実害が出てきた。つまり、私は部外者ではなく、被害者に昇格したのである。もしくは降格。であるならば、多少なりとも首を突つ込む余地はある。

私はむんと天井を睨んで立ち上がると、自室を後にした。

油断すれば易々と浮き出る憤りの感情を何度も何度も押し込めつつ、私は立ち入り禁止区域に向かう。

門が見える位置まで来ると、一度ミルキアさんがハイネの烟から出てくるところであった。

そういうえば、最初私を探しに来たときも彼女は堂々と侵入していつたが、ミルキアさんは立派な関係者なのであろうか。シゼル様とも交流があるようだし。

彼女曰く『手遅れ』な私であるので、特に拳動不審になる必要もないだろうと思い、私も堂々と歩を進めた。

ミルキアさんは門を出たところで私に気付き、「あ」と言つて小走りで寄つて來た。

「一度あなたのところに行つて思つていたのです
「私に？」

こんな時間に何の用だらう。

そもそもミルキアさんがまだ自宅に帰つていないとこつのも不思

議である。

「あなたの安否確認をしに」

「ええ？この通り元気ですけど、私

「そのようですね。安心しましたわ。シゼル様があなたの悲鳴が聞
こえただなんて言うものだから、心配になつて」

「そ、そんなところまで響いてましたか、私の叫びは」

「わたくしや他の使用人達は誰も気付きませんでしたわ。シゼル様
の聴覚がすば抜けて優れているのです。今日のアリシアの虐めに關
する話も気になつて、様子を見に行こうかと」

私はふつと自嘲の笑みを浮かべた。

「流石ミルキアさん。私が悲鳴を上げた原因は、まさしくあなたの
仰る通りでしたよ」

ミルキアさんの顔が僅かに強張る。

「何をされたのですか」

私は遠くを見やつて言った。

「ズイーガル亭のお菓子を全部食べられました」

「は？」

「ご存知ありませんか？ズイーガル亭。高級菓子折の殿堂ですよ、
あそこは」

「いえ、それは存じておりますけれど」

「楽しみにしてたのに……。私の大好きな桜のマカロンも入つてた
のに……。全部……全部食いやがりましたよあの野郎………」

はつ、いかんいかんと私は深呼吸を何度も繰り返す。少し気を抜くとめらめらと怒りが湧き出てくるから、制御するのに大変だ。この感情をエネルギーに変換できたら、結構な有効利用ができるものである。

ふと気付くとミルキアさんの頬に汗が流れていた。暑いのだろうか。彼女は場の空気を変えるようにこほん、と咳払いをひとつしてから言つ。

「それ以外の被害は今のところ特にないのですね？」
「ないですけど、私にとつてはこの被害で全て喪失したような気分ですよ。ああ……私のお菓子……。子を失った親の気持ちが手に取るようになります」
「ところであなたは何故こんなところに？」

人が我が子を失う気持ちを経験しているところ、ミルキアさんは全スルーである。

冷たいものだ。

「シゼル様にお会いしに行こうと思いまして。頼みたいことがあるのです」
「シゼル様に？」
「はい。駄目だったでしょうか」

今まで仕事だったり向こうに呼ばれたりとそれなりの理由があつたが、今回彼に会いに行くのは完全に自主的で独断的な行動である。

阻まれることは一応想定していたが、そうなつたらまた別の手を考えなくては。

しかしミルキアさんは首を横に振った。

「いいえ。そんなことはありません。あなたはもう立派に関係者ですから」

「ならば良かつたです」

「つかぬことをお聞きしますが、何がどうなつていつの間にそんなに仲良くなられましたの？」

「え。仲良くないですよ。まだ数えるくらいしか会ったことないですし」

「でも、シゼル様があなたを呼んだり、あなたがシゼル様に会いに行こうとしたりされているわけでしょう」

「シゼル様が私を呼んだのは暇潰しです、私が会いに行くのもそれなりの用があつてのことですから」

「シゼル様が暇潰しのために誰かをわざわざ呼び出したりすることなんて、私の知る限りありませんでしたわ。王家の方以外の城の人間が、シゼル様に用があつて自主的に会いに行くことも」

ミルキアさんは平然とした顔でシゼル様寂しい人間説を唱えた。
何て切ない。

「まあそれが事実ならば、私達はそれなりに親しい間柄なのかもしれませんね。でもあくまで比較的に、ですけれど。特別なことなんて何もありませんでしたよ」

「そうですか。それならば、この話はあなたにしても無駄でしょうね」

何だか含みのある言い方だったが、ミルキアさんの嫌味やら皮肉やらは日常茶飯事である。いちいち気にしていても仕方がない。

「それでは、私はこれにて失礼いたします。お気遣いありがとうございます」

話に一区切りついたので、私は頭を下げて門をくぐった。
あまり遅くに押し掛けるのも迷惑だろうから、用事は早急に済ませねば。

月と星の明かりだけを頼りにハイネの煙を突き進んでいくと、後ろからもうひとつ足音が聞こえてきた。

私はぎょっとして振り返る。

一、二歩離れた後ろにミルキアさんが付いて来ていた。
暗くてわかりづらいが、薄明かりに反射する金髪を見る限り間違いないだろう。

「ミルキアさん？まだ何か用ですか？」

私がそう言つと、彼女は少し憮然としたようだった。

「わたくしが先程どこから姿を現したかお覚えてないのですか？」た
だ北東の館に戻るだけです」

「まだ仕事があるのですか」

「いいえ。ありませんわ。住居が北東の館にあるだけです」

私は瞠目した。

そして同時に閃く。

「ミルキアさんの旦那さんて、もしかしてシゼル様ですか？」

「違います」

凄まじい速度で即答された。

違うのか。

肩透かしを食いながら、少しだけ安心している自分に気付いた。あれ、私ってそんなにシゼル様のこと気に入つてたんだ。

「違うのですか。まあ確かにシゼル様は性格良いか悪いかでいったら悪いですね」

「何の話ですか」

「今日シゼル様に、ミルキアさんの旦那さんがどんな人か聞いたのです。器量はそこそこで、性格は良くも悪くもないそうです」

「……まあその意見については反論しませんが、わたくしのいないところで何ていう会話をしているのです」

「気になつたもので」

しかし北東の館に居があるといつのは驚きだ。

日に日にミルキアさんの得体の知れなさも、パーセンテージを増していく。

ミルキアさんは溜め息をひとつ吐いて歩き出したので、私もそれに倣う。

晴れた夜空の下、彼女の声がぽつりと響いた。

「後で紹介しますわ」

「本當ですか？……あ。でも、やつぱりいいです」

「何故ですか？」

「シゼル様が今度紹介してくれるつて仰つてましたので」

そう言つと、ミルキアさんは少し笑つたようだつた。

「誰が紹介しようとした私の夫に変更はありませんがね。精々期待しな

「これと/or」

アーティアの声は、少し恥ずかしそうだった。

21・怖がり

今夜北東の館の門には、あのだるさつな騎士が立っていた。田によつて配置が違つのかもしれない。

ミルキアさんが先頭に立ち、館の重厚な水色の扉を押す。中は薄暗かつた。大きなシャンデリアには火が灯つておらず、壁に取り付けられたいくつかの燭台がエントランスホールをぼんやり色づけている。

僅かな生活音が奥からひそやかに聞こえてくるだけで、誰の姿も見当たらなかつた。

「シゼル様は一階の右側の廊下の、突き当たりの部屋です。それはわたくしはこれで」

そう言つて、一人私を置いてミルキアさんは左の廊下に消えようとする。

私は鳥肌を立てて彼女の制服を掴んだ。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと待つてくださいー。」「何でしょつか

ミルキアさんは無関心な田で私を見つめる。

「ひ、一人で行つてはまずいでしょ？」

「そんなことはありませんよ？」

「い、い、國家機密の研究施設なのでしょ？」

「あら、ご存知でしたね。まあここまできて知らないほうがおかしいでしょうけど。でもその点は」心配ありません。國家機密の研究

ですから、あなたなどに易々見つけられるとこではやつてしませんわ」

「いえいえ、その、やつぱり念には念を入れて」

「随分国家想いですね。それはよろしいことですが、わたくし明日も早いんですね。お休みなさい」

それだけ言い置き、ミルキアさんは今度こそ廊下に消えた。

奥でぱたん、と音がしたので、恐らく皿室に帰つたのだろう。

私は改めて辺りを見回す。

だだつ広く、薄暗く、静かな場所で独りぼっち。

……正直に、一人で館を歩くのが怖いって言えば良かつた……。私はがっくりと頃垂れた。

「そんなに怖いのなら、私が案内して差し上げようか

「ひいっ」

ふいに頭上から静かな低音が落ちてきて、私はうつかり悲鳴を漏らした。

全身の毛という毛が全て逆立つたような気がする。

自分が乙女チックなキャラではないことは私自身がよく理解しているが、この性質ばかりは仕方がない。

怖いものは怖いのである。

私は冷静に今の事態を分析することにした。

まずとても怖いシチュエーションである。そしてとても怖い何かがいるらしい。それは怖い。本当に怖い。いつして怖い怖い連発するというのは、怖いという感情がどのようなものかを忘れるための私が編み出した技術である。ほんとう怖くなくなってきたぞ。さっきか

ら歯が噛み合わないのも気のせいだぞ。

「オルカ？」

あれは聞いてはいけない声である。そしてあの存在は見てはいけないものである。耳を貸して見てしまったが最後、食べられてしまうに違いない。

私にできるのは、この館から早急に逃げ出すことだ。

私は声の主を見ないよう俯きつつ、じりじりと扉に向かつて後退した。

「おい」

じりじり。

「何を逃げようとしている。音でわかるぞ！」

じりじりじり。

「二イ、捕獲しろ」

じりじりじりじり……ばふつ。

あと少しで扉に手が届く、というところで、後ろから何かに抱き

つかれた

「はいはーい、落ち着きましょうねー、オルカちゃんーーイお姉

「……生徒会へ寄り、なんとかなつておいた

本日二度目となる、断末魔の叫びだった。

私が落ち着きを取り戻したのは、シゼル様の采配で誰かが巨大シャンデリアに火を灯してくれてからだった。

このそこそこ広い天井にぶら下がる大きなシャンデリアに灯りを点けるのは、非常に面倒なことである。

まずレバーを操作して本体を手の届くところまで下ろし、幾十もの蠅燭を一本一本セットし、その蠅燭に火を灯し、再び本体を上に上げる。

そこまでの動作を全て見届けて、私はようやく自分の状態を確認する余裕を持てた。

現在私はエントランスホールの真ん中にへたり込んでいる。傍らには二イがいて、二階の手摺で頬杖をついているのはシゼル様である。

そして、数人の男女が騒ぎを聞きつけて集まって来ており、皆が皆私を観察している。恐らく自室で休んでいたのだろう、随分ラフな格好をしている人や、寝間着姿の人もいる。その中には呆れ顔のミルキアさんの顔もあった。

私は自分のしでかした失態を思い出し、全身の血を沸騰させた。

「えー。その。……お騒がせして申し訳ありません……」

私の言葉が頼りなさげにホールにこだまする。

しかしそれについては誰も何も言わなかつた。ただただ物珍しそうな視線で、私とシゼル様をしきりに見比べている。

あの喧しい一イさえも、笑みを浮かべつつ事態を静観していた。こいつときは普通、ざわめきが生じるものである。誰も何も言わないといつのは非常に気まずく、そして奇妙であった。

やがてシゼル様が、

「全員部屋にもどれ。一イは応接間に茶を用意しろ」

といふと、それぞれ私を気にしつつ、無言で去つて行つた。

私は心中で彼等に再度謝罪する。

ホールには私とシゼル様の二人きりになつた。

シャンデリアの蠟燭は白い光の出るワーディロッジ産のものを使用しているらしく、廊下の先までかなり見渡せるくらいに明るい。

「何故逃げようとした? 私に用があつたのだろう?」

シゼル様が頭上から問いかけてくる。

「いえ……シゼル様だと氣付いていなくて……。見たら食べられると思い込んでいました……」

「あなたは言動に反して随分と臆病だな。阿保なのは言動通りだが」「うう。すみません……」

全くその通りなので、私は顔を赤くして謝るしかない。

シゼル様の表情は遠由に見ても愉快そうであった。怒つていなければましではある。

「来い。応接間に案内する」

「はい……すみません……」

私は力なく階段を上り始めた。

こんな醜態を複数の人間に晒してしまったというダメージは大きい。
少なくともミルキアさんとシゼル様には益々逆らえなくなりそうだ。

「イガ用意しておいてくれたのだろう、応接間の小さなシャンデリアには既に白い灯りが点いていた。

勧められるままに私は一人掛けのソファに腰掛け、シゼル様は机を挟んだ向かいに腰を下ろす。

薄紅と白の縦縞模様の壁紙には、王家の紋章がうつすらと刻印されている。広さも含めて、何だか可憐らしい部屋だな、と私は思った。

「リリに来る前にも、一度雄叫びを上げていたわ」

優雅に足を組んで座るシゼル様は、私のことを珍獸として楽しんでいるようである。

「雄叫びって……。まあ、今日はそのことでお邪魔したのですが」私がそう切り出すと、シゼル様の顔つきが複雑なものに変わった。驚きと苛立ちを足して二で割ったような表情だ。

「何かされたか。ミルキアも、虐めの件であなたを心配していたが」「ああ、はい。ミルキアさんには大層お気遣いいただいて、私のところまでわざわざ見に来ようとしてくれました。途中でばったり会つたのでその必要もなくなりましたが」「そうか。それで……」

シゼル様が言いかけたところで、応接間の黒檀の扉からノックの音と、続けて場違いに浮かれた女声が響く。

「みんなのアイドル・ニイですよー。お茶をお持ちしましたー」
「入れ」

ジゼル様は諦めているのか気にしないのか、彼女の妙な口ぶりは全て無視である。

「ニイは魔法瓶とカップとソーサーの載つた盆を持って入ってきた。相変わらず制服に派手なオプションを追加した格好で、今日は黄色と黒のボーダータイツを着用している。もしかして館の主人が気付けないからって好き勝手してるんじゃ、と私は訝しがる。」

彼女は手際良く紅茶を注ぎ、ひとつのかップを私の前に置き、もうひとつのかップはジゼル様に直接渡す。

「ありがとうございます。あの、先程はすみませんでした」

私は去りうとしたニイに頭を下げた。

抱きつかれたとき、あまりの恐怖に暴れまくり、勢いで彼女に暴行を加えてしまったのだ。そのせいでニイのお団子の髪型も、現在少し乱れています。

「ニイはこいつこり笑つた。

「気にしないでいいよお。面白いものが見れたから」

そう言い残して出て行く彼女の背中を見送り、私は肩を落とす。珍獸にまで珍獸扱いされた……。

「それで、何かされたのか」

シゼル様の静かな声で現実に引き戻される。私は勢い込んで話し始めた。

「はい！聞いてください、酷いんですよ。私の部屋に大事に取つておいたズイーガル亭のお菓子が消えたのです！」

「ほお」

シゼル様は咳いたきり、沈黙してしまった。やがて驚いたように口を開く。

「何だ？それだけか？」

どうやら続く言葉を待つていたらしい。私は憤慨した。

「それだけってことはないでしょう！あの菓子折りには大好きな桜のマカロンも入っていたのですよ！私はこの経験を通して我が子を失う母の気持ちがわかりました！！」

「菓子と子はあなたにとつて同意義なのだな。将来あなたの子になる人間が可哀そうなものだ」

そこまで言つて、シゼル様は何やら変な顔をした。非常に曖昧な説明であるが、私はこの表情を『変』と表現する以外の術を持たない。

何にせよミルキアさんといいシゼル様といい、私の悲痛な気持ちに同情してくれる気はさらさらないらしい。

まあシゼル様は、アリシアとミルキアさんの虜めに關しても「痛快」とか「興味深い」とか言つていたから、期待はしていなかつたが。

「それを報告するために来たのか」

「いやいや、違いますよ。ちょっとシゼル様にお願いしたいことがあります」

「お願い？」

シゼル様はふいを突かれたように小さく口を開けた。

「はい。あのですね、今まではアリシアの虜めも、私には実害がなかつたので放つておいたのですね。でも今回我が子を失うというとんでもない実害が生じました。よつて、行動を起こそうと思つのです」

「ふむ。復讐か？」

「そうしたいのはやまやまですが、リスクを考えますとビリしても平和的な解決が望ましいですね。それで、今まで当事者でありながら部外者面してきた人間に動いていただきたいと思っています」

「イヴァンか」

「流石シゼル様。頭の回転が速いですね」

イヴァンとはアリシアの恋人の名前だそうだ。

「それで、彼のお知り合いであるあなたの力を借りしたいのです」「具体的に言うと？」

「それとなくちくつちくつてやつてください」

シゼル様は紅茶を飲み干し、机に茶器を置いた。

そして腕を組んで考えるように瞼を伏せる。

しばらく経つてから、彼は虚ろな目を私のいる方向に向かた。

「私に頼み事をしてくる人間はそういうない

「奇遇ですね。私も頼み事できる人間そういうないですよ」

「寂しい奴だな」

「いえいえ。お互い様ですから」

私は真顔で言つたのだが、シゼル様は鼻で笑つたようだつた。

「まあ、だからこそ聞いてやるつとは思つ。聞いてやるつとは思つりが、私はこの方法はあまり頭の良いものとは思えない」

「それについては賛同します。でも私、部外者から被害者に昇格したはいいのですが、それでも当事者ではないわけで。こいつこいつ迂遠な方法以上にできることがないのですよ」

「可能なならばミルキアさんのように徹底的なシナリオを作つてやりたい。そのほうが面白そうだし。しかし被害者Aである私には、そんなおこがましい行動はできつゝないのである。」

「あなたがそう言つのならば、協力はしてやるつ」「わーい、ありがとひざります。シゼル様優しいですねー」

私が素直に喜ぶと、シゼル様は鮮やかに笑つた。

「世辞としても否定しておこひづ。オルカ、それは誤解だ」

「紹介しよう。ミルキアの夫だ」「どーもー」

そう言わされたときの、舌を噛んで内臓の一部が鼻から飛び出てもおかしくないような私の驚きを想像していただきたい。

話も終わり、部屋まで戻る帰りの出来事である。

シゼル様の「途中まで送る」という言葉に遠慮なく甘え、私達は一人で館を出た。そしてすぐに、つまり館の門の前で上記のように言われたのである。

「ミルキアがいつもお世話をしまーつす、夫のシュルツ・ミルドローズでーつす」

だるそつとウザいが混ざつた口調というのは、聞いているものの神経を実に逆撫でするものだ。と、私はしみじみ思った。

「嘘です」

「何で嘘になるんだよ」

「ミルキアさんの旦那さんがこんなだるそつで眠そうで猫背な騎士なわけがありません」

「じゃあどんな奴なら納得できるんだ」

「だるそつでも眠そつでも猫背でもない人間だつたら納得して差し上げます」

「おまえは俺に人格と姿勢を矯正しろと言うのか……」

「つていうか『ミルドローズ』つていう家名、果てしなくあなたに似合わないですね、くすつ」

自称ミルキアさんの夫兼だるそつな騎士兼門番」とシュルツさんは、溜め息を吐いてシゼル様を見やつた。

「……旦那、このチビすげーむかつくんですけど」

シゼル様は感心したように頷く。

「息苦しそうにして居るのはわかつていたが、出そうと思えばどこまでも本性が出てきそうだな。シユルツ、おまえなかなか見所があるわ」

「え。それってこのチビの性格を引き出すのに長けてるってことですか？」

「むう。私はこんな猫背男に負けませんよ」

「あのセー、うちそういう厄介系女子間に会つてゐるから。まじで」

「シゼル様、ミルキアさんの旦那さんってほんとにこの人で会つてますか？」

「聞けよ」

シゼル様は真面目な顔で頷いた。

「嘘だと思つなら今度ミルキア本人に確認を取るがいい」

「うーん。そうします」

私は仕方なくこの件を保留することにする。

「おまえどうしても信じたくないのな……」

シユルツさんが呆れた声で言つてきたが、無視した。

そりやあ信じたくないに決まつてゐるわ、と心の中だけで突っ込んでおく。

「さあさあシゼル様行きましょ。私明日も寝坊しちゃつたからミルキアさんに殺されます」

「ああ」

「いい加減殺されればいいと思つぜ」

お疲れ気味の騎士を置いて、私達は石階段を降り出した。

階段となるとシゼル様の歩みも健常者並とまではいかなくなるので、私は後ろをのんびり付いて行くことにする。時々脇に咲いている竜胆じのとくはすっかり闇と同化して、その形だけを静かに浮き上がらせていた。

「ちょっと残念でした」

ふと思いついた私は、ひんやりした大気に自分の声を放つた。

「何がだ」

シゼル様が問い合わせ返す。

当たり前の反応が、この人だと何故だか嬉しい。

「ミルキアさんの旦那さんイベントです」

「何だ。結局疑っているわけではないのか」

「シゼル様は嘘を吐かなそうです。本当のことを隠すのが上手だから、嘘を吐く必要がないのでしょうか」

シゼル様は肯定も否定もせず、ただ吐息を漏らすように小さく笑つた。

「それはそうと、私が残念がっているのは、別にミルキアさんの旦

那さんがあれだつたからじゃないのですよ

「そうか。では何故だ？」

「イベントの無駄遣いをしてしまいました。次は、ミルキアさんの旦那さんを紹介してもらつて、いづ名田で、来ようと思つてたのに

そう言つて私は、シゼル様の背中を見つめながら耳を澄ます。

すると彼は立ち止まってこちらを振り返つた。

彼の表情はただただ透明で、澄んだ無機質だつた。

「いざれあなたは今の言葉を悔いになるだらう

そんな意味不明な言葉だけ置き去りにして、シゼル様は再び歩き始める。

私は少し残念に思つた。

「いつでも来ていい」とか、「理由なんていらない」とか、そんな優しい言葉が返つてくれればいいなあ、なんて、勝手なことを頭の隅で考えていたから。

でもすぐに、「それもまたよし」と思い直していた。

私はシゼル様のことが何となく好きであるが、それはシゼル様がどこまでもシゼル様だから好きなわけである。

その考えに自分で非常に納得してしまつて、気付けば自然と口に出していた。

「それもまたよし」

ちらりと私を見やつたシゼル様の顔は、何だか優しげで、でも、それは私の勝手な解釈だつたかもしれない。

ショーヴラーグの上流階級の家庭において、双子は不吉の象徴とされている。

「卵性であるうと二卵生であるうとそれは変わらない。

理由は大きく分けて二つ。

長子の権利についての争いが起きやすいこと。そして、「双子は能力を二つに分けて生まれてきた子どもであるため、未完成な形態である」という昔からの言い伝えによる。

勿論後者の理由を本気にしている人間は、実際には多くないと思う。

しかし双子の人間は、何か劣っている点があつたり失敗したりすると、「これだから双子は」とすぐ槍玉に上げられる人種であることは間違いかつた。

特に私の場合、妹のカノンのほうが全体的に要領が良く成績も上だつたので、「オルカはカノンに良いところを全部吸い取られた」などと言われて育つてきた。

それで、母はよく私とカノンに「のよくなことを言い聞かせた。

「いいですか。世の中には詮無い人が実に多いのです。こと上流階級の者には詮無い人種の比率が非常に高い。人間権力を持つどんどん阿保になっていくのです。

この点についてはあなた達のお父様もどうしようもない阿保ですが、お父様は質の良い阿保です。わたくしが今言おうとしているのは、質の悪い阿保についてですわ。

質の悪い阿保は、あなた達のことをきっと疎むでしょう。あなた達に欠点を見出す度に、或いは何か間違いを犯す度に、『これだから双子は』と蔑むことでしょう。逆に言ひると、双子なのを理由にあなた達を蔑む輩は、質の悪い阿保です。

質の悪い阿保に会つたときは、良いですか。よく見るのでよ。……この顔です。この田つきで相手を見なさい。難しいですか？もう一度やりますよ。……口は『ああこの人は質の悪い阿保なんだな。氣の毒だな』という思いやりを込めて相手を見つめることです。世の中で生き抜くには思いやりの心が非常に大事ですわ』

よつて私とカノンは、質の悪い阿保に出会つ度に、この方法を実地に試みた。

しかし不思議なもので、この方法、私がやるとカノンがやるのとでは、効果が全く違つた。

カノンがこの表情をすると、質の悪い阿保はたちどころに眉尻を下げる、しきりに彼女に謝るのである。

これに勇気を得た私は、カノンに倣つて思いやりの表情を試してみた。しかし私の場合、どんなに思いやりを込めたとしても、相手は何故か憤慨してしまつのである。

人間というのは理不尽なものだな、と感慨深く思つたものだ。

訓練の効果はともあれ、私が今までさして双子であるといつてを気にしないで生きて来れたのは、主に母の諭しのお陰である。

私がジゼル様にお願いをしてから三日。

彼が頼み通りに動いてくれたからだと私は踏んでいるのだが、あれ以来私への嫌がらせはない。

皆が私を避けるのは変わらないが、実害がないのであればもうそれで良いとしよう。

そもそもそんな些細なことで離れていく友達など友達ではないのである。

寂しくなんかないやい。ぐすん。

ひとつ気になることがあるとすれば、今日一日全くアリシアの姿を見ていないことか。

彼女も私と同じく本館配属であるから、一度も会わないなんてことは滅多にない。

加えてここ最近、早番、遅番のときをを除き、食事は一緒にとっていたのに、彼女はそこにも姿を見せない。いつも窓際の席にいなし、一応探してみても見当たらなかつた。一度ならまだしも、これが朝、昼、晩と三回続くと流石に心配になつてくる。

私は夕食の後、アリシアの自室に赴いた。

しかしノックをしても返事はない。人の気配がなかつたから、恐らく留守なのだろう。

諦めて自室に帰ることにした。

使用者の館は、真ん中の突き抜けた四角形をしてい。

アリシアの部屋は同じ二階だが、私の部屋のある廊下から反対側の辺に位置する。

この時間帯はまだ全ての燭台に火が灯つていてるから明るい。ツーヴラーグ城は基本的に二十一時を過ぎると灯りが三つおきに減らされる。さらに二十四時を過ぎると全て消灯となるので、出歩く際

には角灯なり燭台なりを自身で持ち歩かねばならない。

食事会や三日前の夜の帰りなどは幸い二十四時前に戻れたので良かったが、それでも薄暗く静かな回廊を一人で歩くのは勘弁したいものである。

私は木の床をこつこつ踏み鳴らしながら、白いドアが整列する廊下を進んだ。

一番目の角を曲がったとき、私は足を止める。
せーっと血の気が退いていくのがわかつた。

私の部屋のドアが、開け放たれている。

慌てて、しかし音を立てぬよう、小走りで自室に駆け寄った。

まさかまた嫌がらせだらうか。

今回は特に食べ物を自室に置いておくことなどはしなかつたが、もし嫌がらせを目的とした侵入ならばただで済むとは思えない。

開けっ放しといつことは、もしかして犯人がまだ中にいるのかも。

不安半分、現行犯として捕まえられるといつ期待半分で、私は自室を覗いた。

結果としては、不安はそれなりに的中し、期待は霧散し、プラスアルファで疑問がによきによき湧き出できた。

私の部屋は大いに荒らされていた。

椅子は倒され、机の引き出しは全部逆でモノが散乱、毛布とシーツは床に広げられ足跡がつき、お気に入りのカップが割られている。

備品である鏡も割られていた。これってまさか私が弁償するの。

「」の状態だけを見たならば、私はひたすら怒りと悲しみに満たされただけであろう。

しかし幸か不幸か、それを許さぬ程の大きな疑問の原因が、シーツと毛布のはぎ取られたベッドの上に存在していた。

それはこの部屋に全く似合わない悠々とした姿で寝転がり、数枚の紙を手に持ち、熱心に読みふけっている。

「……ニイ？」

私がその疑問の原因の名を呼ぶと、灰色の三白眼がこちらを視界に捉えた。

「あ、オルカだ。やつほー」

言つてひらひらと片手を振る。

「やつほーじゃないわつ」

私は後ろ手にドアを閉めると肩を怒らせた。するとニイはすぐさま振った片手に力を込め、同時に首も横にぶんぶん振る。

「あ、違う違う。これやつたのあたしじゃないからつーあたしがここに来たときには既にこうなつてたからつ」

「はあ？ 何であなたがここに来るのよ。何の用よ」

「」はこつこつ笑つて、のんびりとベッドから起き上がつた。

「シゼル様に言われて様子を見に来たんだあつ。聞いた? アリシアは昨日づけで退職したんだよん」

私は息を呑んだ。

「知らない。何それ

「まあ手紙が来ることを見ると聞いてないと思つたけどねん。はいっ、アリシアからだよつ」

そう言つてニイは持つてゐる紙束から一枚抜き取り、私に差し出してきた。

何でニイが勝手に読んでるんだ、と思いつつも受け取つて読んでみる。手紙は確かにアリシアからのもので、退職することと私へのお礼が綴られていた。そしてその理由がケツコンとなつていた。

けつこん?

結婚!

「えええ何でいきなり結婚になるわけ!?

「きやははは! 行動が大胆だよねー、アリシアちゃん! あ、でも今日はアリシアちゃんだけの意思じゃないけどお

「ニイは経緯じきさつについて知つてるの?」

教えなさいよ、という威圧を込めて彼女を睨む。

「知つてるよん。シゼル様の命令で調べたからねつ

シゼル様は随分と偉い人種のようだ。

侍女に命令して調べさせると何か怖いんだけれども、気にしな

いことにしよう。

「どうか侍女は普通こんなプライベートなことを調べるために動いたり、門番をしたりはしない。

改めて思つが、ニイつて一体何者。

「あんねー、イヴァン君はさあ、イケメンでめっちゃモテて超優しいんだけど、腰抜けなんだなーっ」

「へえ？」

私は転がつていた椅子を立て直して、ニイと向かい合つて座つた。

「君がジゼル様経由で虚めのこととイヴァン坊にちくつたじやん？」

「ええ」

「それつて多分君的には、イヴァン坊に虚めしてる人達と話し合つてほしかつたつて意図でしょ」

「そうよ」

「あのねー、イヴァン坊はそんなことできない子なんだよお。こいつ、はつきりすぱつと言えないってゆーか？」

成る程、それは腰抜けである。

「あ、でもイヴァン坊のこと怒つちゃ駄目だよーっ。あれでもアリシアちゃんのことは本気で好きなんだからあ。そんでえ、波風立てずにアリシアちゃんを守る方法を考えた結果、手つ取り早くアリシアちゃんを退職させるつてことになつたんさーついでにプロポーズもしちゃえれば、フォローもばつちりーみたいな？」

「な、何という強引な手段……」

しかし」とアリシアに関して言えば隙のない手段もある。

あくまで恋人を支えることを主張していたアリシアであるが、結婚を理由に退職ということであれば、十分己の目的を果たしていることになる。

イヴァンとやらも腰抜けの割に悔れない性格をしていそうだ。

まあ私の予想していた方向ではなかつたものの、これにてアリシアの騒動は収集がつきそうなので良かつた。良かつたのだが、煮え切らないことがある。

「……アリシアが辞めたってこと、嫌がらせしてきた人達は知っているのかしら」

「もつちろん知ってるでしょ」

「じゃあ、何で私の部屋がこんな有り様なわけ？」

私は憤つた。

元から嫌がらせを受ける謂れなんてなかつたが、アリシアが消えた今、益々私が被害者になる理由がわからない。

「まあ虚めの理由なんて理由にもなんないものばっかだからねえつ「私何かしたかしら」

首を捻つて考えるものの、特に思い浮かばない。

仕事上の失敗などはよくするが、家族以外の対人関係はかなり慎重に扱つているつもりである。私的には。

「いやいや、そうじやなくてえ。アリシアちゃんが辞めたからこそ、彼女らの不満の捌け口がなくなっちゃつたわけよ。アリシアちゃんは退職して虚めとも無縁、おまけに婚約しちやつて超幸せ、イヴァン君は自分から話しあつたり誰かを傷つけたりすることなく物事が丸く治まつてめでたしめでたし。でもそれって結局、アリシアちゃん

んを慮めてた子にとってはなんも面白くないわけですよん…」

「まあ……確かに……」

「イヤがこんなまともな意見を吐いているのが何だか不思議である。

「それの捌け口が私ってわけ?」

「そゆことだねーつ。新たなターゲット見つけんのもめんどこいし、成り行きでもうオルカでいんじゃね?みたいな?ってかんじだろ? ねーつ」

私はぐでん、と瞼もたれに寄りかかった。口からは、はああと長い溜め息が漏れる。

「シゼル様、こつなることを予測していたのかしら」

「心配してあたしを寄越すつてことせ、そなだらうつねえ」

「……先に言え……」

「イヤは場に反してあははと明るく笑つた。

「シゼル様優しくないから」

「ああ……そうだつナ……」

ちくしょーほんとに優しくないなーあのやうー、と私は心の中で悪態を吐いた。

「とひりでわあ、そのアリシアからの手紙? 開けたのはあたしじゃないんだあ

「既に開いてたつてわけ?」

「せいかーい。床に散乱してたのを私が掃き集めましたあ。多分ドアのポストもチェックしたんだねー、執着愛だねーつ

「ううう、愛が重い」

「でねでね」

そこまで言いかけて、ニイは急に立ち上がった。そして椅子の背にもたれかかった私の顔を覗き込む。

「あたしがここに来たとき、散乱してた手紙はこれだけじゃあないんだよん」

言つて、持つていた残りの紙束をペシッと私の額に載せた。
この女子学生みたいなノリは何だろう、と思いながら、満更でもない私は大人しくそれを受け取る。
ニイは無邪気に微笑んだ。

「差出人、お父さん」

即座に背もたれから起き上がった。
だつて嫌な予感しかしない。

「親愛なる我が娘オルカ・コーディスへ

秋も深まる今日この頃、如何お過ごしでしょうか。オルカのことだから、可愛げのなさや有り余る阿保パワーを利用して侍女職に専念していくことと思います。

私達夫婦は先日、我が息子クレスと我が娘カノン、そしてカノンの夫セラードと共に食事に行きました。オルカの好きなトナー・ジユ・ナイヤージュというレストランをちょっとびり貸し切っちゃいました。

アワビのソテーがとても美味しかったです。この手紙を読んでいるおまえの涎が目に浮かびます。

そこでの話題は勿論、愛する我が娘オルカの行く末についてです。妻のフリージスは元より、クレスやカノン、果てはセラードまでもがおまえの将来を心配していましたよ。「あいつぜつて一婚活する気ないだろ」というようなことを、皆が皆口を揃えて言つていました。

父はおまえのようにみんなに愛される娘を持てたことが幸せだし、思いやり深い家族を持つて幸せです。そして私も勿論おまえのことを見配しています。いい加減婚活しきや。そろそろ本気で週一見合いさせらるべいひ。

オルカのことを心配し過ぎて、少し筆が粗ぶってしまいました。
ごめんね。

しかし私が何と言おうと、今のところはまだおまえの心に届くこ

とはなさそうですね。

でも父はそれも時間の問題だと思つています。

オルカは中途半端に周りに気を遣う子なので、その内追い詰められて自滅していく様は容易に想像できます。しかし父はそれではいけないと思つています。オルカは中途半端に奔放な子なので、追い詰められて結婚などというルートを辿るなら、これもまたいざれ自滅するでしょう。おまえが家出してムワ・ドナの遊牧民と共に旅をする姿は容易に想像できます。

それはそれで楽しそうなのですが、父は侯爵様であり、みんなの模範になるべき立場にいるので、こう言ひます。

オルカ、恋をしなさい。

しかしおまえは恋をしろと言われて恋をする人間ではありませんね。そもそも恋をしろと言われて恋をする人間は、恋をしているとは言えないと思います。

でも、父親として、娘を恋路に導くくらいはできるかなあと思いました。

そこで、父が独自の情報網を使って綿密に調べ上げた、オルカの恋人候補リスト（城勤め平民版）を同封しておきます。厳選に厳選を重ねた父自慢の調査結果です。役職や収入、年齢は勿論のこと、顔写真やら性格やら評判やら、お得情報が盛り沢山です。

このリストに目を通す あら、この人何だか良さそうだわ 意識し出す 恋人同士に！という効果を期待しています。だから余すとこなく目を通しやがれ。

これから行儀見習いの期間、頑張つて恋人探しに専念してください。侍女の仕事とか、しなくてもいいから。父が許します。

それではお元氣で。

父・レイルズより

一枚目と一枚目を読み終えた私は、力の抜けた顔で「イのほうを振り返った。

「イ……」の手紙……あなたが来たときには既に開いてたのよね

震える手が紙束を破つてしまわぬよう制御しつつ、恐る恐る開いた。開いてたよー。さつきも言つたけど、床にばらばらに散らばつてたつ

結局御せなくなつた私の両手は、紙束を真つ一つに引き裂いた。

「今頃君の恋愛事情が連綿と語り継がれてるんだろうな

その夜、私は絶望の意味を知るのだった。

翌日、お昼休みを終えてすぐの時間帯、私は本館と南館を繋ぐ渡り廊下を黙々とモップかけしていた。

朝起きてから現在までの時間は、私が置かれた状況を把握するには十分なものであった。

一人とすれ違えば好奇の視線を向けられる。一人とすれ違えばひ

そひそ話が交わされる。二人以上と出くわせばそれに笑いが加わる。そして食堂に赴けば嘲笑、挑発、侮蔑の嵐である。

「オルカちゃん、恋人探しは順調かい？」

と、名も知らぬ騎士が言つ。

「そんなに困つていてるのなら、僕がイイ男紹介してあげようか？」ははつ

と、初対面の文官が言つ。

「あなた何しにここに来てるの？ 貴族つてやっぱ皆そういうことしか頭にないの？」

と、少し前まで可愛がつてくれていた先輩が言つ。

一言で今の感情を的確に表すとしたら、うんざりだつた。若しくは、疲れてしまつた。

手につくものを片つ端から碎いてやりたい怒りがある。実家の自室に籠つて泣き崩れたい悲しみと恥ずかしさがある。なりふり構わず己を傷つけたい情けなさがある。

そういうた気持ちが入れ替わり立ち替わり、時には一斉に襲いかつてきて、それらに応戦する力はもつ、残つていなかつた。よつて、私は戦いを放棄した。

無心で体を動かし、床が磨かれていくことにだけ、注意を集中する。

しかしそれでも思考をどこまでも抜くすることは私にはできなかつたので、できるだけ感情の混じらない事務的な態度で、これからどうすべきかを考えていた。

結論としては、行儀見習いを中退して実家に帰る、これしかなかつた。

仕事を終えたらミルキアさんに頼んで辞表をもう一、明日提出し

よつ。

繰り返し繰り返しその行動を脳に焼き付け、『じしゅ』と床を擦つた。

時折、乾拭かづぶきを交えつつ、半分程の位置に差し掛かつたとき、甘い香りが漂ってきた。

すぐに察しがついて廊下の左右に広がる南庭園を探す。やがて、ああやつぱり、と腑に落ちた。

右側の庭園の端のほうに、すんぐりとした深緑、その中に散る金粉のような小花。金木犀だ。

ふと気付けば、私は僅かに口角を上げていて、自分で吃驚した。人間って、こんなときにも笑えるんだなあ、と思つた。

しかしあ、考えてみれば私の追い詰められている理由も實に笑えるものだ。

父の阿保な手紙を虚めつ子に田撃されて、噂として広められる。だなんて、酷く幼稚な出来事である。私らしいと言えば私らしい。

そう思つて、もつと笑つてやろうと思つたのだけれど、私といつ人間は天の邪鬼で、笑おうとすれば不覚にも涙がぽろりと転がるのであった。

数滴の透明で小さな玉は、モップを掻んだ私の手の上で弾け飛ぶ。それを眺めていたら、力が抜けて、もつ止められなかつた。

ぱうぱうぱうぱう。

あんなに我慢していたのに、これで苦労も水の泡。あーあ。

無言で涙が止まるのを待つていると、後ろから私を呼ぶ声がした。

「オルカ」

生真面目な硬さを多分に含む明朗な女声。それが私の敵のものでないことはすぐにわかつたので、私は無防備に振り返った。

「はい、ミルキアさん」

思っていたよりも、言葉ははつきりと紡がれた。相変わらず涙は零れ続けていたが。

それを見たミルキアさんは顔を強張らせた。

「大丈夫ですか」

私は笑う。

「大丈夫じゃないです。泣けてきました」

ミルキアさんは表情はそのままで、しばらく無言で突つ立つていた。

多分、彼女はどうすれば良いのかがわからないのだと思う。

しかし、ミルキアさんのそうして戸惑い固まっている姿は、私は十分慰めになつた。だって、何だか可笑しいし可愛い。

私の笑いが自身に起因するのがわかつたのか、ミルキアさんは少し身じろぎして、憮然とした。

「それで、何が御用ですか？」

「城中に広まつた悪趣味な噂を聞いて。あなたは『存知ですか？』

「『』存知に決まっていますよ」

私はわざとおどけて肩を竦めてみせる。
涙も止まつてきたので良かつた。私は瞳に溜まつた水滴を手で拭う。

「『』まで尾びれ背びれが付いているのかわからないんですけど、残念ながらその噂、悪趣味な事実ですもの」

私が『』と書いたとき、ミルキアさんは怒るかな、と思つたのだが、見たところ彼女の表情に変化はなかつた。

普通に関心を示している、というような態度だ。

「では、あなたのお父上が恋人候補リストとやらを送り付けて来たのは本当ですか？」

「本当ですよ。私の父親、昔から結婚結婚と煩いのです」

「あなたが結婚相手を探しにこの城に来た、というのも本当なのでですか？」

「んーと。正確には、それは違います。父にはそういう意図があつて私を行儀見習いに出したわけですが、私にはてんでやる気がありませんでしたので」

すると何故かミルキアさんは、目に見えて落胆を露わにした。

私は今までの言動に彼女をがっかりさせる原因があつたろうかと思ひ返してみたが、どうしてこのタイミングで落胆するのか、結局わからなかつた。

「ああ、そうだ。ミルキアさん、後で辞表の用紙をいただきたいの

ですが

ミルキアさんの動きがまたしても止まつたので、私は驚いたのかと思つた。

「確かに公務員が辞表を出すときには、専用の紙がありましたよね。それとも、行儀見習いだと違うのでしょうか？」

「いえ……。そうですね、専用の書類がありますわ」

ミルキアさんは固まつたままで、口だけ小さく動かす。何だか彼女らしくない。滑稽である。

「あなた、行儀見習いをやめるのですか？」

「それは、まあ。私、この状況で続けられる程、屈強な精神を持つていませんので」

彼女はその後もしばらく固まつていたようだが、やがて呪縛が解けたかのように「わかりました」と言つて、悠々とその場を去つて行つた。

その後ミルキアさんは私の前に姿を見せなかつた。私は明日辞表を提出し、明後日にまもつ実家に帰るつもりでいたので、肩を落として自室に戻つた。

あの最悪の食堂も、三回続くと流石に慣れてきた。そして監もそれに気付いたのか、若しくは飽きてきたのか、心なしか夕食は比較的ちよっかいをかけられなかつた氣がする。飽くまで比較的であるが。

しかし昨夜のことを考へると、部屋に帰ることすら気が重い。一度あることは二度あるものだ。

本当の意味での貴重品などは持ち込んでいないし、財布だけは一応持ち歩いている。そうだとしても、これから荒らされた部屋を見るかもしれないといつのは、疲れ切つた私には重圧過ぎる。

どんより翳つた気持ちで階段を上つてると、二階だと思われるが、何やら騒がしい会話が聞こえてきた。

その内のひとつは聞き覚えのある、明るくしゃれやけりした歌うような声。

一イだ。

私は角からそつと奥の様子を窺つた。

一イと、二人の侍女、そして腰に鍵束を下げた、西館のハウスキーが私の部屋の前で揉めている。

一イの手にはハウスキーの腕がしつかと握られていた。

「離しなさいよ、気持ち悪い！私を誰だと思っているの！」

「ねえ、その台詞何回目？あたしだって何回も言つたでしょ？君が

誰かなんてあたしには何にも関係ないって」

「何様よ！何そのおかしな格好！あんたどこの配属…？」

「ひ・み・つ。君達に知る権利はないものつ」

「私達が何をしようと勝手でしようつ」

「ああ、うん、確かにそだねーつ。別にあたしの知らないところで君達が何しようがどうでもいいけどさ、偶然見ちゃつたし？それが偶然お友達に関わることだつたし？」

そんな問答を延々と続いている。

ハウスキーパーは何とかニイから逃げ出そつと試みているのだが、ニイは結構力が強いらしく、ずっと腕を握り締めたままである。

他の侍女二人は時折口を挟むものの、少し怖気づいているようだ。やや距離を取つて立つていた。

ついにはハウスキーパーは殴ろうとしたり蹴ろうとしたり、色々と暴挙に出るが、その全てをニイはひらひらとかわす。その間も片手は絶対に離さない。

暫く観察していた私だつたが、自室があそこにある以上放つておくこともできないので、姿を現すことにしてた。

どう対処したものか、と考えながら。

いち早くそれを察知したのは一人の侍女であつた。彼女らは私を見ると顔を青ざめさせ、素晴らしい身のこなしで廊下の奥に駆けて行く。

「ちょっとーあんた達！」

侍女達と違い動きたくても動けないハウスキーパーは抗議の声を

上げるが、そんなものもおかまいなしに、一人は颯爽と消え去った。その鮮やかな退散っぷりはとても清々しく、私は呆気に取られつつも心の中で彼らに拍手を送った。

「あ、やつほー、オルカ」

昨夜会つたときと同じく、ニイは片手をひらひらと舞わせた。ハウスキーパーはぎょっとしてこちらを見つめる。

「御機嫌よう、オズウェイ。御機嫌よう、ニイ」

因みにオズウェイとは、大人の女性、特に貴婦人に使う、敬意を込めたツェーヴラーグ流の呼び方である。

私は足を交差させ、片手を胸に当て、華麗にお辞儀をした。

そうして、華麗に自室のドアを開け、華麗に中に身を滑り込ませ、

華麗に閉めた。

続いて華麗に鍵をかけようとしたのだが、その前にニイがドアを開けるのが早かつた。

「ちょっとちよっとオルカー、ビーウー」となのわつ

彼女はドアの隙間に何とか身を押し込め、自身をストップバー代わりにする。

口を尖らせるニイは、しかし楽しそうでもあった。

その雰囲気に、何故だか私は元氣づけられた。

不思議と自分も楽しくなつてくる。

だから私はニイの挟まつたドアを、力いっぱい押してやつた。

「むぐぐぐ

「イは唸ると、渾身の力を振り絞つたようであった。

ドアは勢い良く開き、私はすんでのところで後ずさる。

「何だよおっ。折角あたしが部屋を荒らしに来た人間を現行犯逮捕してあげたのに」

「私にそれをどうじろつて言つたのよ……」

正直なところ、今はもう犯人が誰かとか、制裁を加えることとか、そういったことに全く興味が持てなかつた。

どうせ私は数日したらここから居なくなる身であるし、犯人をどこかに突き出すにしても、その作業が面倒臭い。

そんな疲れた私の目を、イは無垢な瞳で見つめて來た。

「どうしてほしいの？」

「……どうでもいいわ」

心を込めてそう答えると、イは念点がいつたようだ。「そ」と頷くと、自然な動作でハウスキーパーの腕を離すのだった。

解放された彼女は、暫く己が自由の身であることに気付いていかつたが、やがて戸惑いながら去つて行つた。

私はそれを見送ると、ふらふらとした足取りで部屋の奥に進み、ベッドに倒れ込む。

それから顔だけ動かし、イを見上げた。

「今日もシゼル様に言われて來たの？」

「うん、そうつ。お昼前から部屋の前にいたよん」

「何でもない」とのよつて言われた彼女の言葉に、私は驚愕した。

「え……？」

起き上がり、ベッドに座り直す。

「お畳前からここにいた？」

ゆづくつ、彼女の台詞を辿るゆづて確認する。

「そう、お畳前から。そう言われたからねつ」

「……私の部屋を見張つてくれたの？」

「そだよー」

私は言葉を失つた。

素直に感動していたのだ。

目と鼻が熱くなつた。

「ニイ、ありがとつ」

私が大真面目な顔でそうゆづと、ニイは無邪氣に笑つた。

「どういたしまして。その言葉は、一倍にしてシゼル様にもかけてあげてね」

私は「そうするわ」と頷いて、顔を逸らした。

油断するとあつという間に泣いてしまつたから。

「そうそう、それでね、シゼル様からの伝言なんだけど、明日北東館に来てほしいらしいよ」

「明日? 何時頃に行けばいいのかしら」

「できれば早めに、だつて。でもまあ、大体いつでも大丈夫だと思

「うよー」

「一イは訳知り顔で言つたので、私もさして」だわらすこ「やつ」
と答えた。

確かに、時間に追われて生きるシゼル様は想像がつかない。

用事は終わしかと思つたや、一イは探し物でもするよつて、私の
部屋をきょろきょろと見回していく。

「どうかしたの？」

「あれは？ 恋人候補リストは？」

その言葉に一瞬で気分が萎えた。

全て、とまでは言わないが、ほぼ全ての元凶が阿保お父様の製作
したあのリストなのである。

「見たいの？」

「あたしは昨日見たからいいんだけど、シゼル様にあつたら持つて
来いつて言われててさつ」

私は脱力した。

どこまでいっても、彼は面白好きらしい。

こういうところがなければ、普通に良い人だと思うのだけれど。
いや、それはないか。ないわ。

私は引き出しの奥から、一応とつておいた真つ一いつのリストを取
り出して一イに渡した。

「わあい、ありがとつ。あたし的には、二番田のカイル君がイケメ
ンでお勧めなんだよねー」

「はあ？ どれよ？」

「見てないの？」

「見てないわ。興味なかつたし」

「面白いよお、これ。人権とかプライバシーとか、どこまでも無視してるよね、君のお父さん」

「あなたも悪趣味ねえ」

呆れつつもリストを覗き込んだ。

カイルさんとやらはまあ、確かにイケメンではあった。

それを一人で眺めている内に、私はいつの間にか心から笑えていふことに気付いて、ニイには内緒でちょっと泣いたのだった。

翌朝、私は珍しく自然に目が覚めた。

時計を見やると、針は五時五十分を指している。今日は早番ではないのでもう少し眠れるはずと、頭を毛布の中に押し込んだ。この時期のツェーヴラーグの朝は冷え込みが激しい。さつきまで外気に晒していた頬が冷たかった。

しかし時間が経てば時間が経つ程、意識がはつきりとしてきた。このまま毛布に包まってぬくぬくしているのも良いが、まどろみ始めたところでどうせ目覚まし時計が鳴るだろ。

私はのそりと起き上ると、白いゼンマイ式目覚まし時計に手を伸ばす。アラーム用の針をもう一周回し、ゼンマイも限界まで回しておいた。

ベッドから立ち上がり、大きく伸びをする。それに合わせて木床が少し軋む。早く目を覚ましはしても、昨日の疲れは残っているらしく何だかだるい。

生成り色のガウンを羽織り、カーテンを開ける。外には霧が立ち込めていた。

その霧を見つめていると、昨日あつたあれこれ思い出出してしまった。

朝から憂鬱な気分で私は身支度をし出した。

絶対に今日こそは辞表を貰わねば、と決意する。

顔を洗い、着替え、髪を整え、化粧を施し、洗濯の必要な衣服を持つて扉を開けた。

廊下に出ると、自室のドアの直ぐ横に見知らぬ侍女がいた。まだ少女と言つても差し支えない若さで、あどけない顔立ちをしている。

彼女は私に気付くと可愛らしく慌ててみせ、それから足を交差させ片手を左胸に当て、淑女流のお辞儀をした。

「御機嫌よう、オルカ・コーディス様」

勿論私もそれに応じ、「御機嫌ようオージス」と若い娘向きの挨拶を返すが、心中では首を捻っていた。

私とかつてのアリシア以外でこの城で働く貴族の侍女といつたら、後はもう王家の側近くらいいなものであろう。しかし彼等が私に近付いてくる理由は思い当たらない。

と思つていたら思い当たつた。父からの阿保な手紙の噂が、王家の人々にも届いていない保証はどこにもないのだ。むしろこれだけ広まっているのだから、届いてないほうがおかしい。

しかし今回ばかりは、責任の大半は父にある。どうにでもなれ、と私は腹を括つた。

「突然ですが、皇太子様がお呼びです。付いて来てくださいまし」

彼女はそう言つて、後ろの気配を確かめるようにゆっくりと歩き出した。

少し背伸びした感じはあるものの、王家の側近である」とへの誇りが窺い知れる。

当然私はその態度についてとやかく言つつもりはないので、大人しく彼女に従つた。

途中洗濯物を入れる籠に自分の衣服を放り込む。

その音で、彼女は私がきちんと付いて来ていることを知つて安心

したらしく、きびきび堂々と歩を進めた。

私はこのよくなませた子どもが嫌いであるが、若くして王城勤めといふ彼女の生活に敬意を表して、無言で歩く。

まだ食事の時間までは少しあるので、廊下に他の侍女の姿は見えない。皆起き出しているようで、それぞの部屋から生活音や気配は伝わってきた。

ひとつ気になつたのは、私を呼び出しが王様でも王妃様でもなく、皇太子様であるといつことであった。

* * * * *

皇太子様が暮らすのは南館の三階である。

王族の暮らす南館に実際に足を踏み入れるのは、これが初めてだつた。

天井の高さと回廊の広さに驚いた。政務を執り行つたり、様々な来賓を招く本館はともかくとして、ただの住居にここまでする必要があるのだろうか。

大きな柱達や床は全て大理石らしく、一列に並ぶシャンデリアの光がそれらをクリーム色に染め上げている。

回廊の真ん中には深紅の絨毯が伸びていた。

巨大な柱と柱の間に木製の古びた扉がひとつずつ鎮座している。その内のひとつを侍女の女の子が叩いた。

「スーです。オルカ・コーディス嬢をお連れいたしました」

すぐに中から返事がし、少女はドアを開けて私の中に招き入れる。どうやらここは応接間らしく、皇太子様がソファの前で立つていた。

彼は私と目を合わせると、あの困ったような笑みを浮かべる。

「『機嫌麗しゆう、オルカ嬢。朝早くにお呼び出しするなどといつ非礼をお許しください』

左胸に手を当て、丁寧な動作で礼をした。

私もそれに応じる。

少女は静かに扉を閉めると去つて行つたようだ。

通された部屋は応接間のようであつた。

北東館のそれより一倍程広い。白い壁に成された金の装飾が綺麗である。臘脂色の絨毯とソファにも金色の複雑な模様が描かれており、ああ王子様なのだなあ、と頭の悪いことを思つた。

シャンデリアにぶら下がつた硝子細工が、炎を反射して輝くのに見惚れいたら、皇太子様にくすりと笑われた。

「オルカ嬢は本当に光り物がお好きなようだ」

一瞬嫌味かと思ったが、彼の劳わるような微笑みを見る限りそうではないらしい。

「ええ。安っぽい考え方ですけれども、光るものは綺麗なので好きですわ」

「それにしては夜会などで装飾品をあまり身に付けられませんね。きっとお似合いでしょ?」

「御冗談を。私、宝石などはケースにしまつて見ているだけで十分

ですの」

「謙遜なのですね」

皇太子様は関心したように頷いた。

こいつの会話は自分に不似合い過ぎて嫌いである。

鳥肌が立つていなか確認するために、ちらりと自分の腕を見やつた。

その後皇太子様に促され、ソファに腰掛ける。

皇太子様が向かいに座ったところで、先程の少女が再びやつて来た。彼女はお茶を淹れると、また直ぐに静かに姿を消す。

勧められるままに紅茶を飲み、私は素直に「美味しいです」と感嘆の声を上げた。

「それは良かつた」

「とても良い香りですね。今まで嗅いだことのないものですね。苺と薔薇でしょうか」

「そのように感じますよね。ティオンティアのノトリヤーヤという果物を混ぜたものらしいです。女性はこのようなものが好きかと思いまして、用意させました」

「初めて聞きましたわ。国内でも手に入るでしょうか」

「どうでしょ。これはティオンティア国王から贈られたものなので」

そんな当たり障りのない会話を暫く続ける。

しかし私はそれに段々飽きてきて、元より話が上手なわけでもないので、自然と言葉少なになつてきた。

早く本題になんないかなあ、とぼんやり思つてゐるところに、皇太子様はようやく切り出す。

「父上のところにあなたに関する下らぬ噂が舞い込んで来たのです。勿論私は信じてなどいのですが、父は本気にしていました」

レイルズお父様、ぴーんち、と他人事のようと思つた。

「どのような噂でしようか」

皇太子様はどう言おうかと少し考えているふうだったが、やがて訥々と語り出す。

「その、あなたが行儀見習いをしている本当の目的は、結婚相手を探すため、だとか、恋人候補リストなるものがある、とか、実際に侍女の仕事をさぼつて恋人と頻繁に会つてゐる、とか。恋人の個人名も何人か上がつています」

言つてゐる内に皇太子様の顔が赤くなつてきた。自分で言つて恥ずかしい内容だつたのだろうか。どこまでも爽やか野郎である。

「私の父上も、本気にしているとは言つても、あなたをどうする気はないようなのでご安心ください。ただ、あのコーディス侯爵の娘なのだからあり得るかもしれない、などと言つていて」

その言葉に私は自分で思うよりもむつとしていたらしく、「そうですか」と頷いた言葉はかなり低かつた。

皇太子様は私の内心に気付いてしまつたらしく、少し焦る。

「どうかお気を悪くなさらずに。ただ、父上も母上も少し心配しているだけなのです。あなたに、既に恋人がいたらどうしよう、と。それで名前の上がつている者達にも厳重注意を呼び掛けっていて……」

そこまで述べて、皇太子様は口を噤んだ。あからさまに「しまつた」という顔をしている。

そこに駄目押しするかのように、私は皇太子様の言葉を繰り返した。

「心配？ 厳重注意？」

ちゃんと仕事しろ、などと注意されるのであればわかるが、王族の方々に私の恋愛事情を心配される意味はわからない。

そういえば食事会の席でも、私の言つ程ない恋のあれこれをやけに気にしていた。

一介の貴族の娘の恋路を気にするとか、どれだけゴシップ好きなんだ。心配とか大きなお世話であるし、厳重注意とか非常にお節介である。

皇太子様は顔を呆然とさせて、「すみません。今のは忘れてください」と言った。

忘れられるわけがないが、反抗できる身分でもないので、「そうですか」とふつわりぼうに返しておいた。

「今言つたことは、その内わかるかもしれませんので」「ではその噂について、訂正させていただいてもよろしこうか」

真実といつても阿保な真実であることに変わりはないが、この噂のままだと明らかに責任が私にあることになる。やじまきりんと誤解を解いておかないと。

「は、はい。お願いたします」

皇太子様はほっとしたような表情になつた。

「まず、私が結婚相手を探すためにこの城に来ている、とのことで
すが、それは間違いです。食事会でも申し上げましたが、恋人や想
い人なる者もおりません。私なりに眞面目に仕事をしているつもり
です。ですが、恋人候補リストなるものは、確かに存在します」

安堵しきつて私の話を聞いていた皇太子様の顔が、最後の言葉で
硬直した。

「それは一体……」

「そのリストは父が勝手に製作し、先日勝手に送り付けてきたもの
です。私はこの通り恋人も想い人もいませんので、父はそのことを
心配しているのです」

「成る程、そうだったのですか……」

「信じていただけますでしょうか」

「あなたがそう言つたのだから、私は信じますよ」

皇太子様はそう言つて二ヶコリと笑つた。これが俗に言つキラー
スマイルとやらではなかろうか。

父のことなどは本来伏せるべきところなのであらうが、奴にも少
しは反省してほしいと思い、私は正直に打ち明けたのだった。

「ですがそうなると、何が切つ掛けでこのよつた噂話が撒かれたの
でしょう。もしかして、郵便の仕分け業務をする者が中を見たので
しょうか」

「いえ、そうではなく……」

私は本当のことと言おつか迷つたが、私をこのよつた窮地に立た

せた相手への、報復も気遣いも、今となつては面倒なだけである。何も考えずに答えようと思つた。

「私の部屋に何者が侵入しまして、そのとき父の手紙と、同封されたリストを見たらしいのです」

皇太子様の目が見開かれる。

「何とまあ……。ツェーヴラーグ王家の庭でそのよつな不祥事が行われたこと、重ねてお詫び申しあげます」

彼は律儀に頭を下げた。

その行為に関して私は無関心であつたし、彼が悪いなどとは毛程も思つていないので、私に隠れて私に影響する行動を取つているらしき王家への嫌味として私は意地悪を言つてやつた。

「いいえ、皇太子様は何も悪くはありませんので、お気になさらず。特に犯人にも関心はありませんので、水に流してくださいな。何せ私は明日明後日でも行儀見習いを中退させていただこうと思つているのですから」

「え」

皇太子様が、とても呆けた顔をした。

私的には気まずそうな顔を予想していただけに、純粹に驚いたような彼の顔には私も驚いた。

だつてこちとら一応貴族の娘である。働くねばといつ意志の元来ているわけではないのだから、居づらい状況になつたとき実家に日々と帰るのは当然な気がする。

「それはつまり、『実家に帰られる、とこりう』ことじょうか

「そうですね。私が」」のまま」」にいても、王家の方々に迷惑をかけるだけですしねえ」

「いえ、そんなことはありません。そんなことはありませんしどうですが…… そうですか」

皇太子様は深刻な顔で悩んでいたようだつた。

「一体彼等は何を隠しているのだらう、と改めて不思議に思つたが、やはりそのことまで明かす気はないらしい。」

煮え切らない顔で「わかりました」と言われ、その日の会談はお開きになつた。

帰り際、最後に皇太子様はこんなことを言つた。

「大変辛い状況に立たせてしまつてすみませんでした。このことについては、私のほうからも手を打ちますので、今少しお待ちください」

私はどうせここから居なくなる身であるし、今回のことを通して父には大いに反省してもらいたい。そんなことしなくてもいいのに、と独り「」ながら、私は曖昧な微笑みを返したのだった。

予想はしていたが、皇太子様と喋っていたら朝食を逃した。全くあのぼんぼんは、使用人の朝食の時間が決まっていることにも気付かなかつたのであろうか。

朝礼にはぎりぎり間に合つたので、解散するときにミルキアさんに北東館に行くことを伝える。

ついでに辞表の用紙はどうなりましたか、と聞くと、「ああ、そんなことも言つていましたわね。もう少しお待ちになつて」とかわされ、さつさと何処かに行つてしまつた。

ミルキアさんはいまいち本氣にしてくれていないような気がする。

空っぽのお腹と、それに反して思い煩いの詰まつた頭。そんな身ひとつで、私は立ち入り禁止区域にやつて來た。

ハイネの畠を歩いていると、珍しく向こうから一人の女性が歩いて來た。

背の低い赤毛の女で、恐らく私と身長が大差ない。俯きがちに歩いており、顔はよく見えなかつた。前髪も長いので、それが一層表情をわからなくしてゐる。

二つに纏めて胸まで垂らした長い髪は緩くウェーブしており、随分痛んでいるようだ。毛先がぱさぱさしていそうだと思った。

黒い柔らかそうな上着の下にモスグリーンのシャツ、そして黒い細身のパンツを履いている。その上に更に黒いエプロンを着け、腰に回したベルトには大小様々な鍔が刺さつていた。

格好からすると庭師であつた。ということは、彼女がハイネさん

なのかもしれない。

彼女はバケツを片手にぶら下げ、小さな歩幅でゆっくりと進んでいる。

すれ違つ間際になつて、彼女はようやく私に気付き、顔を上げた。薄い灰色の目と同じく色素の薄い唇が驚いたように開かれる。丸い目と低い鼻を持つ、幼い顔立ちをしていた。

「おはよう」やつまや

一応私のほうは挨拶したが、彼女のほうは再び下を向いて、やや体を硬くしながら去つて行つた。

北東館手前の門に着くと、一イイが番をしていた。

今日はエプロンドレスではなく、濃い赤を基調とした動きやすそうなパンツルックだ。よく見ると金のラインや王家の紋章が入つてゐるので、女性用の騎士の制服なのかもしれない。近衛兵に女性が何人かいるのは知っていたが、女性騎士がいるのは王家の親衛隊くらいである。滅多にお目にかかるものではない。

彼女は私を見ると大きく手を振つた。

「やつほー オルカつ。 霧が晴れて来て良い朝だねえつ

一イイは霧があつたがかるうがテンションが高そつである。

「ニイ、その制服つてもしかして騎士の？」

「あ、この格好？これは騎士の制服だけど、あたしは騎士じゃないよー。動きやすい服が欲しいって言つたらシユルツが貰つて来てくれたんだ。かつこいいっしょー！」

「ええ、とでも

本当にその制服は格好良かつた。ただニイは出るとじるが出ている体系なので、少しきつそうではある。

「ニイは侍女もやるし、門番もやるの？」

「そだよ。あたしはオールマイティな役職なの。庭師をやることもあればコックをやることもあるよ。今日はシユルツがお休みの日だからあたしが門番

「ふうん。あなた不審者が来たときに鬪えるの？」

「まあそれなりにねー。あたしのことについては次があれば次に話すよん。とりあえずジゼル様んといこ、ゴーゴーだねえつ

『次があれば』。随分引つかかる言葉である。ということは次がない、つまりニイと会うのはこれが最後の可能性もあるのか。

今日ジゼル様に呼ばれたのは、てっきりいつもの気まぐれかと思つていたが、もしかしたらそんな軽い話ではないかも知れない。少し寂しくはあるが、それならそれでスマートである。私も今日彼には別れを告げようと思つていたから。

少しばかり物憂い気分で、私はニイのもとを去つた。

門の先の小さな広場では煉瓦の敷かれた円の中心で、噴水が優しげに水を流している。わざとあるのか自然に生えたのかはわからなが、一部を覆う緑と赤の薦が水に濡れて綺麗だった。

館の扉は開け放たれている。そつと中を窺つても誰もいないので、思いきつて足を踏み入れた。

夜來たときよりも生活音が雜多になつた氣はするが、それでもひつそりとしていることに変わりはない。

「すみません」

とりあえず中に向かつて呼びかけてみた。
すると一階の奥でドアの開ぐ音がして、直ぐにこの館の主が顔を出す。私はほつとして息を吐いた。

「遅かつたな」

第一声がこれかよ、と思うが、不思議と彼の傲慢な態度はさほど氣にならない。逆にいつそ清々しさとさえ感じてしまえるのだった。

「遅くなつてないですよ。朝礼の後直ぐ來たのですから。それに、私ここに來る前に皇太子様にまで呼び出されたのですよ」

皇太子様の単語を出すと、シゼル様は肩を上げる。

「皇太子が?……まあ、それならそれでいいが」

と、何やら複雑な顔で「よ」によ言つていた。その様子が少しおかしくて、私は顔に小さく笑みを浮かべた。

シゼル様はいつも、必要最低限の感情を表に出し、必要最低限の言葉を表出す、といったふうな印象が強い。

その彼が怒るとも悩むとも違つ妙な顔をして、独り言のような文章を並べるのが奇妙であった。

「応接間に行く」

そう言つて、彼は再び廊下の奥に消えた。
私もその後を追いかけた。

応接間には既にお茶の用意がしてあつた。

私の座つた席の前に、琥珀色のお茶の入つたティーカップがひとつ。シゼル様の前にも同じものがひとつ。机の端には盆と魔法瓶が置いてある。

「イガ門番についているから、お茶の世話をする人がいないのかもしれない。

別に構わないが、どこまで人手が少ないんだろう。

湯気が全く見えないとこからすると、もう冷めてしまつているらしく、シゼル様が「遅い」と言つた理由がわかつたような気がした。何となく申し訳なく思つ。

私がじつと紅茶を観察しているのがわかつたのか、シゼル様がこんなことを言つた。

「その茶は、私が良いと言つまで飲むなよ」
「どうしてですか？」

妙な要求をしてくる人だ。

彼は不敵に笑んだ。

「とある秘密がある。飲んだ後のお楽しみだ」
「もしかしてノトリヤーヤとかいう果物のお茶だつたり？」
「そんな変な名前の果物は知らん」
「今朝皇太子様が出してくれたお茶が、そういうものだつたのです」

シゼル様はさらに口角を上げた。

「そのよつなつまらない秘密ではない。いいから私がいいと呟つま
で飲むなよ」

「はあ」

胡散臭い人が胡散臭いことを言つている。正直飲んで良いと言わ
れても飲みたくない。

話が一区切りついたので、私は抗議を口にすることにした。

「それにしてもシゼル様、酷いです。イヴアンさんが腰抜けだつて
こと、教えてくれたらこんな目に合わずに済んだかもしれないのに」
「イヴアンが腰抜けだとは私も知らなかつた。書面でやり取りして
いるのは仕事の内容のみだ。性格などは量れない」

「えー。じゃあ何であの後一々を急に送り出してきたのですか
「事態がどんな風に進展していくのか、興味があつてな」

心配とかじやなかつたんかい、と私は心中で悪態を吐いた。
結局どうこう過程を辿るのであれ、行き着く結論は「シゼル様は
優しくない」とことになる。

「少なくともそう都合良いくとは思つていなかつた。その点はあ
なたにも忠告したはずだが」

「ああはー、そうでしたね、ええ、そうでしたとも……」

どんなに胡散臭かるうが、これからはシゼル様の話をきちんと受け止めるよ。私は肅々と反省する。

「随分と參つてこよつだな」

重い溜め息を吐いた私を気遣つてか、そんな言葉をかけてくれる。

「相当参りますとも」

「何故行儀見習いを辞める?」

「え、と私は息を呑んだ。ニイにゃえ、そのことはまだ言つていな
いはずなのだが。

「ミルキアに聞いた」

私の心を読んだかのように、シゼル様は答えた。

「ああ、そういうえばミルキアさんもシゼル様派でしたっけ

「それは違うがな」

「だつて私が辞めるつてこと、シゼル様にちくつてるじゃないです
か」

「彼女には彼女なりの考え方がある」

そう言つてシゼル様は少しつまらなさそうな顔をした。

シゼル様にまでこのよつたな顔をさせることができるだなんて、ミ
ルキアさんはやはり問題児キラーな気がする。

「まあそれは今はいい。何故あなたは行儀見習いを辞める?」

「何故つて……。それは先程申しました通りです。私は今の状況に
相当参つてているのです」

「つまり状況が一変すれば、あなたは辞めるつもりはない、と」

私は姿勢を正した。

「状況を変える方法をお持ちなのですか?」

自分が実家に帰れば済む話なので、今更状況を変えて欲しいとまでは思わなかつたが、私はシゼル様の考え方そのものに純粹な関心があつた。

じつことじとも、彼ならどのよつた行動を取るのだろうか。

「状況、といふか、環境を変えることなりできぬ」

「環境を変える一番手つ取り早い方法が、行儀見習いを辞める、といふことだと思つのですが」

シゼル様は目を瞑つてゆづくじと首を横に振る。

「いや。もつと手つ取り早い方法がある」

彼は私の方向に用い得る全意識を集中させつてゐるよつだつた。その顔から全ての感情が消え失せる。それは起き得る何もかもを覚悟したよつな、そんな潔い無表情だつた。

「オルカ。私の近侍にならないか

な。

空腹も、思い煩いのあれこれも全部吹つ飛んで、これ以上ない程の単純な驚きが私の全てを支配した。

全部吹つ飛んでしまつたため、当然何かを言つことなどできやしない。思考が纏まらないどころか、素直な感想すら浮いてこない。

何も言えずにシゼル様を見つめていると、沈黙の時間と比例して、彼の無表情に翳りが生まれてきているような気がした。それに理性が焦つたのか、ふつりふつりと取り留めのない思いが段々湧いてく

る。とりあえず何か口に出さねばと思つた私は、その感情を浮かぶがままに発した。

「シゼル様の近侍とか、大変そうですね」

「そうかもしれない」

「シゼル様優しくないですものね」

「否定できない」

「この館の人達みんな変人っぽいし」

「それは私のせいではないがな」

「でも、みんな根っからの性悪ではなさそうですね」

「どうかな」

「シゼル様は気まぐれに優しいときもあるし」

「気まぐれな優しさは、優しいと言えるのか」

「私、この城に来て尊やう慮めやらで性根鍛えられたので、大変な仕事でも頑張ります」

「それは心強いことだ」

無表情なシゼル様だが、発する空気が少し優しくなつた気がした。

「阿保だけど良いですか？」

私がしたその質問に、彼はやつと擦れた笑みを返してくれる。

「阿保だからいい」

私は彼の素直でない笑顔に何故だか見惚れてしまつて、いつの間にか嬉しいような悲しいような変な顔をしていた。

「あの、じゃあ、よろしくお願ひいたします」

そう言つて頭を下げる。シゼル様の笑みが深くなる。

これつてヨーディス家の法則でいくと悪い兆候なのだけれど……
あれ、大丈夫だよね、私。

「言質は確かに取つたからな」

「……今つて感動的な場面じやなかつたでしたつけ」

「そうなのか？私は別に感動を求めているわけではない」

「そりやそうでしようけど」

あつれー？と私は首を捻る。

さつきまでの自分よ、何故こんな男に見惚れだし。

「それで、先に言つておきたいことがある」

「えちよつと待つて先じやないでしょう言いたいことを言うには遅すぎるでしょう言質取られた後じやないですか不利じやないですか」

「つむさい黙れ」

「……」

シゼル様は目を細めて腕を組んだ。

ついさつきまで顔にさしていた翳りは氣のせいだったのだろうか。もしかして絶妙な演技だつたのだろうか。

私はひつそりと目の前の尊大な男を睨んだ。

見えていないので当たり前だが、そんな視線は物ともせずに、平坦な声で彼は言つた。

「実は私は、皇太子の兄だ」

「うたいしのあに？」

「交代、死の兄？」

「物騒な区切り方と発音をするな。つまり私は王族であるということだ」

「Oh! 賊!」

シゼル様の発するオーラが氷点下の温度になつてきたので、私は彼の述べた情報を混乱する頭の中で真面目に分析した。

まず皇太子の兄であるが、つまり皇太子様のお兄さんであるということなのだろう。そして王族であるということなのだから、王家の人のなのだろう。あれ、必死に分析した割には情報を噛み砕けてないよね。ていうかそのまんまでよね。そのまんまでわかるはずなんだよね。

シゼル様は、皇太子様の兄で、王族。

「シゼル様王子様説！？」

「説ではなく事実なんだが」

「斬新な妄想ですねー！」

シゼル様はふう、と短く溜め息を吐くと、また表情を一切消して、私のほうに全意識を向ける。

「オルカ」

射抜くような、包むような響き。その一言で、力が抜けてしまつ。彼の言葉が真実なのだと知らされた。

「王子様……王子様ですか。まあ確かに高貴な雰囲気は醸し出しますよね。でも雰囲気だけ高貴で実態は浮浪者ってかんじですね。高貴な浮浪者。うん、良いキャッチフレ……」

「何故あなたはそんなに現実逃避をしたがる」

「うう……だつて信じたくないですもん」

「私が王子だと不都合か」

「うーん……面倒そうではあります」

「そう、面倒そうではあるのだ。」

「王子様となつてくると、身分のことを色々考えて行動せねばならない。」

「そして王子様の近侍となると、仕事内容も単純ではなくなつてしまふ。」

「できるならこの事実は知らずにいたかった。得体の知れない偉そな研究者として接していたかった。」

「まあ……仕方ないのでいいでしょ、それは。あ、私今更シゼル様を王子様として扱うとかできないので」

「ああ。今まで通りに接してくれ。というか、確かに私は王の子ではあるが、王子のステータスは一切持つていない。本来存在していない人間なのであるから、人権すら危うい」

「……踏み込んで聞いてもよろしいでしょか?」

シゼル様は大袈裟に頷いた。

「教えよう

そう言つた彼の顔は、私を憐れむかのような笑みを浮かべていた。

長子の出産の際、双子が生まれたときには市井に出でねばならぬい。

王家にはこのよつよつしたたりがあるらしい。

理由はやはり、王権争いが熾烈化する可能性が高いから。そして、王が双子の片割れであるとイメージが悪くなるからだそうだ。

ディーダ様とシゼル様は一卵性双生児で、しかも長子であった。よつて生まれて直ぐ、ディーダ様より後に引き出されたシゼル様は、王家と交流の深いある商家に、養子として引き渡された。勿論内密に、である。

ディーダ様はシェーヴラーグのたつた一人の王子として、シゼル様は裕福な商家の息子として、お互いのことなど全く知らずに育つていつた。ある時までは。

それは十数年前に起こつたらしい。

ひどい雷雨の日だつたそつだ。

南館の近くに生えた一本の背の高い樅もみの木に、雷が落ちた。木は南館に向かつて倒れてきて、被害はさほど大きくなかったがある部屋の硝子を突き破つた。

それはディーダ様の私室であり、まさにそのとき彼は窓辺にいたらしい。

咄嗟に後退したので体は軽傷で済んだ。しかし飛び散った硝子の破片が両目に入り、結局ディーダ様は盲目になつてしまつたのである。

その時を境に、彼の今まで見ていたものが無になった。

とりわけディーダ様は油絵を描くのが好きだったそうで、美しいものも好きだった。

しかしあの日の一瞬があつたために、己の愛していたものが何の意味もなさないものに変わったのだ。

この経験は、ディーダ様の精神を大きく損なつてしまつたらしい。永遠の闇に閉じ込められた彼の心はどんどん不安定になり、やがて本人曰く歪んで、また狂つていつた。

盲目になつた上に精神を病んだ息子を見て、王様と王妃様は大層苦惱した。当時の彼を見る限り、とても民の上に立つて采配を振るうなどできそうにない。

散々悩んだ結果、王様は苦汁の決断をした。

ディーダ様とシゼル様を入れ替えることにしたのだ。

二人は、今でこそ似ても似つかないような人間ではあるが、幼き当時は瓜二つの容姿容貌だったそうだ。

そういうえば一人とも銀髪に水色の目であるし、背格好も同じくらいであるし、顔のパーツは似てなくもないかも知れない。

境遇や体の鍛え方、性格が全く違うので、「高貴な浮浪者」と「野生の王子」という別々のタイプになつたのである。兎に角雰囲気が両極端なので、言われるまで気が付かなかつた。

ディーダ様は入れ替わるとき、一つの選択肢を「えられたらしい。ひとつは、今までシゼル様が暮らしていた商家で、今度はディーダ様が息子として暮らす、というもの。

そしてもうひとつは、王宮敷地内のある区域に生涯幽閉される、というものだつたそうだ。

ディーダ様は後者を選んだ。このときシゼル・ショーヴラーグといふ名の人間は死んだものとされ、表向きには世界に存在しないものになった、ということだった。

話を最後まで聞き終わり、私はふとした疑問を口にする。

「どうしてシゼル様は、幽閉されることを選んだのですか？」

どちらが自由かといつたら確實に商家の息子であろう。王家が懇意にしている家柄なのだから、生活も安定していくようなものだ。私だったら商家を選ぶし、それが普通な気がする。

シゼル様は曖昧な笑みを浮かべた。

「さあ、どうだつたかな。昔のことだから忘れた。狂つてもいたし」

反射的に嘘だ、と思つた。

この顔から察するに、絶対何か考えがありそうである。

まあ彼がこう言つている以上、突き止めたいとも思わなかつたが。

「じゃあこの立ち入り禁止区域は、シゼル様を隠すための区域だつたのですね。研究者とかいうのも嘘ですか？」

「それはまあ、嘘ではない。ただ、私が王子であるという事実を隠蔽するためのダミーの真実だから、虚構ではある。立ち入り禁止という時点で、この区域がそれなりの『訳有』であることは誰でも勘付くだろう。その真実を隠すには、やはりそれなりの『訳有』が必要だ。よつて国家機密の研究という、真実を隠すための真実が作られた。これは私に仕事を与えるためでもある」

「成る程。ミルキアさんや一イも、そのことを知つていいのですか？」

「ああ。基本的にこの屋敷に居を持つ者、それから王家との腹心のみが全事実を知っている。アリシアやイヴアンなど、どうしても私と接触せねばならないような者や、偶然私を目撃した者などには、半分の真実、つまり研究者で通している。勿論これも口外してはいけないことになっている」

流石国家クラスの秘密。用意周到である。

「でも、そうすると私などに王子であることを教えてしまってよろしいのでしょうか。私は行儀見習いで来ているわけであって、ここに居を持っているわけではないのですが」

シゼル様は薄く笑つた。

「ああ。だからあなたに話したことも、真実ではあるが、真実の全てではない」

謎はさらさらあるのか、と私はやや呆れた。

「シゼル様が今明かそうと思つた真実は、以上でしょうか」

「そうだな、今のところは」

「そうすると私は、何故あなたを見てしまったときに、ミルキアさんの様子が極端におかしくなったのか、とか、何故王家の方々が私のことを気にするのか、とか、何故新米侍女のアリシアが、國家機密の食事会で給仕に駆り出されたのか、とか、そういうことは聞かないほうがよろしいのでしょうか」

「……そうかもしれない」

「ひとつ、お聞きしても良いですか?」

「何だ」

「シゼル様ご自身は、私の味方でしょうか。それとも敵でしょうか」

シゼル様の目は僅かに見開かれた。それから、愉快そうな顔をする。

「どうだらう。状況にもよる。私としてはあなたのこととは気に入っている。しかし、最終的に自分があなた、どちらを有利にするかということになれば、私は恐らく自分を選ぶだらう。」

「そうですか？」

余りにもシゼル様らしい答えたが、彼は最後にこう付け加えた。

「ただ、私を敵とするか味方とするかは、恐らくあなた次第であろうな。」

そう言つた彼の虚ろな瞳に魅入られて、私は動けなくなつてしまつた。緊張で唾を飲み込む。

何が、と問われると上手く言えないが、もうそれで十分だった。

「他に何か質問は？」

彼が足を組み換えたところで、私は呪縛のよつた拘束から解かれれる。

自由になつたとき、私の胸には確かに強く温かいものが宿つていた。

それを自覚して、私は決意と覚悟を固める。

「いいえ。あとは何も」

ゆるゆると首を横に振つた私は、笑つていたように思つた。

何故だか今は、どんな試練や挑戦にも立ち向かえるよつた気がしたのだ。

私の明るい声に応じてか、シゼル様も楽しそうな顔をしていた。

「では、その茶は飲むなよ」

予想外のことを言わされて、私の強かな心持ちは一寸白紙に戻った。
『では』って。どんな関連があるのか。

「どうしてですか?」

「その茶が、我が研究施設の努力の結果だからだ。まあこれに関しては、私はさして貢献していないが」

「……まさか毒ですか」

私は白い目でシゼル様を眺めた。

「近からず遠からず。毒とも言えるし、治療薬とも言える。ヘイヴィーボーンをご存知か」

その名前はおぼろげながら聞いたことがあった。
アリシアの植物話で覚えている数少ない記憶だ。どうして覚えているかというと、彼女の^{うんちく}蘊蓄にしては珍しく、何やら物騒な話だったからだ。

「ツェーヴラーグでは全面的に所持・育成が禁止されている毒薬の原料ですよね。確か二十年近く前に、国内のものは全て焼却処分された、とか」

シゼル様は僅かに驚いたようだつた。

「よく知っているな」

「花好きの友人……っていうかアリシアなのですが、彼女から聞きました。可愛い花を咲かせるのでしょうか?」

「まあそう言えるのだろう。うちではこの成分を利用して、全健忘誘発剤を作るのに成功した。その茶に入っているのがそうだ」

「ゼンケンボ・ウユウハツザイ？」

「早く言えば忘れ薬だな」

「な」

私はしげしげとティーカップに入った琥珀色の液体を見つめた。言われてみると普通の紅茶より若干色が濁っているような気もするが、気のせいだ済ませることができる程度だ。

「……どういった場合に、私にこれを飲ませる気でいたのですか？」「そこまでは言えないな」

シゼル様の唇が歪む。

「因みにこれを教えたのは私の『気まぐれの優しさ』だ。あなたの言つところの、な。本来あなたはこれを知つてはならない」

「私にどうしようと？」

「さあ。この情報が本当にあなたの役に立つかどうかもわからない。私からの礼儀として受け取つておいてくれ」

「……わかりました」

果てしなく煮え切らない気持ちであるが、私は大人しく頷いた。覚悟したはいいが、やはり相手がシゼル様となると一筋縄ではいかないようである。

「それと、あなたの行儀見習いの期間は残り如何程か？」

「ええと、来年の七月までですね」

「では原則的に、それまであなたの活動可能区域は北東館と北東庭園のみになる。事情を知らぬ外の者とは、書簡などでの連絡もとれ

ない
え

嫌というわけではなかつたが、純粹に吃驚した。それではまるで
今まで幽閉されているみたいではないか。

いやしかし幽閉されているシゼル様の近侍なのだから、それが普
通なのだろうか。その論理でいくと、これから休日全くなし！？

「手紙も駄目ですか……」

「駄目だ」

「ていうか行儀見習いの期間が終わるまでつてなると、一年近くあ
りますよね。流石にその間何の音沙汰もないと、家族が心配すると
思つのですが。勿論私の家族にだつてシゼル様のことは教えられな
いでしよう？」

「そうだな。だから、これからあなたには一歩離れておらう」と
する

「はあ。どんな？」

「後で置き手紙なるものを書け。『虚めと婚活が果てしなく嫌です。
旅に出ますので探さないでください』みたいな」

「うわあ。私だったらやつりかねない」

「だらう？」

大層楽しそうな彼の姿を見ていたら、もう細かいことはどうでも
良くなつてきた。

私は息を吐くとむんと胸を張つた。

「わかりましたよやりますよ。仰ることは何でも」

「ほう。感心な心構えだが、そう安請け合ひして良いのか？」

「拒否できるのですか？」

「できないが

やつぱりシゼル様は意地悪だ。
自分で聞いておこしてこれかい。

「もう良いのです。私は覚悟を決めましたから。とつあえずどんなに胡散臭からうが従つて差し上げます」

「覚悟？」

「そうです。あ。何の覚悟かは内緒です」

私はこいつと微笑んだ。

内緒、づくしのシゼル様に対するわれやかな反抗である。
まあ、そうでなくとも言えるよつなことじやないけれど。

「ふむ。ではおこおい探つてこくとじよつ」
「やれるもんならやつてみうです」

面田があるので強がつておぐが、彼が相手となると簡単に暴かれ
そつで怖い。といづか、既に暴かれている可能性は多分にある気が
する。

「では、一先ず話はこれで終わりだ。荷物を纏めたらまたここに来

い」

「すぐこ、ですか？」

「すぐこだ。勿論この件に關して危険はするなよ、できなことは思

うが

「了解です」

私としても、もつ食堂で注田されるのは懲り懲りだったので好都合ではある。

話に区切りがつき、シゼル様が立ち上がる。私もそれに倣つた。出口に歩いて行き扉に手をかけたところで、彼の動きが止まつた。

「そういえば、皇太子とは今朝どんな会話を?」

「皇太子様と?」

私はえーと、と考える。

今現在のイベント内容が濃過ぎて、皇太子様との会話など随分昔のように感じられた。

「ああそうそう、私に関する噂の真偽を聞かれたのでした」「それだけか?」

シゼル様の顔がこぢらに振り向く。

「主な話はそれだけですけど。あ、世間話とか社交辞令とかはありましたけどね」

「へえ」と呴いて彼はドアノブを回した。

「それがどうかしました?」

扉を開けて待つてくれるシゼル様に、私は疑問を投げかけた。

「我が弟ながら意氣地のないことだと思つて」「意氣地のない?」

「ああ」

小さくお礼を言つて、廊下に出る。

まあ少し頼りなさそうだとは思つが、今朝の会話で意氣地がないとは感じなかつた。

首を傾げたとき、シゼル様の静かな声が飛んで來た。

「オルカ」

「はい」

彼は応接間の扉を完全に閉めると、突然片手を私の顔に伸ばして來た。

私は咄嗟に小さく仰け反るが、いきなりのことだったのでそれ以上は動けない。

彼の指先が、とん、と瞑つた瞼の上に乗つた。そこから伝つようとにして五指は上方に滑つていき、やや強く頭を掴まれる。

「あなたは売約済みだからな」

「勿論」

反射的にそう反応していく、私は自分で驚いた。考える間もなく、ぐぐぐく普通に、私は領いていたのだ。

流石に恥ずかしかつたので、悟られぬように口だけを動かしてシゼル様を見る。

彼が満足そうに笑つてゐるのがせめてもの救いだつた。

またシゼル様が庭園の門まで送つてくれると誓つので、我々は一人で館を出た。

どうせ後ですぐに会つのだから、と丁重に断つうとしたら、彼はこんなことを言つた。

「庭園の門でミルキアが待つてゐる手筈だ。彼女があなたを見てどんな反応をするのか見ておきたい」

「物好きですね」

「違う、これは調査だ。ミルキアは敵にすると一番厄介かもしけん。意味は教えないがな」

そうですか、と唇を尖らせながら、彼の言葉には大いに共感せざるを得ない。

そんなわけでシゼル様を前にして石階段を降りていたのだが、彼が急に立ち止まつたので私はその背中に鼻先をぶつけた。デジヤ・ヴ。

「これはこれは。皇太子殿ではありますんか」

慇懃無礼バージョンにシフトしたシゼル様の台詞を聞いて、私は少し驚く。

彼の背中から顔を出すと、石階段を降りた先に確かに皇太子様が立つていた。彼はひょっこり姿を現した私を見ると、少し啞然とする。まあ、勤務時間内にこんなところにいるのは確かにおかしいだろ？。

シゼル様は階段を降りることはせず、その場にとどまっている。彼が段の中央にいるため、私も頭を覗かせるのが精一杯だ。

これってかなり失礼な態度だよね。シゼル様の過去話を聞いた後だから、彼の王族への応対の仕方に納得はしているけれど。

皇太子様は私とシゼル様を見比べ、やや眉をひそめた。

「シゼル。何故彼女がここに？」

意外にも皇太子様はシゼル様を呼び捨てにした。仲が良いのか、或いはその逆か。

「何故そんなことをお聞きになりたいのですか？」

無機質な聲音でシゼル様が言つと、皇太子様は眉を吊り上げる。こんな顔ができたのか、と少し驚いた。

いつもの困り笑いよりかはよっぽど男前である。

「シゼルおまえ、自分の行動に責任を持て！」

私は息を呑む。

皇太子様からは、今にも階段を駆け上りシゼル様に掴みかかりそうな獰猛さが感じられる。

普段の彼からは想像もつかないような空氣を出していた。

反してシゼル様の空氣は、冷ややかなものになつた。

「勿論私は責任を持つて行動しておりますが、何か」「なつ……」

どうやら仲は悪いようである。

皇太子様は一瞬絶句し、その直後先程よりも更に大きな声で叫んだ。

「彼女はモノではない！一人の人間だ！その運命を、おまえは易々と……」

「その言葉、そつくりそのままあなたにお返ししましょうか。私はモノではない。一人の人間だ。その運命をあなたは易々と……何でしたか？」

皇太子様が無言で唇を噛む。

「出過ぎたことを申し上げたようで。お詫びいたします。何、私は恨んでいるわけではありませんよ。望んでここに居るわけですから。あなたには恩義すら感じています。しかし皇太子殿下は大層お優しい方でいらっしゃいますので、私がこう言えれば何も口出しできないのでしきうね。それを踏まえての発言ですから、気に病まないようお願い申し上げます。さて、あなたはこのような場所にどのような御用でしきうか」

「オルカ嬢を……探していた」

その声は、先の激怒が嘘のように弱々しかった。

シゼル様はシゼル様で、さらに冷えた空気を発する。

「ミルキアか」

私には何のことと言っているのかわからなかつたが、皇太子様は無言だったので肯定したようだ。

ふいにシゼル様が私のほうに振り返った。私に向けたその顔は不機嫌そうではあるものの、冷ややかではなかつたので少し安心する。

「オルカ。皇太子殿があなたに話があるそうだ
「はあ」

今朝も話したのだから、そのとき纏めて言つてくれれば良せうなものだが。言い忘れたことでもあつたのだろうか。

シゼル様が道を空けたので、私は隣に並んで彼を見上げた。その気配に気付いたのか、彼は小さく頷いて私の背中をそつと押す。

「送れなくて悪いな」
「いえ。どうせまた直ぐ来ますし」

小さく言葉を交わすと、シゼル様は薄く笑う。私はそれを見届けて階段を降りて行つた。

「改めまして、御機嫌よう、皇太子様」

皇太子様は顔を上げた私と目が合つと、現実に引き戻されたかのような顔をした。

「あ、ええ。今日一度目ですけれども、ご機嫌麗しゅう、オルカ嬢」

礼をして、あの締まりのない笑みを浮かべる。

「少し、話をしてもよろしいですか?」
「ええ、勿論」

すつと私の前に、節くれ立つた手が差し出された。

私は少し躊躇つたが、シゼル様が盲目であることを思い出し、手を重ねた。断ることなんてできないし。

皇太子様は、さうもなく私の手を包むと、ゆっくり歩き出した。

庭園の門にミルキアさんの姿は見当たらなかつた。
いる手筈だとシゼル様が言つていたが、予定が変わつたのだろうか。

代わりというわけでは勿論ないだろうが、ハイネの畑にはまだあの庭師の女がいた。しゃがみ込み、草を切つてバケツに入れている。私達に気付いてちらりとこちらに目を向けたが、見てはいけないものを見てしまつたかのようにすぐに逸らした。しかしその場を去る気はないらしく、再び作業に戻る。

皇太子様は畑の中程まで来ると、歩みを止め、そつと私の手を離した。

ここは前後の門番も見えない位置だ。

彼は庭師のほうを向いて、呼びかけた。

「ハイネ」

やはり彼女がハイネさんだつたようだ。

彼女は今まさに鍔を入れようとしていたところで動きをぴたりと止め、振り向きもせずに掠れた声を発した。

「何

皇太子様相手に一介の庭師がこんな態度で良いのだろうか。先程彼の意外な一面を見てしまったこともあります、私は肝を冷やした。しかし当の皇太子様は特に気にしていないようだ。

「ここでこのお嬢さんと話がしたいのです。少しの間、二人きりにしてくれませんか」

ハイネさんは無言で、ちょきん、と鍔を動かし、切った草をバケツに放り込む。そしておもむろに立ち上がり、挨拶は愚かこちらに見向きもせずに去つて行った。

皇太子様は彼女が見えなくなるまで見送ると、苦笑を浮かべて私を見る。

「礼儀のなつていらない女性ですが、許してやってください。彼女は私のことが好きではないのです」

「気にしていませんわ。彼女がこの畠の主なのですね。名前が畠の呼び方に使われていることを考えますと、大層腕の良い庭師様なのでしょうね」

「ええ、まあ」

曖昧な態度で皇太子様は頷いた。

「それで、話というのは……」

「ああ、そうなのです。すみません、一日に渡つて一度も呼び出し

てしまい

全くだ、と私は独りごちる。

この男、決して嫌いではないが、兎に角疲れるのである。

「あの、まず聞いておきたいのですが、もしかして先程シゼルに、何事かを頼まれましたか？」

頼み事、といつたら勿論のことだろう。

「ええ。近侍にならないかと持ちかけられましたわ」

皇太子様の顔が強張った。

「それで、あなたは何と？」

「引き受けさせていただきました」

彼の肩ががくっと下がる。その顔には落胆が濃く表れていた。
私がシゼル様の近侍をやると、皇太子様にとつては不都合なのだろうか。

「あんな噂が流れてしましましたので、このお話をお受けするのは、私は私にとっても有益でした。仕事では彼のことを主に相手にしていれば良いですから、世間の話を気にしなくて済むでしょう？」「であれば……私を信じて待っていてほしかったのです」

彼は悲しそうな目で私のことを見つめてきた。

う。これは反則である。やめてそんな目で見ないで。

私は皇太子様からやや目を逸らしつつ、彼の言葉の意味を問うた。

「……と申しますのは？」

「忘れてしまいましたでしょうか。今朝あなたと別れる際、言いましたよね。あなたの辛い境遇については、私のほうからも手を打つ」と

そういうえばそんなことを仰っていたような気もする。はつきり言って全く期待していなかつたので忘れていた。

「それで先程、父上に話をつけってきたところだつたのです。早速あなたに報告しようと思つたらミルキアがやつて来て、あなたはシゼルに呼ばれて北東館に向かつた、と。あなたの話を聞けば彼の近侍になるのを」承してしまつていたようで、その、少しがつかりしました

「は、はあ

そこまで言つて、彼は再びその水色の瞳に力を込めた。彼の目はシゼル様のそれとは違ひ純粋に澄んでおり、滑らかに輝く。

「ですが、ここで引き下がつては男が廢つてしまつますので、一番煎じになりますが言わせてください。オルカ嬢、どうか、私の近侍になつてくれませんか」

私は彼の意氣込みに氣圧され、若干後ずさつた。

「シゼルの近侍になるよりも、条件は良いはずです。行動も制限しませんし、あなたと接する可能性のある者には噂が間違いであることを説得しておきます。南館に良い部屋も用意しましょ。食事もそこでとれるように手配します。同僚も貴族の者ばかりですから、あなたのことつてきつと良き理解者となるでしょう」

少し焦るような早口でそこまで言つて、彼はすつと息を吸い込んだ。その頬が、少し赤く染まつてゐるよう見える。

「私の近侍に、なりませんか」

何だかまるでプロポーズのよつた雰囲気だな。

ほんやつとしう思つたとき、私の中である考えが閃く。それを裏付けるよつて、食事会の夜、シゼル様に言われた言葉も。

『皇太子はあなたのことが好きだつた。今もその気持ちが変わっていないかどうかはわからないが、少なくとも眞にはかけていな』

……もしかしてこの爽やか王子、今も私のことを？

いやいや自惚れはよせ、と自戒するが、どうしてもその考えは拭いきれない。

少なくとも私は彼のことを「爽やかだけど疲れる困つた君」としか認識していないし、この気持ちは将来も変わることないと思つ。『ぐぐぐ小さな可能性だつたとしても、いつこう跡は早急に摘んでおかねば。

とすると、まず行つべきは、はつきり断ることだ。

よつて私は眉尻を下げる微笑みを浮かべ、言い放つた。

「ぐめんなさい。私は既に売約済みですし、心変わりはありませんの。皇太子様がこんな小娘のことを気遣つてくださり感謝はしておりますが、私は是非シゼル様の近侍になりたいと思つておりますの

よ

皇太子様は力を抜くようにせや俯いた。

「そうですか。それは……残念です」

「どうかお気を悪くなさらいでくださいね。私は皇太子様の近侍をしたくないわけではなく、シゼル様の近侍をしたかっただけです。皇太子様には、きっと私なんかよりもふさわしい近侍の方がいらっしゃいますでしょう?」

言葉は柔らかく、しかしあんたに望みはないからね、ということを念のため全面に出しておく。

だつて、彼の捨てられた仔犬のような目を見る限り、私の予想はあながち間違つてはいない気がするのだもの。

しかし何だろ?、このプロポーズを断つたような空気は。

だが、私が折角これだけ念を入れておいたというのに、再び顔を上げた彼の顔は、意外にもそこまで弱々しくはなかつた。

「わかりました。あなたがそう仰るのであれば、私は引き下がります。ですが、言っておきますが、シゼルはなかなかに気難しい人間です。何か起きたときには遠慮なく私を頼つてください」

うーん、良い男である。

その言葉はこんな脳内花畠が枯れた女には似合わないよ。うむ。

「わかりましたわ。そのときにはよろしくお願ひしますね」

結局何もかもが中途半端な私は、彼の気持ちを徹底的に打ちのめすようなこともできないのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7452w/>

日陰貴族

2011年10月16日21時16分発行